

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル市・京畿道 水原市・忠清南道 大田市 論山市 公州市・釜山市

2012年8月29日(水) — 9月7日(金)

はじめに	2
1. 実施概要	4
2. 教育機関訪問	6
3. 学校訪問	14
4. スタディツア―	23
5. 成果	27
6. 今後の活動予定	61
資料	65

国際連合大学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は、同年より本事業のもとで開催されることとなり、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、今まで 12 回にわたり、1,400 名以上の韓国の教職員を日本に招へいしてきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣していました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を 20 名に倍増、さらに、2008 年には 54 名に増員し、日韓教職員相互交流の更なる発展を目指しています。

2012 年 8 月 29 日から 9 月 7 日に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、2012 年 1 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、及び 2013 年 1 月に受け入れていただく自治体や学校の教職員等が参加しソウル市、京畿道（キョンギド）水原（スウォン）市、忠清南道（チ

ュンチョンナムド) 大田(テジョン)市・論山(ノンサン)市・公州(コンジュ)市、釜山(プサン)市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。また韓国ユネスコ国内委員会による、「第5回 ESD 日韓教員フォーラム」に出席し、両国の持続発展教育(ESD)への理解を深めることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び京畿道教育庁、忠清南道教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2012年9月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1. 実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、2000 年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、2003 年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、2005 年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。2007 年には、文龍鱗（ムン・ヨンリ）元韓国教育部長官からの招請により、中曾根弘文元文部科学大臣を団長として日本教職員 26 名が韓国を訪問した。2011 年までにのべ 316 人の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。2009 年からは「ESD 日韓教員フォーラム」が開催され、両国の持続発展教育（ESD）の理解を通じた交流プログラムとなっている。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等 53 人が 2012 年 8 月 29 日から 9 月 7 日の 10 日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) 2012 年 1 月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) 2013 年 1 月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) ユネスコスクール加盟校から公募により選抜された教職員の計 48 名および、国際連合大学、文部科学省とユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた 53 名である。訪問団の団長は文部科学省国際統括官付国際交渉分析官の岩本涉氏であった。

7 月 30 日、東京の国際連合大学にて、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学の秋葉正嗣大学院事務局長、文部科学省の岩本涉国際交渉分

析官、ユネスコ・アジア文化センターの島津正數事務局長の挨拶ののち、駐日本国大韓民国大使館の金甫燁（キム・ボヨップ）参事官より「韓国の教育事情について」と題した講義があり、現状や課題について具体的な説明を受けた。また、前年度参加者から前年度の体験談、アドバイスおよびその後の交流についての発表が行われ、参加者全員が本プログラムおよび今後の教育交流への目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、2011 年度参加の清明学園初等学校の横山豊治初等部長、千葉県八千代市立萱田南小学校の黒飛雅樹教諭である。その後、プログラム中の役割分担、訪問先からのリクエストに対する準備、日本文化紹介について参加者同士で打ち合わせを行った。

訪問団一行は 8 月 29 日に東京羽田国際空港から出発し、同日夕方に金浦国際空港に到着した。韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）から出迎えを受け、宿泊先のソウルロイヤルホテルで、KNCU による今回の訪問に関するオリエンテーションが実施された。

翌 30 日は朝 9 時からソウル明洞にあるユネスコ会館にて開会式が行われ、岩本団長より東日本大震災への韓国の支援に対して、厚く礼を述べることができた。KNCU の徐賢淑（ソ・ヒョンスク）協力事業チーム長より韓国のユネスコ活動と ASPnet についての説明があった。嶺南（ヨンナム）大学校教育学科の金載春（キム・ジェチュン）教授から「韓国における初等中等教育の現状」について講義があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との差異について理解を深めた。その後の歓迎昼食会には 2012 年 1 月の日本への招へいプログラムに参加した韓国教職員も参加し、日本教職員と再会した。

午後、第 5 回 ESD 日韓教員フォーラムが開催された。清州（チョンジュ）教育大学校の李仙景（イ・ソンギョン）教授、金男洙（キム・ナムス）教授より「持続発展教育のための学校と地域社会の協力」と題した講義を受けた後、韓国側からは汝山女子高等学校の崔敬允（チエ・ギヨンユン）教諭が「共に生きる地域作り・学校と地域社会間の協力事例」、日本側からは橋本市立高野口小学校の土田恵久教諭が「地域学習—いま昔プロジェクト」と題した発表を行った。その後、李仙景教授、金男洙教授主導のもと、学校と地域連携に関するワークショップやグループ討論が行われた。

夕方からの歓迎交流会では、訪問団と韓国教職員が交

流を深めた。歓迎交流会でも、2012年1月の日本招へいプログラムの参加教職員が参加しており、再会を喜び、更に親交を深めている場面も見られた。

31日、Aグループは終日ユネスコスクールであるソウル新龍山（シンヨンサン）小学校を訪問し、Bグループは、終日ユネスコスクールであるソウル徳義（トッキ）小学校を訪問した。学校訪問では、ユネスコスクール活動の紹介をする場面もあった。

9月1日は韓国教職員とともに、教育博物館や北村（ブッチョン）韓屋村などを訪問し、韓国教職員との交流を深めながら、ソウルの文化や歴史に触れた。

2日から4日までの3日間はA、B二つのグループに分かれ、Aグループは京畿道（キヨンギド）水原（スウォン）市を、Bグループは忠清南道（チュンチョンナムド）大田（テジョン）市、論山（ノンサン）市、公州（コンジュ）市を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

Aグループは2日午前にソウルを出発し、水原市へ向かった。水原市は京畿道の道庁所在地で産業、交通、文化、教育の中心地としてソウルの玄関口の役割を担う。一行はまず世界文化遺産である水原華城（スウォンファソン）を訪問した。ホテルへ移動しグループプログラムレビュー会議を行った後、同日夕方、ホームビジットがあり、ホストファミリーと交流の時間を持った。3日、Aグループは午前にユネスコスクールの汝山女子高等学校を訪問し、午後は非武装中立地帯（DMZ）を訪問し、汝山（ムンサン）女子高等学校の生徒たちとESD活動を体験した。4日、午前中にユネスコスクールである蒲谷（ボゴク）中学校を訪問した後、午後は京畿道教育庁を訪問した。

Bグループも午前にソウルを出発し、論山（ノンサン）市へ移動した。論山市は三国時代には百濟があつた場所である。一行は大田市に向かい、ホテルへ到着した後、グループレビュー会議を行った。同日夕方にホームビジットがあり、各家庭を訪問し、有意義な時間を過ごした。3日、ユネスコスクールである論山高等学校を訪問し、学校給食を体験した。午後は論山女子中学校を訪問した。4日は、公州の文化・歴史の地訪問として、百濟の古城である公山城（コンサンソン）および武寧王陵（ムリヨンワンヌン）、および国立公州博物館を訪問した。その後、

忠清南道教育庁を訪問し、忠清南道の教育について理解を深めることができた。

5日朝、A、B両グループは2回目のグループプログラムレビュー会議を行い、釜山（プサン）市へ向かった。

6日はコモドホテルにて本プログラムの報告会を行なった。A、B各グループは、韓国訪問で得た成果を今後どのように発展させていくかなどをテーマに発表した。Aグループは、蒲谷中学校で、全員が1人1クラスに入り、通訳なしで生徒達に授業を行った体験が非常に印象に残った、今後もこのような教師と生徒が直接触れ合う体験を続けてほしい、と述べた。Bグループは、訪問校で視察した放課後学校の仕組みや、ボランティアを活用した学校との地域連携について理解を深めることができた、と発表した。訪問校ではICTの設備などハード面が充実し、豊かな財政支援が行われていることについても言及した。その後、本プログラムと対をなしている毎年1月の韓国教職員招へいプログラムで訪日した韓国人教員による、プログラム後の活動事例についての発表を聞き、参加者全員が、本プログラムでの経験を今後の教育活動や教育交流に活かす決意を固めた。

9月7日の朝、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。



2. 教育機関訪問

韓国ユネスコ国内委員会
京畿道教育庁
忠清南道教育庁

今回の教育機関訪問は、ソウル市、京畿道(キョンギド)、忠清南道(チュンチョンナムド)にて、計 3 機関で行われた。

ソウルの韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)では、開会式および韓国の教育事情に関する講義が行われた後、日韓教員がともに持続発展教育(ESD)について意見を交換する「第5回 ESD 日韓教員フォーラム」が開催された。

韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU)
8月 30 日

開会式、韓国のユネスコ活動及び ASPnet の紹介、韓国の教育に関する講義、日韓教員フォーラム
日時 平成 24 年 8 月 30 日(土) 9:00~17:00
場所 ユネスコ会館 11 階ユネスコホール

【開会式】

はじめに、韓国のユネスコ活動が映像で紹介された後、韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU) の金承潤(キム・スンヨン) 協力事業本部長の挨拶があり、日本教職員一行の訪韓を歓迎するとともに、ESD 日韓教員フォーラムや学校訪問を通じ、韓国の持続発展教育(ESD) や文化、教育、自然環境についての理解を深めてほしいと述べた。続いて、在大韓民国日本大使館の常磐木祐一教育担当一等書記官より、今回のプログラムを通じ、韓国の教育の優れた部分を吸収し、日本に還元してほしいと参加者への激励があった。最後に、団長である文部科学省の岩本涉国際交渉分析官が、震災への復興支援についてのお札を述べた後、韓国の学校などの訪問を通して得た経験を、これから社会を担う子供たちに伝え、ESD

に繋げていきたいと意気込みを語った。

(岡山県岡山市立福南中学校教諭 枝本亜希)

【韓国ユネスコ活動及び韓国 ASPnet の紹介】

KNCU および韓国のユネスコスクール (ASPnet) について、徐賢淑(ソ・ヒョンスク) 協力事業チーム長が紹介した。

ユネスコの目的は教育による国際協力及び平和増進である。韓国は 1950 年にユネスコに加盟し、1954 年に韓国ユネスコ国内委員会が発足した。

パリのユネスコ本部は、1953 年にユネスコスクール事業を創設し、韓国は 1961 年に同事業を開始した。現在 134 校のユネスコスクールが活動している。ユネスコスクールに加盟すると、全世界のユネスコスクールとの交流が可能となる。2007 年度は一度加盟校が減っているが、加盟はしているが実質的に活動していない学校があったため除名したからである。2 年ごとに加盟校に対して審査を行っている。今年は新しく 46 校が申請した。2013 年には、ユネスコ、KNCU などが主催となり、韓国でユネスコスクール 60 周年記念国際会議を開催する予定である。

(岡山県岡山市立福南中学校教諭 枝本亜希)

【参加者の感想】

田中誠一…………韓国でのユネスコスクールの位置づけ、今後の教育制度の展望など、各校を見学するのに必要な知識が得られた。特に、ユネスコスクールの質を維持する努力については学ばねばならないと感じた。また、教育改革についても参考にする部分はあると思う。学校単位では対応できないことも多いが、考えを共有することは今後、韓国の学校と連携するのに役立つと考える。



ユネスコ関連の資料、出版物の展示



ユネスコ国内委員会にて、岩本涉団長（前列、左から4人目）、金承潤協力事業本部長（同5人目）

【韓国の教育に関する講義】



嶺南大学校教育学科の金載春教授

嶺南（ヨンナム）大学校教育学科の金載春（キム・ジェチュン）教授より、「韓国における初等中等教育の現状」と題した韓国の教育に関する講義があった。初めに学校数、教員数等の教育に関する基本データ、2009年および2011年に改定された教育課程の要点が示された。次に教育の特色として、各教室をそれぞれの教科専用の教室として整備し、毎時間、生徒が教室移動を行いながら授業を受ける教科教室制や教科書政策、絶対評価制度の導入、週5日授業制などが紹介された。特に教科書は、日本の検定制度に対し、韓国では国定、検定、認定と種類が分かれていることや、2012年から教科書の価格を出版社が自由に決められるようになったこと（教科書価格の自由化）、2014年から書籍型教科書とデジタル教科書が併用されることなど、今後の日本の教育制度を考える上で参考となる論点が多数取り上げられた。その後の質疑応答では、社会と道徳の教科統一、教科書価格の自由化によるメリットとデメリット、教科書採択の基準についてなどの質問があった。

（東京都多摩市立東愛宕中学校主幹教諭 田中秀周、大阪府河内長野市立美加の台小学校首席教諭 田中誠治）

【参加者の感想】

中山明美…………韓国の教育の現状について大変分かりやすい講義でした。特に、高等学校では、産業専門人材の育成を行う特性化高校のほかに、就職を目的としたエリート校であるマイスター高校の設置は、卒業生たちが今後、韓国の経済界でどのように活躍していくのか、大変興味深く感じました。また、大学進学制度が2014年に改編されることは、韓国の大学受験に対する教育熱がどのように変化していくのか、注目していきたいと思います。

飯島政範…………教育改正について小学校では10教科から7教科に減らし、教科群、学年群を取り入れ多様化を図っており、中学校では1~3年で総時間数を掲示し、各学校で自立的に20%の範囲で弾力的に設定している。道徳と社会を統合し教育しているが、日本の道徳の性質を考えると考えられないことである。

渡邊重則…………金教授による「韓国における初等中等教育の現状」は、韓国の教育の動向を知る上で大変参考になった。研修に参加する前の韓国の教育に対する思いを具現化することとなり、大変興味深く聴くことができた。また、以後に行う学校訪問への意欲が湧いた講義であった。

<ESD 日韓教員フォーラム>

本フォーラムは、日韓教職員約 70 名が一堂に会し、両国の ESD 活動事例を共有し、討論することで、両国教職員間の理解を深め、ESD を通じたネットワークを構築することを目的としている。2009 年から始まり、今回で第 5 回目の開催である。今回は「学校と地域社会の協力による持続可能な発展のための教育」というテーマであった。清州（チョンジュ）教育大学の李仙景（イ・ソンギヨン）教授によるテーマ講義を受け、日韓の教職員 1 名ずつの発表があった。その後、同大学金男洙（キム・ナムス）教授による日韓教職員合同のワークショップおよび討論が行われた。



【テーマ講義】

テーマ：持続可能な発展教育のための学校と地域社会と協力

発表者：清州（チョンジュ）教育大学 李仙景（イ・ソンギヨン）教授、金男洙（キム・ナムス）教授



ESD 日韓教員フォーラムにて李仙景教授の講義

ESD の実行には学校と地域社会のパートナーシップが重要であると述べた後、日韓教職員各約 50 名から事前に実施したアンケートに基づき、学校と地域社会の協力に関する日韓の認識と実態について発表した。アンケートによると、日韓両国の

教職員が、地域社会との連携の難しさや、地域社会とのコミュニケーション窓口やシステム構築の重要性を課題と認識している。最後に、学校と地域社会の協力を成功させるために考慮すべきこととして、①「何をすべきか」ではなく、「どうやって進行するのか」、それにより利害当事者が「どんなことを学んだのか」が大事であること、②パートナーをお互いに尊重すること、③効果的なプロセスと方策を探ること、④ESD のための学校と地域社会の協力は様々な形で成立することを理解すること、を取り上げて発表を締めくくった。

【韓国教員の発表】

テーマ：「共に生きる地域作り」—学校と地域社会間の協力事例—

発表者：崔敬允（チェ・ギヨンユン）（汝山（ムンサン）女子高等学校教諭）

生徒主導の地域との協力事例について、地域的特色を活かした協力事例と、学校と地域社会間「分かち合い」の協力プログラムについて報告を行った。地域的特色を活かした協力事例では、DMZ（非武装地帯）に隣接するという特色を活かし、平和と生態系保護意識を育むための市や市のボランティアセンター、市環境団体と連携した ESD 活動などを紹介した。また、学校と地域社会間「分かち合い」の協力プログラムでは、地域機関と連携したサークル活動の運営や韓国ユネスコ国内委員会の Rainbow 世界市民プロジェクトへの参加などについて紹介した。最後に、地域社会との連携は教員の力はもちろん、生徒の自主性も成功の鍵を握っていること、共に生きる社会を目指し、各学校のパートナーシップを通じて開かれた視野で地域社会との協力を考える必要がある、と述べた。

【日本の発表】

テーマ：「地域学習 ーいま昔プロジェクトー」

発表者：土田恵久（和歌山県橋本市立高野口小学校教諭）

児童自らが、高野口の歴史や文化遺産などを調べ、保護者や地域と協力して様々な活動を体験する「高野口いま昔プロジェクト」について紹介した。ふるさとへの愛着が将来の地域を支えていくことに言及し、実現するために運営協議会学校地域連携部会の協力も活用しながら様々な地域住民を巻き込んでプロジェクトを実施した様子を発表

した。成果と課題として、地域住民との打ち合わせの難しさや、地域から関わってもらうだけでなく、地域に還元できる活動を取り入れていくことの重要性を取り上げ、発表を締めくくった。

その後、質疑応答では、李仙景教授の進行のもと、発表した汝山女子高等学校の崔敬允教諭、橋本市立高野口小学校の土田恵久教諭が壇上に上がり、参加者からの質問に答えた。参加者からは、問題を乗り越えた具体的なエピソード、今の活動が未来へつながる取り組みをどう考えているか等について質問があった。

(千葉県成田市立玉造中学校教頭 関根寿典)



汝山女子高等学校の崔敬允教諭（左）と橋本市立高野口小学校の土田恵久教諭（右）



質疑応答

【討論および情報共有】

進行：清州教育大学 李仙景教授、金男洙教授

第2部では、「持続可能な発展教育のための学校と地域社会の協力について」のテーマで、8人のグループに分かれて、ワークショップ（グループ活動）を実施した。

それぞれのグループで個々の考え方やアイデアを出し合って、模造紙に書き込み、その後、発表をして共有化を図った。

はじめのワークショップは、2人1組になって背中合わせで言葉だけでコミュニケーションを行

う活動を行った。シート一枚を使い、シートをどのように変形させたかを言葉だけで伝えることを体験した。改めて言葉だけでのコミュニケーションの難しさを感じた。

次のワークショップでは、学校と地域社会の協力を推進する際、困難だと思われる点について Mind Map を作成した。模造紙にそれぞれの困難な点を自由に書き込み、議論をしながらグループとしての意見を中央にまとめて記入した。時間や地域及び学校の考えを共有することの難しさや、お互いが持つニーズやモチベーションの共有の難しさ、人材確保、生徒が校外で活動するときの安全面等について意見が出された。

3つめのワークショップでは、System Thinking を体感した。参加者が司会者の指示に従って、次のように室内を動く活動を行った。

①ある2人を心の中で思い、その人たちと等距離がとれるよう自分が動く活動。

②①のルールを継続させながら、司会者がある人ひとりにタッチしたら、タッチされた人はその場に座り、その人を思っている人も座るルールを追加。→全員が座ることになった。

③①②のルールを継続させながら、座った人が5つ数えている間に、その人を思っている人がヘルプに来てタッチすると復活するルールを追加。→誰も座ることがなかった。

これらの活動をとおして、「自分たちはシステムにとらわれていること」「システムは小さなことからでもすぐ壊れること」等を学んだ。またシステムの構成要素をよく分析して、初期段階で対処することの大切さを学んだ。また、17の System Thinking のアイデアも紹介された。

最後に、これまでに学習してきたことをもとに再度、グループ討議を行った。テーマは「学校と地域社会で何ができるか」である。それぞれの考えを模造紙に書き込んで、発表し共有化を図った。それぞれのグループから多種多様なアイデアが出され、それぞれの思いを共有したり、たくさんの情報を得たりすることができた。

参加者からは、ワークショップをすることによって教員同士の距離が縮まった、また、韓国の先生方との距離も縮まった、共に1つのテーマについて考えるということの大切さを感じた、という意見があった。ESDの取り組みには決まりきった形はない。ESDの根本概念を大切にしながら、イ

ンタラクティブな活動を積極的に行うことが大切である。ここで分かちあつたエネルギーを大切にして、実践に活かしていくことを確認しあつた。
(和歌山県橋本市教育委員会指導主事 辻脇昌義)



一体感を高めるためKNCUが製作した揃いのTシャツを着て、紙をどうするか、言葉だけで伝えるワークショップ



グループに分かれ、Mind Map の作成

【参加者の感想】

川上有正…………地域のマイノリティのために高校生が行った活動の実践報告がされた。高校生自身の問題意識を学校が支援して実現した活動であった。そこには学校と社会とのあるべき関係性が見えた。すなわち、社会の要請に応える学校ではなく、より良い社会を形成する学校である。社会形成主体としての生徒・教師像である。

佐伯貴昭…………「ESD のための学校と地域社会の協力」をテーマにワークショップを行ったが、両国とも共通の課題として「目的の共通理解」が上げられた点は興味深かった。また、System Thinkingについて自分たちでシュミレーションを行い、問題の初期に手を加えるとシステムは持続するという考え方方が ESD には必要であることを、身をもって学習した。

飯島政範…………ワークショップ System Thinking の活動を通し、「自分たちはシステムにとらわれていること」「システムは小さなことからでもすぐに壊れること」を学んだ。また、ESD の取り組みには決まりきった形はない。ESD の根本概念を大切にしながらインタラクティブな活動を積極的に行うことが大切であることを学んだ。

宮城明子…………ワークショップの中で印象に残ったのは、個人の取り組みがシステムに影響を及ぼしていく様子がわかるゲームである。70名近くの人の中から誰か2名を選び、その人がタッチされて座ったら、選んだ私も座らなくてはならないというルール。教授は1名しかタッチしないのに、あっという間にみんな座ってしまった。しかし逆にいうと、システムが悪ければ、個人の力が発揮されずに埋もれていく可能性があることにも気づかされた。

杉本伸樹…………李先生のお話では、「環境変動と人間の活動には密接な関係がある。」「現世代が未来世代の利益や要求を育てる。」という、ESD の基本理念を基にした教育実践のあり方について学ぶことができた。その中でも私が学校現場ですぐに実践してみたいことは地域連携である。私は市内で地域連携をキーワードにした子どもサミットという活動を行っていたが、地域の方の積極的な協力をいただいていたにもかかわらず、一過性の活動にとどめてしまっていた。これからは ESD の理念で活動を再構成することで、地域の方と認識を共有しあい、永続的な活動に結びつけることができると思う。

塙田崇之…………「学校と地域社会の協力を推進する際に困難だと思うこと」を Mind Map を用いて話し合った際、私たちのグループでは教師と教師、学校と地域の共通理解を図ることの難しさが挙げられた。この活動で様々な校種や立場の方々の意見を聞き、自分自身の考えを深めることができたことは大変有益であった。また、日程の序盤でのワークショップは参加者の距離を縮めるよいプログラムであった。

京畿道（キョンギド）教育庁

(A グループ)

9月4日

代表者：金相坤（キム・サンゴン）教育長

**特色：「新しい学校、共にする京畿教育」をビジョンに、
共に生きていく創造的な市民の育成に取り組んでい
る。154校の革新学校を運営するほか、無償給食、
無償教育の実現、ユネスコ韓国委員会と覚書
(MOU)を締結し、ユネスコスクールを通じた平和教
育の強化に積極的に取り組んでいる。京畿道ユネ
スコスクール協議会を運営し、計39校が参加してい
る。**

はじめにイ・ジンソク副教育長から歓迎の言葉
があり、岩本団長より今回の訪問受入れと震災支
援に対するお礼の言葉が述べられた。続いて、同
道の教育および特色事業についての映像上映があ
り、申承均（シン・スンギュン）指導主事より説
明を受けた。京畿道の教育は、欧州の良い事例に
学んで、各クラスの生徒数を25～30人に制限し、
主に討論やグループ型の授業を行い、校長と教員
に対しては学校の運営や教科課程の自主性を与える
「革新学校」の運営に力を入れていること、教育監が無償給食を選挙公約に掲げたこと、生徒の
人権条例を制定したことなどが紹介された。その
後の質疑応答では、防災教育についてどのように
取り組んでいるか、教育の力量を高める具体的な
取り組みなどについて質問があった。

（京都府与謝野町教育委員会社会教育指導員 東
垣茂男）



京畿道副教育長（中央手前）へ記念品贈呈

【参加者の感想】

大川直樹…………革新学校の教育システムや教
育実践を知ることができた。創造的知性教育とい
うものも大変興味があった。日本でも同じような
取り組みがあるので、両国の共通点を探ることが
できた。日本の教師は、時間がないなかで生徒の
実態やよりよい教育活動の追及から常に忙しい状
態が続いているように感じているが、このよう
にシステムが確立していると時間的な問題は解消す
るのではないかと感じた。

東垣茂男…………一番印象に残ったのは、選挙で
選ばれた金相坤教育長の公約の一つ、無償給食、
無償教育である。満5歳の幼稚園児～小学生全員
と一部の中学生（現在実施）、今後中学生と高校生
全員の無償給食を目指すこと。給食費滞納が
増加している日本でも必要な措置の一つだと感じ
た。それともう一つ鮮烈な印象を受けたのは、生
徒の人権条例の制定だ。学校は、体罰はもちろん、
自分の外見についての個性（髪型の長さ等）、校外
で名札を強要してはならないなど。日本の教員の
「生徒の人権の保障にかかわって、生徒の自主性
を尊重し自由を認める流れの中で、快楽主義・ご
都合主義・面倒なこと嫌なことは避けるといった
悪い傾向が出てきたがどうみているか」という質
問に対して、教育庁指導主事の「韓国でも同じよ
うな問題が発生しているが、それは一時的事象で
ある。否定的な側面があるからと言って絶対的な
生徒の人権尊重の価値を否定するものではなく、
規制という方向でなく、もっと他の視点から克服
すべき課題である。」という回答に納得できるもの
があった。規制でなく徹底した生徒や親との対話
や信頼関係の中で、事象に当たる姿勢を大切にして
問題を克服してきた蒲谷中学校長の方針（自由
な雰囲気の中で創意的な活動、目標や意欲を高め、
自己実現を目指す。）に通じるものがあった。しかし、
礼儀や規範意識をどう高めていくか、その迫
り方、方法論等は意見が分かれるところではある。

大江信…………日本語で書かれたパンフレット
をいただき、子どもを教育する上で何を大切にさ
れているのか、京畿道の教育について理解ができ
た。青少年の人権条例により、子どもたちの人権
がしっかりと守られていることを知った。同時に、
子どもたちに対する信頼の強さを感じた。

川上有正…………韓国では現在、従来以上に、生
徒の人権を尊重しようとしている。特にその取り

組みについての説明を伺うことができたことが有意義だった。韓国でも、生徒に自由を認めたがために生じる人権の無視、問題行動なども報告されている。校内暴力や教室の「秩序」の問題などである。しかし、大目標は平和教育である。それらの副作用的な問題は、その大目標の価値を損なうものではない。また、それらを抱えつつ、少しずつそれらを克服していこうとしている。理想とは現実の対極にあるものだから、理想に向かう時には、必ず現実の抵抗がある。韓国における生徒人権尊重の取り組みは、それを踏まえて、それでも理想を目指そうとする教育であろう。日本の教育も同様の過程にあると言える。両者がそれぞれをケーススタディとして、現実を克服し、理想の実現がなされることを願う。

忠清南道（チュンチョンナムド）教育庁 (B グループ)

9月4日

代表者：金鐘馨（キム・ジョンソン）教育長

特色：「正しい品性、充実した実力、未来を開く忠南教育」をビジョンとし、正しい品性と充実した実力、豊かな感性を持つ人材育成を目指している。正しい品性5運動や忠南学力ニュープロジェクトなどに力を入れている。また、サークル活動の活性化や読書教育なども重視している。

はじめに、イ・デグ教育政策課長より歓迎のあいさつがあった。記念品贈呈がされ、B グループ長の黒川郡大和町立鶴巣小学校の伊藤公一校長が韓国語で訪問受入れへのお礼を述べた。その後、イ・シンプン指導主事より忠清南道の教育についての紹介があった。正しい品性、充実した実力、豊かな感性を備えたスマートな人材を育成していることや、「一教師一授業ブランド運動」を推進していること、需要者の満足度全国一位を達成した質の高い放課後プログラムを運営していることなどが取り上げられた。その後の質疑応答では、教育施策について日韓双方から活発に質問があった。最後にイ・テグ課長は、2012年1月に気仙沼を訪問したことに触れ、「海がある限り気仙沼は生きている」という菅原市長の名刺の言葉を忘れない

いう話を紹介した。陸にあがった船の写真を見せながら、講義をする機会がある度にこの写真を見せる、ESDのために私たちが何をしたらよいのか考えさせられる写真である、と語った。

（岡山市教育委員会事務局指導課指導係長 松岡和俊）



忠清南道教育庁にて質疑応答

【参加者の感想】

伊藤公一…………「忠南学力ニュープロジェクト」の実践を行っていて、2011年国家水準学力成績度で高等学校学力向上度全国最高位になった。この事実は、高等学校になってから一気に学力を上昇させるのは不可能なので、小中学校のレベルがそれに準じていると思い感心した。「忠南学力ニュープロジェクト」は、良書と社説を読むことから始まり、個人に合わせた学力増進プログラムや英語教科書の暗記で自信を養わせたり、探求・実験が中心の科学教育で、一人一人の学力を支援しているなどきめ細かな指導が見えて勉強になった。

熊谷美穂子…………気仙沼市民として、以前気仙沼市を訪問されたイ・テグ教育政策課長より、津波により陸地に打ち上げられた船舶が、今なおそのままの状態になっており、講義をする度にこの写真を見せていているということに、何とも言えぬ思いがした。震災に負けず、教員同士、生徒たち、保護者、地域と協力しながら、頑張っていかなければならないと思った。

松岡和俊…………特に印象に残ったのが、教育政策課長の「指導者がよいモデルになれば教育は成功する。本教育庁は全力を尽くす。世界を主導する教育庁を目指す。本教育庁の教育が成功すれば、韓国も成功し、世界が参考にする。自信はある。」と言う言葉である。世界に向けて挑戦し、発信していくとする意気込みを感じた。

また、歓送夕食会では、高校の日本語教師から受験で教育庁に入庁した指導主事と話をすることができた。韓国の教育は成果がある反面、学力に偏っており憂慮しているという話を聞くことができた。このことは私が今回の訪問でもっとも気になっていたことであり、教育庁の方が同様の意見であったことは、改善につながる可能性もあり、安心した。日本語が堪能な韓国指導主事とのつながりができたことを、今後の交流に生かしたいと考える。

田中誠治…………日本で言う教育委員会。まずその大きさに驚く。教育委員会だけが独立して一つの建物がある。それだけ国をあげて教育に力を注ぐということであろう。頑張る学校にはどんどんお金をつぎ込むというあたりは疑問を感じるが、教育に力を注ぐと言うことに関しては素晴らしいと感じた。

辻脇昌義…………忠清南道の教育の取組について、日本語で作成された資料等をもとに教育政策課長、指導主事から説明をいただき、その取組に力強さを感じるとともに、同じ立場にある教育行政として興味深く聞かせていただいた。教育行政の最下部に位置する地域教育庁が、「教育支援庁」に改編され、その機能も改編されたが、教育支援庁の果たすべき役割や具体的な仕事等についてお話を聞きたかったが、時間制約もあり聞けないのが残念であった。しかし、夜の夕食会において通訳をされていた同じ教育庁の方と教育のシステムや政策について話をすることができ、いろいろな情報をいただけてよかったです。



休憩時間に、参加者全員でラジオ体操（8月30日）



ソウル近郊でとれた有機野菜を使った昼食（8月30日）



フォーラムには当日 KNCU を訪問していた北海道教育大学の教授・学生 10 名も参加（8月30日）



忠清南道教育庁歓送夕食会で訪問校の先生と再会（9月4日）

3. 学校訪問

A グループ

ソウル新龍山小学校

汝山女子高等学校

蒲谷中学校

B グループ

ソウル徳義小学校

論山高等学校

論山女子中学校

A グループと B グループに分かれ、学校訪問を行った。ソウルで両グループはそれぞれ1校を訪問した後、A グループは京畿道にて、B グループは忠清南道にて各 2 校を訪問し、授業見学や教職員、児童・生徒との交流が活発に行われた。

ソウル新龍山（シンヨンサン）小学校 (A グループ)

8月 31 日

代表者：金鐘徳（キム・ジョンドク）

特色：1968 年に創立され、児童数 1,835 人の大規模校である。「実力、人間性、創造力ある未来の人材を育成」を教育目標とし、グローバルリーダーの育成に力を入れている。教育の特色としては、国際理解教育、持続発展教育に向けたユネスコスクールの運営（2010 年 12 月 22 日加入）がある。

校庭には朝顔の花がきれいに咲いていた。これは、同校金校長が韓国教職員招へいプログラム（第 12 回、2012 年 1 月）で訪問した横浜市立永田台小学校からいただいた一粒の朝顔の種を学校に持ち帰り、校庭に植えたものである。永田台小学校からの参加者は、深く感激していた。

歓迎式典では、児童によるオーケストラ、太鼓、ハープの演奏の後、金校長より歓迎のあいさつがあり、大江信グループ長より訪問受入れと震災復興支援への感謝の言葉があった。

その後の授業参観は 4 グループに分かれ、ネイティブ教員を活用した英語と多文化理解授業を参観し

た。また、訪問団は 4 クラスで日本文化に関する授業を行い、日本教職員はヨーヨーや折り紙、福笑い、児童の生活について、実物や映像を交えて児童に紹介し、交流を楽しんだ。

給食を食べた後、午後は ESD の授業を参観した。4 年生は地域の伝統市場と大型ショッピングセンターのどちらが良いかを討論し合い、地球の環境問題を考える授業を行っていた。5 年生はフードマイレージに関する授業では討論形式の授業を行っており、6 年生はフェアトレードについての仕組みを学んだあと実際にフェアトレードチョコレートを試食した。その後、英会話、ウクレレなどの放課後学校の様子を見学した。

最後に訪問団は 4 つのグループに分かれ、同校の教員が混じって、小さなグループでざっくばらんな交流を行った後、同校の教職員に見送られて学校を後にした。

（愛知県立中川商業高等学校国際ビジネス科主任 中山明美）



ソウル新龍山小学校の校舎



ヨーヨーの遊び方を教える日本教員



放課後学校で児童のギターとハーモニカ演奏を聴く

【参加者の感想】

板倉真由美…………本校で ESD の研究に取り組んでいるということもあり、特に ESD の授業について大変興味深く見せていただきました。4 年生の社会科では、地域にある伝統市場と大型ショッピングセンターのどちらがよいかを話し合う中で、「地球の環境問題を解決する方法を知ること」を目標とした授業をしていました。身近な商業施設を教材に、環境問題に迫ることは、子どもたちにとって自分の生活を振り返り、実践にうつすことのできる素晴らしい題材だと思いました。このように ESD の視点で様々な教科を見直すことが大切だと感じました。

また、この小学校では、日本文化についての授業実践をさせていただきました。多文化理解授業で日本のことばよく知っている子どもたちでしたが、日本の小学校の様子について熱心に聞いてくれたり、折り紙やヨーヨー釣りにも楽しく参加したりしてくれました。実際に子どもたちと身近に接することができたことは、大変よい経験となりました。

川上麻耶…………朝顔の種を懸命に育ててくださり、日本と韓国がつながったことがとても嬉しかった。昨年、朝顔を育てた子どもたちが気付いたことの中に「一粒の種は小さい。でも、生きる力は強い」というものがあった。まさに、そのとおりだと実感することができた。新龍山小学校の校長先生に子どもたちの思いが伝わり、種に校長先生の思いが伝わり、そして、花から私につながった。感動した。そして、強い思いは伝わるのだなと感じた。

北野勝久…………特別支援教育についての質問に答えていただいた。日本と違い、学級は障害別ではなく、上下学年と大きく 2 つに分けられているということである。近年は知的障害より、自閉症・情緒障害の児童が増加していることや個に応じた教育課程を編成していることなど共通する部分もあった。

中村友弥…………特に印象的だったのは、放課後授業です。専任講師による質の高い授業が行われていました。また、教員が授業に集中できる環境が整っていて、午前授業の質の高さを実感しました。うらやましいと思う反面、日本も私の学校も負けてられないというモチベーションが高まりました。

中野敏昭…………教材準備室を見せていただいたが、様々な用紙が整然と整理していたことに驚いた。さらに先生方の教材準備を代行する 2 名の女性が、保護者のボランティア（給食以外は無給）であることに 2 度驚いた（交代制で運営されている）。その他、

放課後児童や保護者が選択して活動できるクラス

（通常の 1/10 程度の費用で運営）が 100 講座以上学校内に開設されており、学校教育と社会教育、家庭教育の融合を図っていた。日本では新しい教育課題についてはほとんど学校で対応するが、韓国では役割分担がはっきりしており、国全体で子供を支えているようを感じた。

小泉卓史…………豪放な金校長のリーダーシップのもと、1・2 年で自己啓発、3 年で水泳、4 年でハーモニカ、5 年で博物館体験学習、6 年では映画制作という多彩な課外活動に驚く。最先端の学校という印象。女子のネールアートなど、自由な部分もあるが、社会性などはどう身につけていくのかという疑問も残る。

汝山（ムンサン）女子高等学校

(A グループ)

9 月 3 日

代表者名：金正洙（キム・ジョンス）

特色：1970 年に創立され、生徒数 845 人。男女共学の中学校を併設する女子高校である。特色ある教育活動は、①創造的・人格教育や創意ある学校経営等の先進的モデルとなる学校）、②科学英才学級、③青少年ピズクール（ビジネスや起業についての教育を行う学校）、④ユネスコスクール運営などがある。韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）の Rainbow 青少年世界市民プロジェクト、KNCU が主催する模擬ユネスコ総会への参加、非武装地帯（DMZ）の環境調査などに積極的に関わっている。

歓迎会では、金校長より歓迎の言葉、大江グループ長の訪問受入れへの感謝の後、学校紹介映像を見た。生徒会代表の生徒よりあいさつがあつた後、生徒の公演では、伝統的な礼儀作法、テコン舞、演劇が披露された。返礼として、日本教職員から赤とんぼとアリランの合唱の後、記念撮影を行った。

その後、3 グループに分かれ、生徒、保護者の通訳のもと放課後の活動を見学した。読書討論部やユネスコクラブである「LOVE & PEACE」、生徒会等を見学し、各クラブにて生徒自身が日本教職員に説明を行った。講堂に戻り、ダンス部の公演を見学した後、給食を食べた。最後の意見交換会では、活発な

質疑応答が行われ、同校教員が訪問団のバスに同乗し、バス内でも引き続き質疑応答が行われた。訪問団からは、小学校や中学校ではどのような力を育めばよいと思うか、通学方法、生徒の自発的活動と査定官制度についてなどの質問があった。

(大阪教育大学附属高等学校池田校舎主幹教諭 田中誠一)



生徒から挙げられた手紙



夜 10 時まで利用できる各生徒専用の自習室

【参加者の感想】

田中文子…………受験勉強等で多忙な中、どのような形でユネスコスクールの取り組みを行っているかに関心がありました。取り組みに関わる生徒を少しずつ広げていく方法は本校と同じでしたが、取り組みに参加することが受験に有利になるなど進路実現に直結していることが日本と異なると感じました。

日本の場合は、ともすれば、このような取り組みと進路実現が対極になってしまう点が残念に感じます。

峯岸愛…………(小学校教員であるが) ESD の生徒主導活動を多く見学することで、小・中だけでなく高等学校も視野に入れる意義を感じた。体育館や学校内の催しを多く参観することで子どものいきいきとした姿を見ることができた。

関根寿典…………チマチョゴリを着て出迎えてくれた女子高生たち、到着が遅れたにも関わらず熱心な説明をしてくれた先生方にまず感謝したい。さらに ESD の先進校としての取組みが、様々に浸透している点が本当に素晴らしい。夜 10:00 まで勉強できるシステムが整っている点も驚きであった。

DMZ でのボランティア活動は、ESD の最先端を進んでいると感じた。

田中誠一…………授業における活動ではなく、サークル活動で ESD に関する活動を展開していた。そのため、テーマを自由に設定でき活動も柔軟に行うことが出来ていた。また、発表の場も用意されており、全員がいきいきと意欲をもって取り組んでいたのが印象的であった。通常、授業で ESD を展開すると評価を要求するが、逆に授業外で実施するとその制約から解放される。しかし、適切に指導すれば十分な成果が得られることが実感できた。

田中秀周…………非武装地帯 (DMZ) という立地条件から、地域性を生かした環境や生態に関する ESD に力を入れていた。また、DMZ 内にあるヘマル村との交流も独自の取り組みだった。先生や生徒の ESD 活動、EIU 活動に対する意識が大変高く感じられ、生徒は自主的に取り組んでいる様子だった。ボランティア活動も盛んで、プレゼンテーションや掲示物等のあらゆる場所からボランティア精神が感じ取られた。

蒲谷（ポゴク）中学校（A グループ）

9月4日

代表者名: 尹用在（ユン・ヨンジェ）

特色: 1993年に創立され、886人が通う農村地域に位置する学校。「生徒が主導する形」「生徒が幸せな学校」を目指しており、生徒は学校が楽しいと通ってくる。いじめがなく、生徒と教職員の仲がよい。特色ある教育活動は、国際理解教育、地域固有の文化及び経済に関する教育、ESD、創造的才能を育む特色のある部活等である。

学校到着後、尹校長の歓迎のあいさつと、教頭、教員が受け持っている様々な部の部長の紹介があった。訪問前に、同校の教職員の多くがホストファミリーを受けてくださっていたので、和やかな雰囲気で参加者は再会を楽しんだ。

その後、1年生から3年生まで全24クラスに訪問団の教師がそれぞれ1人ずつ入り、日本文化等に関する授業を行った。通訳がいなかつたり、十分でなかつたりして、文字通りのサバイバル授業であったが、日本教職員はジェスチャーや英語なども交えて、生徒とのコミュニケーションを図ることができた。授業参観では、2グループに分かれて、数学（習熟度（水準別）各クラス）、英語、科学、選択（家庭科・情報）の授業を見学した。

歓迎会では、尹校長の歓迎のあいさつ、大江グループ長のあいさつ、学校紹介の後は、同校の生徒の伝統音楽演奏、ダンスが披露された後、訪問団の歌、蒲谷中学校教員による合唱があり、和気あいあいとした雰囲気であった。

教員との意見交換会では、自由な校風で、最後の訪問校ということもあってか、コンピュータ教育、生徒指導、いじめ・暴力、数学の指導法、今後のユネスコスクールとしての活動など、両国の教職員から積極的な質問があり、率直に意見を言い合える場となった。

（広島県熊野町立熊野東中学校教務主任 佐伯貴昭、東京都荒川区立原中学校主幹教諭 大川直樹）



サバイバル授業にて、写真を用いて日本の食べ物を紹介



家庭科の授業を見学



菊の花を育てて売り、売上で貧しい生徒を支援している

【参加者の感想】

安部有美子…………私も中学校に勤務しているので、とても興味深く見学することができた。大量の菊を栽培しており、生徒の奨学金にする活動をしていることには驚いた。中でも、サバイバル授業を行えたことはとても貴重な体験であり、大変よい勉強になった。すごく興味を持って聞いてくれた生徒の姿に助けられた。通訳の方の力を借りながらではあったが、25分間の授業は私にとってとても貴重な時間であった。知らないことを知ることに興味を持ち、目を輝かせていた生徒の姿を通して、教育の大切さ

を実感する時間でもあった。機会があるなら、また授業をさせていただきたいと思った。

藤本健一…………韓国の学校というと「進学」という至上命題のもと選抜されていくというイメージであった。それが原因で校内暴力などの問題が頻発しているのだろうと思っていた。今回の蒲谷中学校では、貧困家庭の生徒・就職希望の生徒に対して職業教育を行っているということであったが、どのようにして実施されているのだろうか。正課を削って行っているのであれば、教育の均一性が損なわれる点について問題はないのであろうか。生徒にとっては興味関心のある内容・実用的な内容が学べるのは確かに有益だと思うが、基礎教養を学ぶという点ではどうなのかと疑問に思った。

小野寺信弘…………人口が約 5000 万人、超高齢化社会の到来。この国内情勢を見据え、エリートの育成、学校や地域の差別化を図っていこうとする韓国の教育の方向性を実感した。自由な校風を感じる一方で、生徒指導の方向性には疑問を感じた。

板倉真由美…………進学を望まない子どもたちは、社会に出て困らないように園芸やマイクアップなど、別の授業を受けているということで授業も見せていただきました。どの生徒も楽しそうに活動している姿が印象的でした。生徒一人ひとりの将来を見通して教育を進めていることが素晴らしいと思いました。中学の時点で別の授業をするなんて日本では考えられないことです。しかし、子どもたちの将来を見据えて授業をすることはとても大切だと思いました。

田中秀周…………生徒の表情が輝いており、授業は緊張したがとてもやりやすい雰囲気をつくってくれていた（生徒に感謝）。生徒の人権を尊重という、学校と保護者・生徒の話し合いや、韓国内の流れから、見学した三校の中では自由な雰囲気を感じた。

杉本伸樹…………ソウル新龍山初等学校でもそうだったが、韓国は校長先生の想いが学校の特色に結びつくということを蒲谷中学校の訪問で改めて感じた。最初、子ども達の様子や校内環境をみたときに、正直荒れて收拾がつかなくなっているのだと思った。壁の落書きや、トイレの汚れなど、私が思う指導対象がこれでもかと思うほど有ったからだ。しかし、後日行われた京畿道教育庁主催の夕食会で、蒲谷中学校の教頭のお話を聞いたとき、私が学校で感じたことは表面的な事象への対応なのだとわかった。蒲谷中学校の日常は、生徒と教師と保護者の同意のもと行われている。校長先生は経済的に厳しい生徒

のために菊を育て売ったお金をその生徒のために使っている。この 2 点をうかがったときに、自分の思いを持ち続けられるかどうかが非常に重要なのだということがわかった。

田中文子…………校長先生の教育理念、訪問団へのおもてなし、サバイバル・クラスなど、すべてのことが印象に残り、貴重な経験をさせていただいたと感じています。手紙をくれた生徒、授業をさせていただいたクラスには早速手紙を送ろうと思っています。また、晩餐会にて顔見知りになった日本語の先生と、本校のハングルの教員との橋渡し役になって新しい取り組みができたと考えているところです。

ソウル徳義（トッキ）小学校（B グループ）

8月 31 日

代表者：金香南（キム・ヒャンナム）

特色：1983 年 12 月 1 日に設立された児童数 1,202 人の大規模校。放課後学校運営、創意的表現力向上のための読書討論論述教育、英語、オーダーメイド放課後学級プログラム運営に力を入れ、バランスのとれた人材育成を目指している。

歓迎行事では、金校長のあいさつ、ソウル市南部教育委員会教育支援局局長のあいさつ、伊藤グループ長のお礼の言葉の後、児童の元気な歓迎（オーケストラ、新体操、コーラス）があった。その後児童から質問があり、着物の値段、日本の児童の登校時間、学校が終わって何をするかなど多くの質問が日本教職員に寄せられた。予定はしていなかったが、日本教職員が急遽歌のお返し（赤とんぼ）をしたところ、児童は大変喜んだ。

授業見学、学校見学を行い、給食を食べた後、日本文化の紹介を行った。江東区立八名川小学校の清水佐登美教諭、千葉県立佐倉南高等学校の藤山里香教諭が 3 年生のクラスに入り、あやとりや折り紙を折り、大阪府河内長野市立美加の台小学校の田中誠治教諭、八千代市立八千代台西小学校の宮成達啓教諭が 4 年生のクラスに入り、福笑いや剣玉を児童と一緒に行ったりして、児童との交流を楽しんだ。次に、放課後学校をそれぞれ 2 つのグループに分かれ参観した。最後の教員との質疑応答では、放課後学校のシステム、水泳指導などの質問があり、ソウ

ル徳義小学校の教員からも部活動についての質問などがあった。

(宮城県気仙沼市立小原木中学校教諭 熊谷美穂子)

【参加者の感想】

窪田崇之…………各教室にパソコンと大型テレビが設置され、授業でICTを有効に活用されていた。日本では大型テレビやパソコン、電子黒板など設置されているものの、数が少なかったり、教材や資料が整っていないかったりとなかなか活用しづらい。どの教室、どの教員でもICTを使いこなせる、環境設備には驚かされた。

宮城明子…………放課後講座の実施に大変興味を覚えた。この制度はすべての韓国的小学校で行われているのではなく、ソウル徳義小学校がパイロット校として行われている特別なシステムである。165の講座を開設しており、生徒は有料ではあるが、塾に行くよりは安い値段で受講できる。各々の子どもたちの特性に応じたオーダーメイド型教育は、ぜひ日本でも導入できないかと感じた。講座の募集はネットで行われ、申し込みや支払いなどの事務手続きは、人員が2名学校へ派遣され業務を行う。また、講座の担当者には学校内の教師もいるが、大半は外部から派遣された講座専門の教師である。多数のネイティブの外国人教師たちが、10名以下の少人数クラスで、子どもたちに英語を教えていたが、それは同時にいつも展開されていた。早期から英語に親しみ、日本より韓国の方が英語教育がすすんでいると言われるのもうなづける。英語以外の講座には、伝統芸能、スポーツ、科学などあらゆる分野に対応した内容であった。

この制度により、①貧富の格差による教育の格差を是正する。②教師の負担の軽減。③子どもの個性を生かした教育ができると報告があった。日本の部活動でも、ぜひこの制度を導入できたらと思う。担当教師に地域の人材を活かし、地域と学校の連携をはかる。また、昨今問題となっている教師の過重な労働勤務時間を減らすこともできる。日本は格差社会がすすみ、教育の機会均等が失われ、将来の大学進学や職業にも格差が生じてきた。こうした問題を解決するためにも、日本は多額の借金はあるが韓国と同様な政策で、教育にお金をかけ人材を育てていく方がよいのではないかと思った。

枝本亜希…………地域の方の協力等で教員の負担が削減されていることが、余裕のある教育を生み、そ

の余裕が生徒一人ひとりに目を行き届かせ、豊かな心の生徒が育つのは、と思いました。

宮成達啓…………ICTの活用では、教室に完備されたプロジェクターなど設備の充実さ、それを生かした授業。図工や音楽にも活用されていたのは非常に勉強になりました。

関口芳平…………オーダーメイド型放課後学校プログラムの運営を知ることができた。学校施設を利用した放課後学校は、日本でも実施可能であり、保護者の要望を聞き、外部地域とも連携したこのプログラムに強い関心を抱いた。中学校でも同じような状況であったが、「体育授業」があまり重要視されていない状況がわかった。

田中誠治…………地域の人々がボランティア、あるいは外部講師として入られていることにも驚いた。

谷慎介…………生徒による歓迎セレモニーにも驚いたが、各教室に設置されているICT機器の充実に日本の教育の遅れを感じた。また、放課後学校では外部から講師を招くなどして教員の負担を軽減し、内容も児童の幅広い興味関心に即したプログラムがなされていた。給食時のボランティアも含め、地域ぐるみで子どもたちを育てていく良いモデルであると感じた。



日本文化紹介の授業であやとりを教える日本教員



校長先生と固く握手

論山（ノンサン）高等学校（B グループ） 9月3日

代表者名：尹 錫銀（ウン・ソクウン）

特色：1975 年に設立された、生徒数 351 名の男子校。
2012 年教育課程評価最優秀学校（計画段階）に選定。
名門校に向けてジャンプアップしている。3NO 運動（携帯電話、校内暴力、喫煙）や、私の成功 DNA 探し（進路適性テスト、職業体験、サークル活動の強化）に積極的に取り組んでいる。

歓迎式にて、生徒によるサムルノリの公演を受けた後、尹校長のあいさつ、伊藤グループ長のあいさつがあった。

学校紹介の後、異文化理解の活動の様子を VTR で紹介された後、日本教職員からは生徒が夜 22 時まで自習することについてなどの質問があった。施設見学の後、授業参観では 2 つのグループに分かれ、英語と国語の授業を参観した。英語の授業は、ネイティブスピーカーとの協同授業を見学した後、橋本市教育委員会の辻脇昌義指導主事による英語での環境についての会話文を読み、穴埋めをし発表する授業を行った。その後、福岡県立城南高等学校の二宮浩司教諭によるフリートークでは、VTR に撮った日本の女子高校生からの「好きな芸能人は？」などの韓国語での質問に対し、同校の生徒が恥ずかしそうにしながら英語で答えていた。国語の授業は、いじめとは何かを生徒に発表させる授業であり、その後福岡県立玄界高等学校の宮崎圭司教諭によりいじめと人権について考える授業を行い、「いいクラスとはどんなクラスか」という問い合わせに対し、生徒達は自分達

で問題を解決できるクラス、仲間を大切に思えるクラスがいいクラスと回答していた。

教員と生徒・保護者が参加した懇談会については、教員評価と学校評価システム、いじめや学校暴力問題への対策、プレゼンテーションに力を入れた目的、背景などの質問があった。最後に日本語の話せる生徒があいさつをし、給食を食べ、学校を後にした。

（沖縄県立那覇国際高等学校教諭 宮城明子）



環境に関する授業を行う日本教員



論山高等学校の教職員と

【参加者の感想】

枝本亜希……………主に英語の授業を参観しました。ICT を活用した、ネイティブスピーカーによる授業でしたが、ちょっと生徒がシャイであったりするところは日本と同じであると思いました。学校自体の雰囲気も、日本の学校と共通するところが多く、ありのままの姿を見ることができたように感じます。

やはり何よりも一番印象的だったのは、夜の10時まで学習時間が確保されていることでした。ホームビジットでの一番最初の質問が、日本の生徒は何時に家に帰るんだ?と聞いてきた意味がわかりました。学生らしい時間を持つことができているのだろうか、と少々不安にも思いましたが、その夢を叶えるために一生懸命努力することを実践していることは素晴らしいと思いました。

宮崎圭司…………生徒指導面で「いじめ」「校内暴力」の問題があると聞いていたが、校内は落ち着いた雰囲気だった。校則がどの程度の効力を持っているかが分からぬが、やや自由に過ぎている部分も感じた。ここでは「人権と学校暴力」に就いての授業を参観し、その後私が同テーマで授業を行ったが、韓国では「暴力をふるうと後で仕返しされるのでやめよう」という考え方であることに日韓の違いを強く感じた。また夜遅くまで学習している姿にも感銘を受けた。

二宮浩司…………地方の落ち着いた雰囲気の男子校で、学校内暴力の問題を抱えている学校には見えませんでした。英語の授業でフリートークを担当しましたが、生徒がやや大人しいという印象を受けました。表現力、スピーチ力の向上に学校をあげて取り組んでいる背景が分かったような気がしました。私の勤務校の生徒も同じ様な課題を抱えており、コミュニケーション能力向上の取組を同じように行ってることに、たいへん親近感と興味を覚えました。

則武千裕…………自律学習の時間に驚きました。日本では、塾に通い学習をしていますが、韓国はそれを学校で補っていることとても興味をもちました。環境教育を英語学習の中に取り入れて学習している姿を見て、児童に考えさせたい問題を教科の中に入れる視点が大切だなと思いました。本校では、環境教育（地域自然を愛せる子の育成）の研究をしているため、ぜひ環境教育などの交流や研究を共にしていけたらと考えています。また、孤児院の施設へボランティアに行き、小学生に教える取り組みはとても興味深く感じました。

岡崎利夫…………前日のホームビジットでお世話いただいた生徒との再会が嬉しかった。古い校舎でも管理がいきとどき、緑が多く落ち着いて学ぶことができる環境でした。午後10時までの夜間自立学習の関係で、学校給食は昼夜の2回実施と、補助金により無料になっていることには驚きました。大きなステンレス製のトレイに盛られた給食は、野菜などの

食材が豊富でレストランと比べ味も薄く、とても美味しく試食しました。韓国は給食に力を入れていると実感しました。

藤山里香…………日本の高校との違いと共に通点を実感した。夜10時まで勉強するという高校生の日課には驚かされたが、成功DNA探しを取り入れたキャリア教育や、3NO運動については、日本の高校の進路指導および生徒指導と通ずるものがあると感じた。休憩時間には廊下から物珍しそうにこちらを見ていたり写真にはしゃいだりする生徒もあり、日本の高校生と同じような元気な一面も見ることができた。

論山（ノンサン）女子中学校（Bグループ）

9月3日

代表者：文日圭（ムン・イルギュウ）

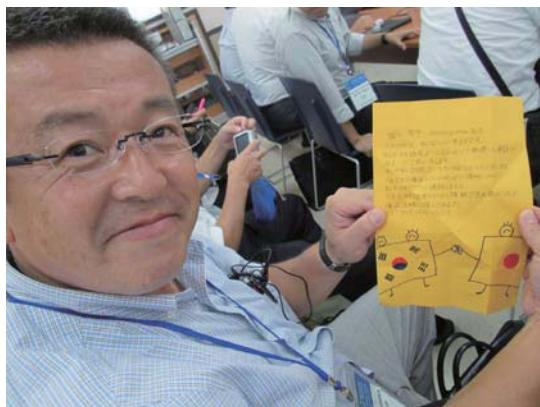
特色：1961年に設立され、生徒数954人の学校。「2011全国100大教育課程優秀校」に選定され、全教科教科教室制授業や、英語、数学、科学の水準別移動教室授業実施で学習効果の向上を図っている。清徳、感謝等12の品性を段階的に教育する2年プロジェクトを実施しており、ギャラリー等に教科やサークル活動の成果物を展示している。

歓迎式では、文校長の歓迎のあいさつの後、伊藤グループ長があいさつし、訪問団は「赤とんぼ」を合唱した。論山女子中学校からは、サークル活動での韓国伝統舞踊、サムルノリが披露された。

その後、学校紹介および施設見学の後、打楽器（サムルノリ）と美術教室の授業参観があった。美術教室では扇作りを体験し、打楽器の授業では、自由学園男子部中等科の高田貴教諭が太鼓、鼓、かねや拍子木など日本の打楽器を紹介し、昔生活の中にあった遊びがNANTAのように伝統音楽とまざった曲や演奏がつながって発展していく、と説明した。

教員と生徒が参加した懇談会では、夜11時まで何のために学ぶのかを生徒に尋ねたり、教員に対しては韓国のいじめ予防について、サークル活動がさかんなのは何故か、構内でアイスクリームなどを食べている生徒がいたが許されるのか、優秀クラス表彰に対する教師間の競争についてなど多くの質問があり、日韓での認識の違いが浮き彫りになる機会となつた。最後に記念撮影をし、訪問を終了した。

(東京都江東区立八名川小学校主任教諭 清水佐登美)



生徒から手紙をもらい、満面の笑み



美術の授業で作った扇を持って



打楽器の授業を行う

【参加者の感想】

藤山里香…………ホームビジット先の生徒さんが通う学校であったため、より興味をもって訪問することができた。佐倉南高校でも数学・英語の水準別授業を行っており、全教科移動教室制授業と、数・英に加えて科学の水準別移動授業には学べると感じた。ここでもサークルが 65 個あり、生徒たちを多面的に育てていく環境があった。

則武千裕…………子どもと一番関わったのが論山女子中学校だったので、そのことがとても心に残っています。美術の授業で生徒と共に扇を作れたことがよかったです。生徒と共に作ることで、生徒が温かく手助けしてくれました。とてもうれしく感じました。

松岡和俊…………休み時間にアイスクリームを食べている生徒が数人いたので、教師に質問すると、学校の外に買いに行っているが、学校としては特に問題としていない、夏は暑いので教員も食べるという回答だった。韓国ではどこの学校でも同様の状況らしく、日本と感覚が異なっていることを感じた。「何のために勉強するのか」という質問に、ある生徒が「勉強は夢を叶えるため。韓国の発展は教育のおかげ。教育は人材を育てる。」と答えた。目的を明確に持ち学習していることが伝わり、頼もしく感じられた。

亀井規生…………疑問を感じたのは、優秀クラスの表彰やアイスクリーム等の飲食の自由化である。規範意識の低下を課題として挙げている韓国の教育事情を鑑みると、今後の影響力等、その是非について議論を交わしたいと感じた。

高田貴…………音楽の授業をさせてもらった。日本の打楽器を紹介する授業だった。最初につたない韓国語で途中まで授業したが、よく伝わらなかったので、英語に切り替えて授業したところ、非常に積極的に参加してくれて、とても楽しい時間を持つことができた。拍子木を持って行って、実演し、また、生徒にも実際にやってもらった。また、私の授業の最後では、日本の 1 本締め、3 本締めを説明し、全員で行った。その後、残りの時間で、韓国の伝統打楽器に触らせてもらった。参加した先生方に生徒がやり方を教えてくれて、ノンバーバルであったが、とても楽しい時を過ごすことができて、本当の友好的な関係は、このような交わりの中から、始まるのではないか、と感じられた。

山崎聰司…………「2011 全国 100 大教育課程優秀校」に選定されている名門校を訪問することができて先進的なことを多く学ぶことができました。特に「移動教室授業」は各教室に舞踊・音楽・ダンス・英語などの内容で、一人ひとりの生徒の個性を大切にした授業を展開していてとても参考になりました。

4. スタディーツアー

A グループ & B グループ

北村韓屋村

A グループ

水原華城

都羅山展望台・都羅山駅

ヘマル村

B グループ

公山城

宋山里山古墳群（武寧王陵）

国立公州博物館

非公開であった。

一日を通じて、韓国の歴史、文化に直に触れ、その相違点を考える良い機会となった。

（宮城県気仙沼市立松岩中学校教諭 小野寺信弘）



伝統的な街並みを歩く

北村韓屋村（プッチョンハノクマウル）

（A & B グループ）

9月1日

特色:ソウル特別市中心部北側に位置し、伝統的な韓国の家屋・韓屋(ハノク)が集中している地域である。地区内には国、ソウル市などの文化財指定を受けた建造物が多数存在している。これらの建造物のほとんどが住居として現在も使用されている。

北村という地名は、漢陽（ハニヤン、ソウルの昔の地名）の中心であった鍾路（チョンロ）と清渓川（チョンゲチョン）の北に位置することに由来している。

ホテルを出発し、その後清渓川、韓国の伝統文化の街である仁寺洞を経由して、北村韓屋村を徒歩で目指した。韓国の教職員のみなさんと一緒に現地ボランティアガイドを迎えて、韓屋村巡りがスタートした。

初めに北村韓屋村を中心とした韓国の歴史の概要を説明していただき、知識を深めることができた。この地区は、権力者である家門や王族をはじめ、身分、地位の高い人々の居住地とされてきた。ただし、朝鮮王朝の時代、日帝支配の時代を経て、大規模だった韓屋も建物を維持することが難しく、徐々に小規模になっていった。

アップダウンが激しい坂道に細い路地が廻らされ、韓国に多い松の木を使った伝統的な家屋が密集している。ほとんどの家屋が現在も居住家屋であり、

【参加者の感想】

安部有美子…………非常にアップダウンが激しい坂道に細い道路。伝統的な家屋が密集していた。現在も住居として使われている家屋が多くあった。維持することが難しく小規模になったとはいっても、繁華街から歩いて行ける距離に伝統的な家屋があり、すごく素敵な場所だと感じた。昔の人が経験上作り上げた屋根の形は「サイクロイド曲線」であり、理にかなった形状であるということも説明してもらえた。韓国の伝統的な家屋を見ることができ、日本との違いを知る良い機会となった。

水原華城（スウォンファソン）

（A グループ）

9月2日

特色:朝鮮王朝第22代正祖(チョンジヨ)大王が1794年に築いた都城である。朝鮮古来の築城法に加え、石とレンガの併用といった西洋の近代的な建築技法を清から導入・活用し、優れた機能性と建築美を兼ね備える。当時の工事記録も完全な形で現存しており、建築史的にも高い価値を有する城郭として、1997年にユネスコ世界文化遺産に登録されている。

水原の街に入り、城郭の一部が姿を現し、水原華城に近づいていることを知った。

初めに、水原文化財団（水原華城広報館）にて、

城郭都市の形成から破壊、復元、世界遺産指定など、これまでの歴史、変遷を展示物から把握することができた。

その後、ガイドの先導によって、水原華城を見学した。第 22 代朝鮮国王正祖が父親に対する孝心で建てた城郭の中に華城行宮は存在する。水原府の官衙（官庁）と行宮として使用された。日帝支配時代には、ほとんどの施設が韓国の民族文化、歴史抹殺政策によって失われた歴史をもつ。朝鮮戦争などによる破損を経て、復元の推進がなされ、世界遺産への指定がなされている。

新豊樓前では、武芸 24 技公演を見学し、勇壮な武芸を鑑賞した。官衙（官庁）、行宮を見学し、最後、山の上の未老闇亭からの絶景を楽しむことができた。

（宮城県気仙沼市立松岩中学校教諭 小野寺信弘）



華城行宮

【参加者の感想】

田中秀周…………世界遺産でもあり、ドラマのロケ地でもあるという点から多くの観光客が訪れていた。また、伝統的な武術の演舞もあり、地元と一緒にとなった歴史観光の街という感じだった。

東垣茂男…………日本の占領政策（朝鮮の民族文化や歴史の抹消）や朝鮮戦争によって、施設のほとんどが壊され、20 世紀末に復元するに至り現在世界遺産に登録されたということだが、日本の支配の惨劇に心を痛めずにはいられなかった。2 度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと心に強く誓うとともに、友好関係を築く架け橋に少しでもなれたらと思った。韓国の時代劇（チャングムの誓い、トンイ、イ・サン等）に親しむ者として、その時代劇に登場するお城等を実際に見たり、説明を聞いたりする中で、朝鮮王朝の歴史や文化について学べ、更に韓国が身近に感じられた、よいプログラムであった。



水原の街を一望できる未老闇亭の前で

都羅山（トラサン）展望台・都羅山駅 (A グループ)

9月3日

特色:都羅山展望台は、北朝鮮を監視するためにつられた展望台。都羅山駅は、韓国最北端にある駅。非武装地帯(DMZ)内にある。

汝山女子高等学校の生徒とともに ESD 現場訪問の一環で、都羅山（トラサン）展望台と都羅山駅を訪問した。非武装地帯（DMZ）にある都羅山展望台からは、北朝鮮の開城（ケソン）工業地帯等が一望できる。展望台を管理する韓国軍の説明を受けた後、実際に屋外の展望台で見学を行い、南北分断という朝鮮半島が抱える現実を考える機会となった。

次に都羅山駅を訪問した。都羅山駅を走る京義線は元来平壤（ピョンヤン）とソウルを結ぶ列車であった。朝鮮戦争時に線路が分断されたが、2000 年再連結工事に合意した。開通した 2007 年以降は北朝鮮との貨物列車の行き来があったが、現在は政治的な理由により再び運休している。しかしながら都羅山駅は、南側最後の駅ではなく、北へ行く最初の駅と考えられている。

参加者は、都羅山駅の構内、改札、駅のホームを視察した。その後、副駅長から駅の説明や、京義線開通による列車でのユーラシア大陸横断計画についての説明を受け、南北統一に思いを馳せた。

（大阪府寝屋川市立第十中学校教諭 安部有美子）

【参加者の感想】

小泉卓史…………まさか訪問できるとは思っていなかった。終日、靄のかかった空模様であったこと

が、象徴的であった。意外にのどかな雰囲気と流暢な日本語でのガイドの中で、はじめて体験した「国境」。どうしても観光気分にはなれなかった。むしろ、真新しい都羅山駅に希望を感じた。この鉄道が北に向かって走り出せば、そのままヨーロッパへつながっていくという当然のこと。

関根寿典…………非武装地帯の訪問は、なかなか行けるところではないので印象が強い。目と鼻の先が北朝鮮であり、いつ戦争に突入するかわからない地帯を警備する軍隊の方の説明が本当に力強かつた。



都羅山展望台で、警備をしている軍の方とともに



ヘマル村の村民、汝山女子高等学校の生徒と

【参加者の感想】

川上麻耶…………韓国の抱える問題を感じることができた。「韓国は戦争のある国」この言葉がとても心に残った。いまだに休戦している韓国は、空襲警報の避難訓練をしているという。また、ヘマル村の方のお話を聞き、「なぜ渡り鳥は自由に行き来できるのに 人間はできないのだろう」と国民として、戦争を恥じていることがわかった。一人ひとりの人同士がつながっていくこと。そして、正しい歴史を知り、自分で考えて判断できる子どもたちを教育していかなければならないと強く感じた。

ヘマル村 (A グループ)

9月3日

特色:DMZ 内にある村。人の自由な出入りが制限されおり、豊かな自然資源が残る土地もある。

汝山女子高等学校の生徒とともに、DMZ 内にあるヘマル村を訪問した。1950 年の朝鮮戦争時に避難していた村の住人たちは約 50 年間他の所に住んでいたが、「故郷で暮らしたい！」という思いを政府に訴え、10 年前に作られた村である。昨年、この村の住民登録第 1 号となる子供が誕生した。村の形は上空から見ると「ト音記号」の形をしており、「ト音記号の村」とも呼ばれている。汝山女子高等学校の生徒は、2009 年からヘマル村でボランティアを実施している。

ヘマル村の特産物である豆腐を生徒、住民とつくる予定であったが、豆腐づくりはほぼ終わっていたため、最後の工程を視察し、出来上がった豆腐を食べながら訪問団は汝山女子高等学校の生徒や村長、住民と交流を行った。参加者は、地域の特性を活用した ESD 活動を視察することができた。

(大阪府寝屋川市立第十中学校教諭 安部有美子)

公山城 (コンサンソン) (B グループ)

9月4日

特色:百済の時代に能津(ウンジン)城と呼ばれた、公州(コンジュ)を守るために作られた代表的な古代城壁(韓国では城壁のことを城といふ)。

文周王元年 (475 年) に百済の都を慰礼城から公州に移し、その後三斤王・東城王・武寧王を経て、聖明王 16 年 (538 年) に遷都するまで 5 代に渡り 64 年間王都を守った山城である。北には錦江が流れ、海拔 100m の稜線に位置する天然の要塞で東西に 800m、南北に約 400m の長方形を成す。訪問団は雨天の中、錦西楼 (クムソル) → 公山亭 (コンサンジョン) → 拱北楼 (コンブル) → 蓮池および挽河樓 (ヨンジマンハル) → 靈隱寺 (ヨンウンサ) → 双樹亭 (サンスジョン) 史跡碑→双樹亭を見学した。

(千葉県立鎌ヶ谷西高等学校教諭 渡邊明香)

【参加者の感想】

清水佐登美…………説明してくれたガイドが自国

の歴史に誇りをもつてていることが伝わってきた。日韓の歴史、つながりや発展がよく分かつて楽しかった。



公山城

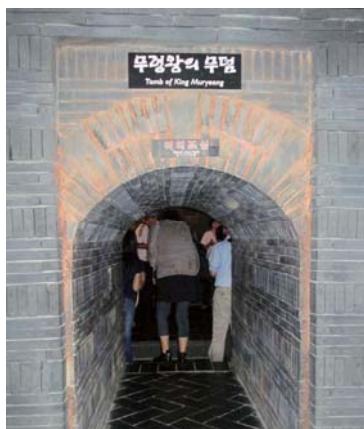
宋山里古墳群（ソンサンニコブングン） (武寧王陵<ムリョンワンヌン>) (B グループ)

9月4日

**特色：百濟時代の王と王族の墓が群集している場所で、
武寧王陵を始め合計7基の古墳が分布している。**

百濟の中興を果たした武寧王の墓である武寧王陵には、金でできた装飾品を合わせ全部で 108 種、4,600 点あまりの遺物が発見され、国宝に指定されたものも 12 種ある。訪問団は、5 号墳→6 号墳→武寧王陵の順に回った。古墳の内部に入り、それぞれの違いをガイドに解説していただいた。

(千葉県立鎌ヶ谷西高等学校教諭 渡邊明香)



武寧王の墓（レプリカ）に入る日本教職員

【参加者の感想】

田中誠治…………韓国と日本の結びつきが昔から強かつたことがはっきりと分かった。特に武寧王陵から出てきた木の棺が、私が住んでいる地域から近い高野山から贈られたものであることに驚かされた。

国立公州（コンジュ）博物館

9月4日

**特色：地域の百濟文化を保存したいという地域住民の
願いから設立された「公州古跡保存会」と「公州史跡顕
彰会」をもとに 1940 年に開館し、1945 年に国立博物館
となった。**

武寧王陵と大田・忠清南道で出土された国宝 19 点、重要文化財 4 点を含む 2 万点の文化財を収集・保管している。訪問団は、1 階展示室（武寧王陵室）や先に見学した宋山里山古墳群から出土された文化財のレプリカを、解説を聞きながら見学した。

(千葉県立鎌ヶ谷西高等学校教諭 渡邊明香)

【参加者の感想】

岡崎利夫…………古墳が点在する与謝野町の風景とよく似ている公州。かつて海を渡り技術や文化を日本に伝えた渡来人の都があつた地域だと思うと、興味がわきました。博物館の外で弁当をひろげている農業組合のグループに招かれ、お裾分けをいただきました。自慢の家庭料理の品々を次々によそおつてくれ、お礼に日本の演歌を歌いました。短時間でしたが、親切で楽しい韓国の方々とのふれあいがもてました。



公州博物館

5. 成果

Aグループ

更に効果的なプログラムに向けて 岩本 渉

実際に韓国へ着く前の私の興味は、韓国におけるESDへの取り組み、ユネスコスクールの実情を把握することであったが、この当初の目的は十分に達成することができた。最初に韓国ユネスコ国内委員会からのオリエンテーションが大変良い導入であったし、ESD日韓教員フォーラムもとても参考になった。3校の学校訪問で実際を知ることもでき肉づけもできた。蒲谷中学校におけるサバイバル・クラスは大成功だった。全て参観したが、インターネット画像に頼った授業はご苦労されていたように見受けられる。逆に、日本の着物やはっぴをはおったりしてやられた授業は人気が高かったようだ。こうした試みは、交流の真の意味を体験させるうえでも、来年以降も続けたらよいと思う。欲を言えば、両国の教員相互の意見交換の時間を増やし、日本の取り組みを紹介できる場があってもよかつた。また、文部科学省の者からもわずかの時間でもよいからコメントをさせてもよかつた。

一方、ホームビジットは韓国の人と家庭を知るのに絶好の機会となった。言語のバリアはあったが、非常に参考になった。ただし、近所の家庭の方も招いたり、当方に多くのお土産をくださるなど、申し訳ないくらいだった。あまり気を使われない方がいいと思う。

京畿道教育庁訪問は時間的にもちょうどよく、それまで地方教育行政について話を聞く機会がなかつたので非常に有意義だった。

ほかに、文化公演や文化史跡訪問も大変良かった。参加した先生方、私にとっては韓国的事情が分かるとともに、日本の多様な学校種の先生方に知り合う絶好の機会だった。また、先生方と話していくと高校の教師も韓國の小学校へいっていろいろ思うことが多かつたようだ。来年以降もこうした編成でお願いしたい。

参加者全員、まじめで問題意識を持たれており、こうした派遣団の団長を務められて光栄だった。

未来を見据えた教育の重要性

大江 信

今回の訪問での私の課題は、韓国の教育について知ることであった。まず、韓国ユネスコ活動及び韓国ASPnetについての紹介があった。私自身、ユネスコスクールやESDについて十分理解していなかつたので、この説明は大変有意義なものとなった。「戦争は人間の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章にうなずき、持続可能な発展を成し遂げるためには、考え方と行動をグローバル化させる必要があり、このためには教育の役割が大事であるということについて理解することができた。また、ESDのために学校と地域社会との連携が不可欠となるが、それぞれ固有のミッションを持つことを尊重し、実際の実行をベースにして、アクションが小さくとも環境的、社会的、経済的、文化的な変化を導き出すことに貢献すべきであるという考え方を理解することができた。この説明があったので、午後に開催されたESD日韓教員フォーラムや、その後の学校訪問が私にとってより有意義なものになつた。そして、フォーラムの中でも話されていたように、未来を見据えることの重要性を再認識することができた。

学校は、小・中・高等学校の3校を訪問させていただいた。ソウル新龍山小学校では、英語教育の内容や放課後授業について初めて知り、大変驚いた。また、訪問したどの学校の児童も、それぞれが目標を持ち主体的な態度で教育を受けていたように感じた。これは、校長先生がリーダーシップを発揮され、全教職員が児童を愛し、児童を信頼し、児童の力を伸ばそうと、児童とよく話し合い、様々な方法で支援をされている結果だと思った。このような態度を育てるには、人権を土台に規範意識を早い段階でし

つかりと指導し、夢や目標を具体的に持たせ、学年が上がるにつれて生徒自身に考えさせて行動させるようにしていくことが重要であると考える。その具体例を、訪問した小学校、中学校、高等学校で見せていただくことができたと思っている。

京畿道教育庁でも、「人間的な生き方」を最高に価値あるものとし、学校生活のあらゆる場面における人権を土台として、尊重と配慮、コミュニケーションと分かち合いの経験を積ませることが大事であることや、学習者が主体となる学びを中心としたカリキュラム運営により、独創力あふれる知性を育てるこことを重視していると説明を受けた。

韓国の教育は、未来を見据え、こうした、いわば教育の基本とも言うべきことが一貫して大事にされ、地域社会や保護者と連携して成果を上げているということが理解できた。韓国の多くの学校から学校内の暴力事象に対する日本での対応について事前質問が多くあったが、生徒指導上の課題を解決するには、こうした地道な取組が大切であることを再認識した。また、交流を通してお互いに理解し合い、友好を深めることにつなげることができたと実感した。

得るもの多かったプログラム 安部 有美子

「もっとも有意義であった内容」

日本の教職員の方だけでなく、韓国の先生方と交流ができしたこと、韓国の生徒と交流ができしたこと、文化施設訪問でガイドさんが親切に説明してくれたことなど、どれをとっても有意義な内容であった。

中でも、蒲谷中学校でサバイバル授業をさせてもらえたことは、ものすごくいい勉強になった。最初聞いたときは正直「やりたくない」という思いが強かった。しかし、実際に授業を行ってみると、「やつてよかった」という思いに変わり、もう一度やってみたいと思った。「こんなにちは」「お願いします」など、知っている日本語を使い、どんなことをしてくれるのだろうと目をキラキラさせながら一生懸命聞いてくれた生徒たちの姿を通して、知らないことを知ることの楽しさや喜びに改めて気づかされた。本当に授業をさせてもらえてよかったです。

「設定した課題とそれに対する効果」

1. ESD を理解すること

参加するまで「持続発展教育」がどのような教育なのか知識がなかった。しかし、講義や日韓の事例

発表、実際の授業見学などを通して、具体的な内容がわかり、ESDについての知識を得ることができた。このことは、私にとって、とても大きな成果となつた。

2. 韓国の教育現場を知ること

ICT 機器が充実していることに驚いた。そして、どの授業でも教師が使いこなし、学校全体でそのスタイルが定着しているように見えた。教科書では伝えきれない内容を、動画を用いることで、より理解できているのではないかと感じた。また、小学校で 1・2 年生の希望者対象に行われている放課後学校の内容（英語、ハーモニカ、ウクレレ、パソコンなど）や、中学校で菊を栽培し、奨学金に充てるという活動にも驚いた。

京畿道教育庁を訪れ、「革新学校」についての話を聞いた。日本と異なる点も多かったが、いろいろな考え方や見方を知ることができ、視野が広がったような気がした。そして、質疑応答の中で、2つとて印象的な内容があった。1つめは、「防災・災害・安全教育」についてである。韓国では空襲に対する訓練が行われていることに衝撃を受けた。国土内に国境があるにもかかわらず、北朝鮮に自由に行き来することができない韓国の現状を目の当たりにした感じだった。2つめは、革新学校を推進するために行われる研修についてである。教員の能力を高めるプログラム「基礎（19h）職務（60h）リーダー（180h）専門（大学レベルの内容）」といった内容の研修を実施していることに驚いた。教員一人ひとりの力量をあげ、授業の質を上げているように感じた。

教育現場を実際に見ること、直接話を聞くことでとてもよい刺激を受けた。韓国の教育に対する知識を知ることで、視野を広げることができた。

3. 日韓教職員の交流

同じ教育に携わっていても、校種が違う先生との交流はとても有意義で、充実したものであった。韓国の先生方だけでなく、日本の先生方と話をする中で、教育に対しての思いや、考え方、学校での取り組み等について教えていただけた。今後の参考になること多く、これから先、何らかの形で交流を続けていきたいと思う。

また授業をしてみたい

藤本 健一

勤務校では教育重点目標の一つとして国際理解を掲げており、毎年韓国への修学旅行も実施している。その直接担当部署が私の属する分掌である。そのため、本プログラムへ参加した当初目的は韓国における国際理解教育がどのように行われているのかを知ることであった。小学校・中学校・高等学校とそれぞれの校種への学校訪問が予定されており、それぞれの校種で発達段階に応じてどのような目標設定がなされ、その目標達成のためにどのようなプログラムが組まれているのかを知ること、また今回のプログラムを通じて韓国修学旅行をより有意義なものにするためのアレンジのヒントを得ることを期待していた。

韓国に於いて各学校がどのように国際理解教育に取り組んでいるのかを体系的に把握する機会は得られなかつたが、ソウル新龍山小学校での英語の授業や異文化理解の授業、汝山女子高等学校の ASPnet 活動の報告を通して、異文化理解、国際交流の下地が形成されていく過程を断片的ながら窺うことができた。特に汝山女子高等学校の生徒の主体的な活動を核とする取り組みは、生徒達の生き生きとした表情と相俟つて非常に印象深かつたと同時に、自校での取り組みへの多くの示唆を得た。今後の自校での地域交流活動や環境学習、国際理解教育などの各種活動の参考にさせてもらいたいと思う。

一方的に観察するだけであった 2 校とは異なり授業を行った蒲谷中学校での体験も印象深いものであった。現勤務校は併設型中高一貫教育校であり、同一校舎内（校地ではなく校舎）に中学校があり一部教員は兼務で授業をしているが、自分は中学校での授業の経験は全くなかつた。初めて中学生に対して授業を行うのが韓国の中学校だというので大変緊張した。日本語学習経験のない生徒に対しての授業という事前の情報をもとに、平仮名を紹介し、みんなで「ともだち」と平仮名で書いてみるという授業プランを立て、媒介言語は英語を用いると決めて授業に臨んだ。準備したプリントの数よりも多い生徒が教室にいたり、日本語既習者がいたりと予定外のことがあり、プラン通りに授業を行うことができなかつたのは残念であり、生徒のみなさんに対しては申し訳なく思つた。また、授業を行うという意識が強

すぎて、彼らとの交流が不十分であった点に悔いが残つた。韓国語を話すことができればよかつたのにと強く思つた。もしも同様の機会が与えられるならば、是非とも韓国語を学習して、韓国語で授業をし、交流をしたいと思う。

逆に、ホームビジットでは日本語の先生のお宅を訪問することになり、言葉の面でのストレスなく交流ができ、さまざまな情報交換ができたことは、大変幸運であった。

地域と共に進める教育

板倉 真由美

私は、「韓国における地域と共に進める ESD」について学びたいと考え、本プログラムに参加しました。「地域と共に」という点で大変勉強になったのは、汝山女子高等学校における創意的体験活動の取り組みでした。生徒たちが自主的に活動しているだけでなく、保護者や地域が一緒になって生徒たちの活動を支援したり共に活動したりしていることに驚きました。私の学校でも地域の方に授業に参加していただいているのですが、それは協力をしていただいているのであって共に学んだり活動したりということではありません。校種は小学校と高等学校で違いますが、地域や保護者が同じ方向を向いて学校と共に子どもたちを育てようとしているところは、校種を問わざとて大切なことだと実感しました。

このように子どもたちが自発的に問題意識をもち、自主的に活動するためには小学校でどんな力をつけておくことが必要かと質問したところ、「物事への関心度は小中学校の時の方が高いので、自分たちで活動できるようになるための基本的な力を育てておくこと、そしてしっかりと体験させることが大切」と教えていただきました。自分の身の周りの様々な問題に気付く力や、その問題の解決方法について考え、自分なりに行動しようとする力がつくよう、学習活動を見直していく必要があると感じました。

訪問させていただいたどの学校でも強く感じたのが、先生方が学校教育の中で「どんな子どもたちを育てたいか」という明確な思いをきちんとたれているということです。その思いを地域や保護者の方々と共有できていることが「地域と共に進める」ために最も大切なことなのではないかと感じました。私の学校でも「地域に学び、地域を愛する子どもたちを育てる」ことをめざして取り組んでいるので、

その思いを地域の方と共有しながら進めて行くことが大切だとわかりました。

また、私が本プログラムの中で一番心に残ったのが、DMZに関わるものでした。実際に境界線を目の当たりにしたり、そこに暮らしている方々の平和への思いにふれたりして平和について深く考えるきっかけとなりました。ひとことで「平和学習」と言つても、そこにはそれぞれの国の歴史的背景や現状があります。そういったことをきちんと知ろうとすること、そしてそこに暮らす人たちの思いに触れることが、何よりも大切なことであり必要なことであると実感しました。ヘマル村の村長さんの「政治レベルでは難しいことがたくさんあるが、このような個人レベルの交流をしていくことが本当の友好につながる」というお話が、とても心に残りました。ぜひ、日本の子どもたちに伝えたいと思います。最後に、日本各地から参加し共に学んだ先生方や訪問先の韓国の先生方、ホームビジットで受け入れて下さった家族のみなさんなど、たくさんの人との出会いが何よりも大きな財産となりました。いろいろな校種の先生方と、お互いの学校の情報交換をしあったり、教育について話し合ったりする中で、刺激を受けることができました。実際に話したりふれあったりすることで、初めてわかることがあることも実感しました。これからもこのつながりを大切にしていきたいと思います。

平和への可能性と希望 川上 有正

私の教育実践の主たる目標は平和構築である。外国語科の教員としては、特に異文化共生を実現できる社会の形成に資する教育を行いたいと考えている。今回のプログラムにも、そのための示唆を得ることを課題として参加した。特に日本と韓国の歴史を振り返れば、両者は植民者と被植民者であった。こうした経緯を克服して両者が共生できるならば、その意義は計り知れない。

私は、こうした観点を中心的な視座に据えて本プログラムに参加し、大きな成果を得られたと思う。本稿では、それを象徴する出来事として、ESD日韓教員フォーラム後の歓迎晩餐会における、日本の教員による日本文化の紹介を報告したい。

私は出し物の内容を検討し、まとめる係（文化交流係）であった。協議の結果、訪韓団は『赤とんぼ』

と『アリラン』の合唱を行うこととなった。それぞれを歌い、最後は両者を重唱した。言葉は違うが、自分のルーツを懐かしみ、ふるさとを想う気持ちは共通している。相違点の奥には人間性という共通点がある。それゆえに、異文化は相互に尊重しあい、共生していくことができるはずだ、という主張を込めての構成であった。

しかし私には、この赤とんぼとアリランの重唱について、大きな躊躇があった。

韓国に先だって、私は沖縄にいた。オスプレイ配備と尖閣問題のまっただ中であった。米兵による女性への暴行事件も報道されていた。普天間基地のゲート前では、オスプレイ配備に抗議するハンガーストライキが行われていた。私はその前を2度通過した。しかし車から降り、声をかけることは、結局できなかった。

その躊躇も、全く同じ理由であった。本土が基地を均等に負担すれば、それを望めば、新型輸送機やその他諸々も均等にやって来る。沖縄の負担は減らすことができる。私は本土の人間である。しかし私は、何もしていない。その私がどんな顔で、例えば「頑張って下さい」などと言うのか。まずはあなたがそちらで頑張りなさい、と叱られるのが道理である。自分が加害者である現実を突きつけられるのが道理である。

本プログラムの訪韓時、折しも日韓両政府は竹島・独島問題を緊張させていた。その韓国で、私たちは非武装地帯の見学をした。人々が強制的に分断され、対立させられている現場であった。そしてそれを背景にした徵兵制があった。人の命は何よりも重い、という主張が通らない世界であった。自由時間には、戦争記念館の見学もした。帰り道に通ったソウル駅前には姜宇奎の像があった。私はそれを安重根だと思い込んでいた。

赤とんぼとアリランの共生を願う重唱。アリランを奪い、赤とんぼを「強制」したのは誰だ、南北分断の遠因を生み出したのは誰だ、そしてそうしたことに無自覚、無関心なのは誰だ、と突きつけられたら、私は果たして、逃げることなく、それは私です、しかしそれでも、私はあなたの共生を願っています、と返答できるかどうか。私に自信はなかった。実際には、歓迎晩餐会の場でそのような糾弾がなされる可能性は極めて低い。つまりその躊躇は、加害者としての痛みから目を背けたいという、私の内なる声であった。

しかし、私たちの合唱は割れんばかりの拍手で迎えられた。大きく優しい拍手であった。私はそこに、加害者・被害者という来歴を負った異文化の共生を見た。平和の可能性を見た。会場にいた韓国の関係者には、内心、複雑な思いを抱かれた方もあったかもしれない。しかし、そうであるならむしろ、そこには暴力に暴力で報いるという絶望的な動物性を克服する、人間の理性、意志の力があった。希望があった。

この平和への可能性、希望、実感こそが、私の得られた最大の成果である。ここで紹介した出来事は、しかし、プログラム全日を通じて継続された韓国側参加者との対話、特に同行をいただいた韓国ユネスコ委員会スタッフとの直接交流を経て得られたものであることは間違いない。改めて御礼を申し上げると同時に、そうした交流の機会を提供する本プログラムのさらなる発展を願う次第である。

韓国へつながった思い 川上 麻耶

今回のプログラムで、一番強く感じたことは、「人とのつながり」の大切さである。

私の心に強く残った「つながり」が二つある。

一つ目は、ソウル新龍山小学校で校長先生との出会いである。校長先生は、昨年、来日された際、私の学校を訪問してくださった。私の担任していた子どもたちが育てた朝顔の種を、一粒ずつお渡ししたところ、学校に持ち帰り、育ててくださった。

その朝顔が咲いたことを、メールでもご報告をいただいたが、実際にソウル新龍山小学校に訪問し、見ることができた。他の朝顔よりも大きく、美しく、一目でどの朝顔かがわかった。

その朝顔は、新潟県の白血病でなくなった男の子の意志を引き継いで育てた「命の朝顔」というものであった。子どもたちが、一生懸命育ててきた思いや、なくなった子どもの意志を引き継ごうという思いを、校長先生が受け止めてくださったを感じた。まさに命のつながりを感じた。言葉で「つながりを大切に」というのではなく、校長先生自身が実践されていることがとても嬉しかったのだ。

ソウル新龍山小学校の子どもたちは、どのクラスの子どもたちも、授業に熱心で、学ぼうという姿勢が感じられた。授業の組み立ても、子どもたちに何を考えさせたいのかがはつきりしていた。将来、大

人になったとき、自分で考え判断できる子どもたちを目指していることが強く伝わってきた。そして、校長先生をはじめとする教職員のみなさんが、子どもたちを大切にしている思いが伝わってきた。

二つ目は、蒲谷中学校でであった子どもたちとの出会いである。

事前に、「25分間通訳なしで授業を行う」と聞いていたので、日本の何について伝えようかを必死に考えた。伝えたいことを英訳した文章をノートにメモし、どのように話をしたらよいかを考えながら準備をした。

緊張と不安の中、教室のドアを開けて驚いた。子どもたちが、まっすぐな瞳で、私の方をじっと見ていたからだ。私が、教卓の前に立つと「川上先生、よろしくお願いします」と全員で大きな声で、あいさつをしてくれた。私は、準備していたノートを閉じて、授業を始めた。子どもたちの顔を見ながら授業がしたいと思ったからである。

子どもたちは、私の話す日本語と、つたない英語を熱心に聞いてくれた。日本のあいさつや食べ物について伝えると、一言ももらさないようにと、何度も聞き返し、練習していた。そして、韓国語ではどういうのかを教えてくれた。伝わらないことがあると、ジェスチャーを使い、一生懸命伝え、意味がお互いに通じ合うと自然と拍手が起きた。

教えるって楽しい。そして、教わるって楽しいと思えた。大切なのは、上手に話すことではなくて、本気で「伝える」ことなのだと感じた。心がつながったと感じた。

私は、事前に韓国の教育について、どのような力を子どもたちに見つけさせようと取り組んでいるのか知りたいと思っていた。また、子どもたちにどんな大人になってほしいと願っているのかを肌で感じたいと思っていた。

その思いがどの学校からも感じられた。どの学校でも共通していたのが、将来、自分で道を切り開いていく力を身につけさせること、子どもたちが自分で選んだ道を全力でサポートしようという気持ちであった。子どもたちを思う気ものは、国を越えてもかわらないのだと強く感じた。子どもたちの力を信じ、全力で応援する気持ちをこれからも大切にしていきたいと思った。

最後に、韓国で私が出会った方々は本当に優しく、温かい方ばかりであった。だれに対しても、温かい心で接する気もちを、私は忘れずにいたいと思う。

行政と学校の一体化と明確なビジョン 北野 勝久

韓国の教育について、これまで知らなかつたことも多く、今回の訪韓での学校訪問や京畿道教育庁の訪問は学校現場の様子や庁の教育施策を知る上で有意義であった。

ソウル新龍山初等学校では、ICT 等の学校の環境整備面がとても充実しており、どの教諭も機器を使いこなし授業を行う姿が印象的だった。英語や多文化の授業においてもネイティブの教諭が教えることで子どもたちに本物の力がつくと思われた。また、放課後学校での個人の興味関心や能力に応じた指導は一人一人の力を伸ばすという点でとても有効であると感じた。日本の教育について改めて考えるよいきっかけとなった。汝山女子高等学校では、様々なクラブ活動の参観の中で生徒が主体的に活動する姿が見られた。地域と連携しての ESD 活動の見学として DMZ を訪れることができたことも、このプログラムで大きく心に残ったことの一つとなった。蒲谷中学校では、生徒の人権が重視され、自由な校風の中で、日本の中学生と変わらない元気な子どもたちがいた。歓迎会での教職員の出し物の際に、歓声と手拍子で盛り上がる子どもたちの様子は、教職員と生徒との関係のよさが伺えた。

各学校訪問を通して感じられたことは大きく 2 つある。1 つめは学校長のリーダーシップである。学校長が学校経営に関して明確なビジョンをもち、教職員がそれを実現するために使命感をもち、日々の教育活動を行っていることである。2 つめは、将来を見据えた教育である。小・中・高等学校の縦のつながりはもちろん、その先の進学・就職や生き方につながる教育が実現されていることである。

京畿道教育庁での革新学校（革新教育）についての話も興味深かった。国の方針に基づき、道が教育方針を打ち出し、学校がそれを具現化するというシステムが確立している。行政と学校が一体となって取り組むことで、迅速に教育効果をあげていることを感じた。学校や学習者のニーズに合わせた教育課程の編成やそれを支える教師の専門的な研修の充実、生徒主体の活動の活性化、保護者や地域社会とのパートナーシップや協力ネットワークの確立などは、市教育委員会という立場で市全体の教育や学校を見つめ直すときの視点として大変有効なものとなつた。

最後に、本プログラムを通して、韓国の先生方やホームビジットの家族の方々はもちろん、各地から参加された多くの日本の先生方と出会い、交流を深められたことも、自分にとっては大きな収穫であった。今回の研修でたくさん学ばせていただいたことを、これから少しでも生かしていくよう努力していきたい。

自国の文化を伝える難しさと楽しさ 小泉 卓史

グループプログラムレビュー会議でも述べさせていただいたことですが、このプログラムそのものの存在自体が、最も有意義であったと思います。オリエンテーションで顔をあわせただけの方々との 10 日間は、最初の 2~3 日はあれだけデラックスなホテルで寝起きさせてもらいながら、非常に長く感じられました。観光という気持ちは全く無く、研修に参加しているという意識しかなかったので、北村の散策などは正直あまり楽しめませんでしたし、ハードスケジュールだなと思っていました。ところが、上記のセッションや訪問を繰り返しているうちに 180 度気持ちが変わっていました。もっとも、それをはつきり自覚したのは、7 日目の歓送夕食会のときですから、いかにスロースターターの自分としても情けない限りです。

勤務する学校では、中国やニュージーランドの学校とは姉妹校提携をしていますし、韓国の学校とも交流を行っているのですが、授業などの関係で直接参加したことはなく、従ってユネスコスクールや ESD についてもそれほど知識・関心があったわけでもない自分が今回のプログラムに参加したのは、現在クラス担任がないということもありました。「どんなことをするのだろう。」という好奇心と、韓国の生徒に授業をすることができるという楽しみが自分をプラスの方向に傾けていました。

ソウル新龍山小学校を訪問したあたりから、変化はじまったようです。他の学校でもそうなのですが、まず校長さんのお人柄、独自のカラーを出すために学校をリードしていかれるわけですが、児童や学校を愛している気持ちがにじみ出ています。ですから、さまざまな問題はあっても、教師たちはその陣頭指揮のもと、チームワークができているのではないかでしょうか。また、ここでは、小学校の先生方が中心となって日本を紹介する授業を行うお手伝い

をさせてもらったわけですが、日本の先生方の御工夫と御努力には頭が下がる思いで、はじめて小学生との授業を体験させてもらいました。もっと折り紙の折り方を覚えておけばよかったと本気で後悔しています。

やはりピークは蒲谷中学校での授業ということになります。教師になって30年を超えますが、2学期の授業はじめが韓国の学校でとは、思いもよりませんでした。自分が責任を持って紹介できる、現在も存在している日本文化ということで、「歌舞伎」を選びましたが、その中で何を、ということになると一苦労です。いまになってみれば、ああすればよかった、こうすればよかったと反省しきりですが、浮世絵を使って、限取りとキャラクターを紹介する、拍子木を鳴らして「音」を聞かせる、そして、セリや廻り舞台などの舞台機構の解説にしぶっての35分、通訳は英語の先生、片言の英語を駆使しての一度きりの授業一、珍しいものを見ると言う顔で、それでも一所懸命に聞き、コミュニケーションをとてくれた生徒たち、感動しているのですが、いつもと変わらない顔で教壇に立っている自分を感じたとき、言葉の違いも異文化と言う語も消えていました。生徒が初めて接することを教えているときは、いつも異文化と接しているようなものではないかと思いました。それからあとの気が楽になったこと。飲めないのに「バクダン酒」を飲まされた歓送夕食会の楽しかったこと。（どうして、話ををしていなかった蒲谷中の校長が、遠くから私のフルネームを呼んで乾杯に来てくれたのかは謎のままでした。）しかし、考えてみれば、その前に学校訪問した体験や、国境見学、そして蒲谷中の先生方の所へホームビジットしたこと、グループの先生方が今日授業をしたという達成感。それらがひとつになってあの盛り上がりにつながったのでしょう。私たちは、そういうプログラムによって、自然と一体感が生まれ、生涯忘れない経験を共有したことになるのです。そのこと自体最も有意義であったと述べておきたいと思います。

韓国のおもてなしの文化 峯岸 愛

【最も有意義であった内容】

小・中・高の3校学校訪問が、最も有意義に感じた。日本では、小中一貫教育が叫ばれているが、そこに高等学校も加わる考えはない。韓国で実践して

いる様子を見ることができ、日本の「公教育だから中学校までの教育への問題に対する取り組み」という考えは子どものためではなく、大人側の考え方であるように感じ、改めて小中高のつながりの大切さを実感した。

【本プログラム参加にあたり設定した課題に対する効果】

一つ目は、韓国の英語教育を日本に取り入れ、英語力を高める実践を課題として参加した。

学校訪問を重ねる中で教職員の意見交換会により、韓国での英語の必要性が日本よりも高いことを実感した。学校での教育もより実用的な英語を意識しているが、家庭での取り組みや自主的な勉強が英語力の向上を支えていると感じた。日本的小学校で行っている英語活動が、コミュニケーション主体としている点で違いがあるものの、英語を話せるようになさせたい思いは同様であるため、韓国のバランスのとれた英語教育をぜひ取り入れていき、日本の教育でも英語を実際使える子どもを育成させたい。

二つ目は、国を超えた交流から、広い視野で教育を見つめなおす課題としての参加である。

プログラムを実施していく中で、韓国と日本の教育に対する国の対応に差はあるものの、子どものために汗を惜しまず努力する教師の姿勢は変わらないものと実感した。また、校則緩和の教育方向を先駆している韓国の実情は日本に参考とすべき事例であるように感じられる。家庭や地域が何のニーズを発信して子どもを学校へ送り出しているかを察知するのは、韓国の教育にレベルの高さを感じた。今後の日本での教育活動に取り入れ、学校・地域・社会がつながる教育を目指していきたい。

韓國のおもてなしの文化 中村 友弥

有意義な内容ばかりでしたが、最も有意義であった内容としてあえて次の2つを挙げました。

1つめは、「地域との連携」です。汝山女子高等学校の生徒とヘマル村でとうふづくり体験をしたときに「地域との連携」を強く感じました。訪問にあたり汝山女子高等学校の教職員、ヘマル村の方々、生態学校の方々が迎えてくれました。そのときの話で感じたことは、教職員だけでなく、地域の方々が子どもたちをみんなで育てていこうという意識の高さです。まず、地域の方々が学校教育のことをよく知

つておられました。日本でも学校教育に关心をもち、協力していただける方はたくさんおられます。その方々と連携し、教育を行うことの大切さを実感しました。

2つめは、授業です。授業をさせていただいたことは思い出に残る貴重な経験です。内容は、学校紹介→新聞工作（兜づくり）を通じての「侍」紹介です。その授業は、主に英語（Broken Englishですが…）を使いました。私の英語力で伝わるかなと不安でしたが、精一杯聞き取ろうしてくれる韓国の子どもたちのおかげで、何とか授業が成立しました。そこで感じたことは、英語を教えるのではなく、英語を通して人と関わろうとする心を育むことが英語教育では大切であるということです。日本は、いわゆる受験のための英語教育とコミュニケーションツールとしての英語教育という2つの大きな目標があると思います。小学校の英語教育として考えたとき、後者はとても大切です。もし、「なぜ英語を学ぶ必要があると思う？」と子どもたちに質問したら、何人が「人と関わろうとする姿勢を育むため。」と答えるでしょう。担任が授業を進める上で、ゴールを示すあるいは、子どもと共にゴールを設定することは不可欠です。そのような基礎的なところから私の英語授業を考え直したいと思います。

最後に「各自が本プログラム参加にあたり設定した課題に対しての効果」について述べます。

私は、韓国に来る前にこんなことを言われました。「今、韓国と日本は関係がよくないから気をつけて行って来てや。」確かに国の政治としてはよくない関係かもしれません。でも、国民はどう思っているのか。それを知るために、実際に会って話をすることしかありません。そんな思いをもって韓国へやってきました。ですので、韓国に来たときの温かい盛大な歓迎には驚きました。日本にもおもてなしという誇れる文化があります。韓国にもおもてなしの文化がありました。やさしい心遣いが研修を楽しいものにしてくれました。ホームビジットでも、学校訪問でも、KNCU のスタッフのみなさんにも本当に心温まる歓迎をしてくださいました。政治とは無関係に私たちを迎えて、やさしく接してくださいました。このことは必ず子どもたちに伝えます。最近の報道で、韓国のことによく思っていない子どももいると思います。確かに新聞ニュースで得られる情報は大切です。でも、それ以上に会って感じ、自分で考え判断することの大切さを伝えることが韓国で研修

させていただいた私の責務です。

京畿道教育庁で学んだ韓国の教育制度 中野 敏昭

今回の訪問では「韓国教育制度」について深く学ぶことを課題としていた。全体でも韓国の教育制度について説明はあったが、福岡県と同じ地方自治体の教育行政について学ぶ機会は少なく、そういう意味でも京畿道教育庁の訪問は大変有意義であった。京畿道教育庁イ・ジンソク副教育監の挨拶の中で「京畿道教育は韓国の希望である。この意味は韓国教育の課題を教育庁レベルで実践し、国に提案して様々な成果をあげているからである。」と述べられた。また国際レベルの教育を実行するために、フランスやドイツなど（残念ながら日本の学校は含まれていない）先進校へ訪問し参考にしたことの説明があった。

日本の教育長にあたる教育監は、選挙で選ばれるため公約を実現していくことが求められており、現在行われている給食の無償化も当時のキム・サンゴン教育監の公約で、京畿道から始まり韓国全土で実施されていることの一つであるということであった。

私が注目した施策は2つである。1つ目は「生徒人権条例」の制定で、その中には「生徒は服装について自分の権利を持つ」「髪の長さを規制してはならない」など、日本では校則で規制をかけている内容を条例で禁止していた。「生徒の自主性を尊重することで快楽主義になるなど悪い面が出てくることはないか。」という質問に、イ・ジョンヒョン指導主事は「規制を無くすと確かに一時的に生徒の行動が乱れることがある。しかし、人権を保障するという絶対的なことをあきらめることはできない。」「自分が尊重される分、他人も尊重することを教育する」と強い決意で語られた。このことは事前に訪問した蒲谷中学校で説明があった「以前は校則が厳しく生徒とコミュニケーションが取れないときがあったが、規制をしないことで、生徒と教員とのトラブルが減り教員生徒との距離が近くなった。」ことや「服装が創意的活動を阻害しないと考える。」と話されたこととつながった。

2つ目は「革新学校」の設置である。この取り組みは23ページのパンフレット（日本語版有）にまとめられており、そこには「10年を考え、100年の教育を見通します。」と記載されていた。具体的には1クラス25人を最適とし、学校の自立性を拡大し、1校

当たり 1 億ウォンの支援を行うものである。公教育を世界レベルに高めることを目標に、現在約 200 校で革新学校教育文化運動の定着を図り、2014 年に一般化を図る予定である。この取り組みは「教員の自発性をもとに改革を行う」方針のもと「真の学力」をつけることを目指している。ここでいう「真の学力」とは、教科書中心の教育を脱出し「生徒が自分の考え方をつくる」ことであると説明を受けた。また、「授業は教師と生徒、生徒と生徒の協働である。」と説明されたが、実際に訪問した小・中・高全てで協働の授業が普通に行われていたことが印象に残っている。ところで、日本でも協働学習という授業形態が注目されている。この協働学習を豊かにする方法の一つが ICT の活用であるが、韓国より日本の方がデジタル教科書導入やタブレット機器の使用などの ICT 機器活用を先進的に進めていくことについて、遅れを感じている。さて、「革新学校」実現のために推進課題を 6 つに整理しているが、「教師の専門性の育成」「学習者中心の教育活動改善」等の改革の方向性と同時に「教員の行政業務の軽減」や「教育活動を活性化する学校環境の改善」についても取り組むよう明記されており「教員の自発性をもとに改革を行う」ための支援策が施されていると感じた。

日本の 10 年後について疑問と不安を感じているなか、最後のグループプログラムレビュー会議の中で文部科学省初等中等局の佐藤専門職から、「韓国教育改革やそのシステムに対して日本の現在の状況には課題はあるが、日本教員の教育に対する熱意や思いは決して負けていないと感じた。」と我々に期待と勇気を伝えていただいた。

韓国の革新的な教育 中山 明美

プログラムの参加にあたっては、以下の 3 つの課題を設定しました。

1. コミュニケーションツールとして、高いレベルの英語教育を韓国ではどのように実践しているのかを知りたい。
2. 韓国の高校生の現状を知りたい。
3. カルチャーインターの経験を生かし、日本の良き文化を韓国でも紹介したい。

まず、ソウル新龍山小学校で、「放課後学校」などの時間を活用しながら、小学校 1 年生から、ALT による All English の授業が行われており、大変驚きま

した。読み・書きではなく、英語でコミュニケーションを取ることを第一とし、ゲームなども交えながら、英語を話すことの楽しさを、子どもたちに教えるのではなく、児童たち自身に理解させるような授業でした。ロールプレイングやグループワークなども多く取り入れ、コミュニケーション能力の育成にもつながっていると感じ、さらには児童たちが、外国人の教師であるわれわれが、教室に入って行っても、物おじすることなく積極的に発言することに感心しました。そして、韓国人の英語教師も英語で授業を行っており、教員のレベルの高さも素晴らしいと思いました。

汝山女子高等学校は、私が最も訪問を楽しみにしていたところです。生徒が主体的に様々な活動に取り組み、特に ESD 活動の一環として、環境・福祉・異文化・チャリティーや地域との交流など、ボランティア活動が盛んなことに、とても感心しました。

また、ある生徒に一日の過ごし方を尋ねたところ、「朝 8 時には登校し、授業が終わるのが午後 4 時。その後、サークル活動がある日は、その活動。そして、夜 10 時まで学校で勉強。」と話してくれました。「そんなに勉強しているの！」と私が驚くと、「なぜ驚くの？みんなやっていることよ。」と驚かれたことに、さらに感心しました。しかし、ヘマル村で生徒と手作りのお豆腐と一緒に食べた時、「ポケモンが大好き」とか「家では、お母さんと一緒にキムチを作る。」と話してくれた様子は、私のクラスにもいる、普通の女子高校生だなと思いました。

蒲谷中学校での「サバイバル・クラス」は、不安でいっぱいでしたが、生徒たちが、本当に温かく迎えてくれました。「日本文化の紹介」だけに止まらず、生徒からもたくさんの質問が出て、私が思いもしなかった、「方言」の話や「日本のアイドル」の話などで盛り上がり、日常の生徒の姿を見ることができた良い機会となりました。これから教員生活の中で、このような体験はもう二度とないと思います。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

その他に、今回訪問したどの学校にも、立派な ICT 機器が導入されており、教室には、パソコン・大型液晶ディスプレイが設置されて、様々な授業で活用されていたことは、羨ましく思いました。

最後に、今回の訪問での成果は、言葉では表せないほど大きなものがありました。ホームビギットや訪問した全ての学校での盛大なおもてなしに感激しました。そして、色々なことに驚きましたが、生徒

(子ども) たちは、日本も韓国も変わらないことがわかり嬉しかったです。

また、国内の異校種の先生方や他地域の先生方との交流は、これからのお教員人生の大きな励みとなり、財産となりました。

肌で感じた生徒たちの反応

大川 直樹

はじめに 10 日間の本プログラムは、どのプログラムも貴重な体験となり最も有意義であった。特に「最も有意義な内容」ということになると、やはりサバイバル授業となる。A グループ訪問校の要望により、各自がそれぞれ授業をすることとなった。授業の準備としては、日本文化授業ということであったが、自分の本プログラムにむけての課題と照らし合わせて、もう一度見直し準備することとした。

現在、勤務校でも「心を耕す道徳の時間」をねらいとして道徳授業の実践をしている。道徳の時間は、生活指導とは違い即効性はないが、ゆっくり自分を振り返り、自分を見つめ、自分を伸ばすことを目的としている。その道徳の時間を国は違うが、韓国の同じ中学生の生徒たちと共に授業ができたらよいと考え、計画した。内容は「向上心」として、資料も日本の文化にもつながる「からくり人形」にふれたものとした。主人公が仕事を変えながらも常に自分のやりがいを探して、オートマタというものに出逢い夢を実現し、さらに自分を高めていくという資料である。導入では、「将来、やりたい仕事はありますか?」と韓国語で質問すると多くの応えがかえってきた。実際 30 分間の授業をしてみると、日本のように内容を深めるところまではまったく到達しなかった。しかし日本と同じような反応があり、興味はもてたようだった。

30 分という短いようで長い時間で貴重な経験ができました。この経験では、学校訪問の授業見学だけでは見ることのできない生徒たちの表情を見ることができ、また反応を肌で感じることができ、とても有意義な時間であった。学校の教育目標にもなっているように、ともに学び・ともに考えるという実践がされているということも授業をしてみて感じることができた。何よりも、準備も含めて自分自身で体験できたことが成果であった。

固定観念からの脱皮

小野寺 信弘

1.持続発展教育 (ESD)、国際理解教育 (EIU) の視点から

自校で行っている持続発展教育 (ESD) と対比させながら、韓国における小中高の実践を興味深く観察することができた。児童生徒の人格形成を考えたバランスのよいテーマの設定や地域の特性に応じたテーマ設定がなされていた。また、課題解決に向か、地域連携やさまざまな方向からの課題へのアプローチがなされ、各教育活動の綿密なプランを実感することができた。学校教育における ESD の更なる可能性を授業や課題活動の中から見て取ることができ、参考になる観察ばかりであった。

2.韓国の教育事情、教育環境の理解に関する視点から

人口が約 5000 万人、超高齢化社会の到来。この国内情勢を見据え、エリートの育成、学校や地域の差別化を図っていこうとする韓国の教育の方向性を実感した。また、普段から中学校の社会科の教師として、視聴覚教材の更なる効果的な生徒への提示方法はないかと考えていた。PC データを TV に映し出すことも実践しているが、教室に常設した PC やその配線でないため、TV、PC の配置や準備の面倒さを強く感じていた。韓国の中高の教室の環境、授業の一端を見学し、その環境の高さに感心させられた。学習目標に迫るために効果的な手段の一つであると感じた。

3.日韓の教職員の交流の視点から

最初のプログラムである ESD 日韓教員フォーラムにより、韓国の今日の教育事情、教育環境に加え、新しい思考の手法などの概要をとらえることができた。また、小中高の観察により、韓国の教職員、児童生徒との交流が図られたことにより、互いに抱える課題を共有することができた。

4.韓国の文化、歴史への理解の視点から

北村韓屋村、水原華城、ホームビジット、DMZ などを通じて、韓国の文化、歴史に直に触れ、その相違点を考えるよい機会となつた。

我々は、日本で育った日本人である。日本という環境で育ち、自然と日本の特性、文化を身に付け、日本的な物事への考え方を身に付けている。日本とは異なる文化に触ることで、日本式のものさしでは測れない感覚を実感することができた。

また、異文化に触れ、異文化を考えることが最終的には、自分自身が日本文化との相違でしか考えていないこと、日本文化を再認識することの重要性を再確認することにつながった。

これまで、自分の目で見ることの重要性は認識していたものの、社会科教員ながら海外に行く機会は少なかった。海外で物事を考えることの有効性を強く感じさせる大きな機会となった。

続けていきたい顔の見える関係

佐伯 貴昭

【最も有意義であった内容】

各種学校訪問やホームビジットにおいて、韓国の先生方や生徒たちと直接触れ合い、交流することができたことが最も有意義であった。コミュニケーションを図る上で言葉は重要である。韓国語、日本語、英語が入り混じっての会話であったが、一方通行ではなく、双方向で情報を伝えたり共有したりすることができたことは大きな成果である。電子辞書やスマートフォンの翻訳アプリなどもコミュニケーションを図る上で重要なアイテムとなった。

そのなかでも、ホームビジット先の皆さんと日本や韓国のことについていろいろ話をることができたこと、見学だけではなく実際に教壇に立って授業をすることことができたこと、短い時間ではあったが生徒や先生方と直接会話をることができたことが心に残っている。

また、韓国ユネスコ国内委員会の方々や通訳の方々と酒を飲みながら会話をした内容が一番中身が濃く、韓国の教育や文化・社会について大変勉強になった。

【本プログラム参加にあたり設定した課題に対しての効果】

本プログラム参加にあたり、大きく2つの課題を設定していた。1つ目は、韓国の教員や人々との交流を通して、生徒レベル・民間レベルでの直接的な交流のきっかけをつかむこと、とりわけ ESD という共通の枠組みで強いきずなを結びたいということである。2つ目は、韓国の教育事情を視察し、我が国の教育と比較しながら、これから持続可能な社会を構築するための教育への示唆を得ること、特に教育のIT化がもっとも進んだ国の一である韓国の実情を視察し、我が校・我が国の教育の更なる向上のために寄与したいと考えたことである。

1つ目については、大きな成果があった。やはり、直接話することは大事なことである。各種学校訪問やホームビジットなどを通して、お互いの顔が見える関係を構築し、帰国後もメール交換を行うなど交流のきっかけをつかむことができた。今後は、相互の取組を交換したり、生徒同士の交流ができればと思っている。なにより、このつながりを大切にしていきたい。

2つ目については、ESD の取組について、日本と同じように取り組んでいることもあれば、汝山女子高等学校のように学校全体で地域の特性を生かした先進的取組を行っているところもあり、総じて日本よりも取組が進んでいるようであった（特に先進的な学校を視察したのかもしれないが）。また、韓国では取組が停滞すれば、ユネスコスクールの登録から削除されると聞き、厳しいけれども納得のいくシステムであると感じた。日本も ESD を一層進めていくためには、それぐらいのプレッシャーがあつてもいいのかかもしれない。ICT については、どの授業でも当たり前のように活用されており、日本でこのような環境にするためには、まだまだハード面とソフト面の両方で整備が必要であると感じた。

韓国の教育で今回最も驚いたことは、3年前に教師による体罰が全面禁止となり、特に京畿道においては生徒の人権を最優先に考えた取組が行われている点である。また、校内暴力が増加してきてることも韓国教育の負の部分であろう。日本の中学校教師の感覚からすれば、あまりに自由にしてしまうとコントロールが利かなくなり、まじめにやることがばかりかしくなるような学校になってしまうのではないか、生徒たちは自分のことばかり考える身勝手な大人になってしまうのではないかという危惧を抱く。韓国の先生方は、さまざまな問題もあるかもしれないが、そちらに目を奪われるよりも、この施策によりプラスの面を伸ばしていきたいという答えであった。この方向性が吉と出るか凶と出るか、数年後もう一度確認してみたいと思った。

ユネスコスクールとしての役割

関根 寿典

本校は、今年1月17日に千葉県公立中学校で始めてユネスコスクールに認定され、まだ ESD 等の活動の実績もほとんどない状況である。ただ、今まで活動している環境活動、福祉活動等をどう今後持続発

展させるか、さらに他に関係するものはないか、こういう点を ESD に結びつけるにはどうすべきかという課題を持って本プログラムに参加した。その結果、日韓フォーラムでの汝山女子高等学校と高野口小学校の日韓二校の発表を聞き、非常に参考になった。

汝山女子高等学校は、韓国でも ESD 先進校で環境、福祉、多文化など様々な教育を授業さらにボランティア活動で行っている学校であり、実際に学校を訪問させて頂き、授業の様子や生徒の活動を目の当たりできたことが、意義があった。DMZ でのボランティア活動は、環境から平和教育までを含んだ活動で本当に素晴らしい取組みである。自校は、ここまで活動、取組みはできないが、現在、行っている地域に出向いてのゴミ 0 運動、敬老会への参加、世界遺産の紹介等へボランティアとして活動している事に通ずる点あり、今後の参考にしていきたい。

高野口小学校の地域学習—今、昔プロジェクトは、地域の昔と今を知ることが、未来にも生きることにつながっていくという発表であった。自校でも総合学習において地域や世界遺産の地「京都・奈良」世界遺産に申請する「鎌倉」などの調べ学習をし、それぞれに修学旅行や校外学習に出向いている。こういう点も ESD に通ずる点として今後も継続、発展させていきたい。

自分自身が、本プログラムへの課題として掲げた自校の ESD への関連を上記の二校の発表と現地での小中高の訪問、さらに世界遺産地の訪問によってより身近に感じられるようになり、今後の柱立てに繋がると確信が持てたプログラムであり、意義深いものであった。

上記は、自分の課題の成果として述べさせてもらったが、自分自身が最も有意義であった内容は、すべて勉強になったが、特にあげるとすれば、二点あげられる。その一つがホームビジットである。多文化社会の現在、多文化の特色を知ることは、大事なことであるとよく生徒にも授業で触れることが多い。そうした自分自身が韓国的一般家庭に訪問させて頂いたことは、本当に意義深いものであった。家族の様子を知ることや家庭料理を頂き、食事での礼儀や食生活の様子を肌で感じることができたことは、国際社会を理解していく第一歩になった。

二つ目として蒲谷中学校でのサバイバル授業である。今までの訪問では、行われていなかったということだが、教員一人が各教室に入り、授業を行う内

容である。韓国語をしゃべれない自分がどういう授業を行ったらよいか、最初は悩んだが、日本の現代文化についての紹介をテーマに決めてからは、迷いなく授業の準備をした。その後、教材準備は多少、大変ではあったが、教材をしっかりと提示していくことで生徒の興味・関心を引き出せ、有意義であった。言葉が通じなくとも我々の熱意と教材さえしっかりと用意できれば、なんとかなると実感できた体験であった。

以上二点は、今後の教員生活の中でも、最も有意義になる経験だと感じた。

プログラムを通した教育の再考

杉本 伸樹

1.はじめに

教職に就いてから 10 年間、これまで日々の仕事に追われ、世界はおろか日本の教育事情についても考えたことはなかった。今回この研修のおかげで、世界の教育に対して興味を持っただけではなく、日本の教育について考えるきっかけを与えてもらった。

2.最も有意義であった内容

多くのプログラムから様々なメッセージを受け取ることができた。

ESD 日韓教員フォーラムでは、現場でがんばる先生方の熱意を感じた。国が違えども、子どもを思う気持ちは変わらず、同じ教員として仲間意識を持った。

学校訪問では、多くの人たちが教育に携わり、日々努力することの大切さを知った。小学校では、学級掲示を工夫したり、靴をそろえて規律を持たせたりしているところをみて、私の学校でもしていることだったので、とても親近感が湧いた。中学校では、校長先生のリーダーシップのもと、全職員が連帯していることを感じて、目標に向かう組織としての一形態をみることができた。高校では、地域特性を最大限に生かした最先端の教育を知ることができた。地域とともに活動するには、大変な準備が必要であるが、教員だけではなく、生徒や地域の方々が生き生きと活動する光景を見て、地域における学校の役割について勉強することができた。

行政機関の訪問では、政策を立案し、教育現場に反映させるまでのダイナミズムを感じた。

3.プログラム参加に当たり設定した課題に対しての効果

本校の教育課程を、ESD の視点から見直したいと考えていた。今回の研修で、地域と結びつくことが重要であると感じた。本校は社会科の研究校であるが、これからは、地域教材の開発をしていきたい。また、地域人材と交流ができるようにしていきたい。また総合的な学習の時間では、6年生で国際理解の観点から問題を設定していくのだが、今回の研修を通して知り合えた韓国の学校や日本全国の学校の先生方と協同して単元をつくっていきたい。

八千代市では、数年来子どもサミットという活動を行っている。子ども達が地域に働きかけて自分たちで考えたことを実行するのだが、国を超えた交流を考えていきたいと思う。ソウルの新龍山小学校で行っていたペットボトルキャップ回収活動など、八千代市でも行っていたことがあるので、是非お互いの活動を紹介しあいたいと思った。

4. ESD に対しての所見

①地域連携：これからの教育は、子ども・教師・保護者という3つの関係に加えて、地域社会を加えた4つの関係の中で行われるべきだ。教育は未来に対する責任がある。社会全体で教育をしていくことができれば、るべき未来の姿を教育で作ることができると思った。

②世界市民主義：世界規模で発生している問題には、全世界が協力して歩調を合わせた教育をすることで解決に向かうと思う。ESD の活動を世界中に広めていきたいと思う。

試してみたかった TV 会議

田中 文子

当初、私が決めたテーマは、ユネスコスクールの先進事例を知り、あらたな教材についての情報を得ることと、私が暮らしている北九州は朝鮮半島と関わりが深い街ということで、韓国についての知識や経験をより深める、ということでした。しかし、8月中旬以降の日韓情勢の悪化を受けて、自分自身のテーマが変わりました。こんな時期だからこそ、少しでも多くの韓国人と話をしてみよう、快くない思いをたぶんするだろうけど、それも貴重な経験になると思ったのです。

ですが、「不快な思いをするかも」という私の思いは早速裏切られました。ESD 日韓教員フォーラムでは、水原で日本語の先生をしている方が大学の先輩と知り、意外なめぐりあいに盛り上がりいました。お

互いに声をかけなければ、たぶん、大学の先輩と後輩の関係であると知らない今まで終わってしまったと思います。また、歓迎交流会で同じテーブルに座っていた先生と仁寺洞で再会したのも印象的でした。半ば強引に私の手を取り、再会を喜ぶ彼女に対して当初私は戸惑いましたが、私が行きたかった国立中央博物館に連れて行ってもらい、食事をごちそうしてくれました。博物館で一緒に仏像を鑑賞し、インドから日本への仏教伝播のルートの説明を見ながら、互いに「弥勒菩薩がいいね」、「私は薬師如来だ」などと話しているにつれ、当たり前のことではあります、日本と韓国はつながっているんだなあと痛感しました。先生以外の韓国の方との関わりも印象的でした。特に、釜山郊外の梵魚寺を訪れた際、年配の男性に声をかけていただき、日本語で寺の由来等の説明をしてもらい、とてもありがとうございました。

訪問先の学校やホームビジット先での手厚いもてなしにも感銘を受けました。特に、蒲谷中学校では、ずれ違う多くの生徒たちが気さくに日本語であいさつをしてくれましたし、訪問団一人ひとりに授業までさせていただきました。日本と同様、韓国の学校でもきっと授業時数の確保が重視されているでしょうから、貴重な時間を割いて私たちに授業をさせてもらったことになるはずです。本当にありがたいことだと感じています。

韓国の教育事情について知ることができたのも大きな成果でした。韓国では各教室に ICT の環境が整備されているので、授業には USB を持って行くだけで良いとは聞いていましたが、聞くのと実際に見てみるとのとでは大きく違います。サバイバル・クラスでは、インターネット接続環境をお願いしていましたが、実のところ期待はしていませんでした。ですが、何の支障もなくさくさくとネットがつながるのを見て、私は後悔しました。こんなことなら頑張って準備して、本校の生徒との TV 会議をセッティングすればよかったです。私なんかが授業をするより、間接的ではありますが同年代との交流の方が生徒たちも喜ぶはずです。次年度授業をされる先生には、条件さえ整えば TV 会議に挑戦することを強く勧めたいと思います。

心残りなのは、ESD の実践状況について日本の先生方と十分な情報交換ができなかったことです。特に、中学校の社会科や高校公民科の正課の授業での ESD の取り組みや使用している教材については、本

プログラムで入手したかった情報です。ですが、ACCUの方がメーリングリストをつくってくださいましたし、韓国の先生との交流と異なり言葉の壁がありませんので、これからメール等で十分情報交換できそうです。たいした取り組みはしていませんが、ESDらしい実践を授業で行った際はメールで発信していくこう思いますし、他の先生方の情報提供にも期待したいと思っています。

日韓それぞれの良い取り組み

田中 秀周

「安全教育について」

学校のセキュリティは充実していた。防犯カメラの設置、ガードマンの配置（セコム）など学校の安全が守られているという感じは受けた。日本でも、警備会社にセキュリティ、防犯カメラを設置する自治体はあり似たような感じを受けた。避難訓練については、自然災害を想定したもの等、地域性が出ており、日本のように地震や津波を想定した訓練の頻度よりも、空襲に備えた訓練があるという点は韓国の現状を改めて痛感させられた。

「体力の維持・向上について」

以前は全国でスポーツテスト（共通のもの）が実施されていたが、現在は実施していないとのこと。その代わり、体育の授業や放課後活動（体育的な活動）での充実を図っている。日本では、十数年前に児童・生徒の体力の低下が懸念され、学校体育の現場では基礎体力の向上を目指して取り組んできた。その結果、義務教育を受けている期間の9年間は、全国共通の指標をもとに基礎体力の向上が児童・生徒全員に対して図られている。反対に、韓国では全体のレベルアップにつながる継続した調査はせず、取り組み内容に焦点を絞っていると感じた。直接話を聞いた方は、「多少の二極化はやむを得ない」とのことだった。

また、午前中（10時ごろ）に希望生徒には牛乳を配布し飲ませている。費用については国家で補助しているとのことで、日本国内で「早寝、早起き、朝ごはん」のスローガンのもと、朝食と学習効果が密接につながっている中で、午前中の牛乳は良いアイデアだと感じた。ただ、午前中に飲ませているのは牛乳が新鮮なうちに（？）ということで、意図的な取り組みではないらしい。

「ESD・EIU活動について」

各学校とも、ESD・EIUとボランティア活動がとても盛んに実施されていた。高等学校や大学への進学の際にボランティア活動などの取り組みを評価されるということもあるのだろうが、それにもまして、児童・生徒自ら積極的に取り組んでいる姿を見ることができ、また、先生方の「生徒自ら取り組ませていく、指導のビジョン」が「小学校から中学校、高等学校」まで長期的に捉えられており、明確で、大変参考になった。

「まとめ」として

今回のプログラムに参加できたことで、ICT教育、英語のみならず他の言語も含めた外国語教育に対して、国家や韓国国内の企業のサポートのもとに充実した環境・取り組みを行っているという印象を受けた。また、放課後の活動においても学校によって学年ごとの取り組みが設定されており、一般教科だけでなく芸術教科での放課後活動も多くとりいれられていた。ただ、日本には日本のよい取り組みが、韓国には韓国の実情に即した取り組みというものがあるので、すぐに「韓国この取り組みがよいから日本でも真似をしてみよう」ということはベストではないと感じた。韓国内で生徒による暴力行為が近年問題とのことだが、生徒の人権を尊重しながら、ダメなこと・いけないことは許さないという姿勢が大事ではないかと感じた。その上で児童・生徒と教員、保護者、地域の方とのよりよい関係が築けていけば理想的である。

最後に、言葉や文化の違いは多く感じたが、生徒に対する愛情は韓国の教員も、日本の教員も同じで、熱い思いを共感できた。そして、このような貴重な時間を提供していただいた、両国のユネスコ関係者をはじめ、文部科学省、そして教職員の方々と同じ志で研修に参加できたことは私にとって大きな財産となりました。

多様なESD活動の根底にある平和教育

田中 誠一

今回のプログラムで、有意義であったと最も印象に残っているものは、やはり各学校への訪問である。特に勤務校が高等学校であるので、高等学校、中学校への訪問が事前に設定した課題に関連して成果があったと思います。

勤務校では2004年1月にASPnet加盟承認されて以来、それまでの国際理解教育から、総合の時間を

利用した ESD に変え実施してきた。そのような中、10 年目を前に授業内容の見直しの参考に、各学校の実践を知りたいと課題を設定した。

また、ESD を広めていくには地域との連携を図っていく必要があると考える。勤務校の高等学校では、「地域」の扱いが難しくその連携をどのように進めていけばよいか悩むところである。その実例についても知りたいことを第 2 の課題に設定した。

まず第 1 の課題である ESD の実践である。特に印象に残ったのは、汝山女子高等学校と蒲谷中学校であった。

ESD の授業というと環境教育を中心に置く場合が多いように思われる。しかし本校では、環境教育も扱うが、紛争問題、経済格差、ジェンダー、人権問題、情報格差等を意識して取り扱っている。1 年生の初めには、幅広く考えられるようにこれらについての講義を行っている。しかし、話だけで終わってしまうことが多い。紛争地域に旅行したことがある先生が体験を話したりもしているが、身近なものとしてとらえられない傾向にある。

今回、汝山女子高等学校での取り組みの根底に「平和教育」があることを知った。「平和」が損なわれたときに、いかに環境問題や経済問題に取り組んでも効果がない。まずは、「平和教育」であるということであった。その背景に韓国最北端の私立高校で DMZ に最も近い立地であり、DMZ 内のヘマル村の人たちとの活動がある。身近に「平和」を考える機会があることも理由であろう。しかし、ESD の諸問題は密接に繋がりあっており、その関連の根本の一つに「平和」があるという意識が大切であろう。

残念ながら日本ではこのような機会はない。しかし、今回、都羅山展望台やヘマル村を訪問し、警備している兵隊や住民の方のお話を聞けたことは非常に重要なことだと思う。実際に、行って、見て、聞いて、体験した人の話には力があると思うので、今後この話をするときに説得力を持ち、考えてもらえるきっかけになると思う。根底におくものが必ずしも「平和」である必要はないが、これが大事だと考える。

さらに、蒲谷中学校で「生徒の人権を大切にする」お話を聞いた。これは別の話題での話ではあったが、ESD の基本にも通じる話であると思う。自分の人権を大切にするのが大切なと同時に他人の人権を尊重するのだ、という考えが重要である。

2 つ目の課題については、地域連携についてである

が、こちらは明確な事例は得られなかった。しかし、いくつかのヒントを得ることが出来た。まず、汝山女子高等学校においてであるが、多くのサークルでいろいろなテーマで活動しているが、それをいかにみんなに知らせるかに意識を置いていた。地域と連携して何かを行うことを考える前に、いかに地域に発信するかを、まず考えるとよいのではと思う。

また、蒲谷中学校では保護者の参加が多いということであった。高等学校は校区が限定されていないため「地域」を意識するのが難しいが、保護者を地域の代表と考え、まずはそこから繋がっていってはどうかと考えた。

第 3 に、課題としては設定していなかったが、IT 設備の充実が印象に残った。各教室に大型の液晶ディスプレイがあり、教卓もしくは教員席にはパソコンが用意されていた。日本でも教科書の電子化を進めているが、日常的に利用できる環境にある韓国とは何年かの遅れを取っていることは確実である。

世界をリードする人材の育成

東垣 茂男

<最も有意義であった内容>

どのプログラムも有意義であったが、最も有意義であった内容といえばやはり「学校訪問」である。韓国の教育環境、内容、システム、子どもの様子等教育の現状が自分の目と体験を通して知り得た事、そして日本の教育に対する危機感と日本の教育の在り方、良さを見つめ直す機会を得たことである。

まず、訪れた学校の施設が充実していたこと。体育館まで空調設備が完備され、どの教室もエアコンと扇風機があり、PC 等の情報機器の配備と授業で使用するソフトも行政から豊富に支給されていることに驚いた。また、情報教育の充実と共に圧倒されたのは英語教育である。小学 3・4 年生で週 2 時間、5・6 年生で週 3 時間、内容も高学年で中学 2 年程度のレベル（参加した日本の英語教師）だとのこと。英語は、世界の共通語として今やグローバルな世界で活躍するには欠かせない言語。日本では 5・6 年生で週 1 時間、低・中学年では学期に数時間外国語に親しむ英語活動として授業が行われている現状を見るにつけ、それよりももっと国語の力を付ける方が先決とも考えていたが、韓国の授業風景・子どもの様子を見て、その考えに疑問を持った。外国語を学べば母国語の、外国文化に触れれば自国の文化伝統を

更に知り理解する、どちらも重要であることをこの訪問で再認識した。韓国の学力がピサ等国際比較で上位であることについて、国や親が教育熱心で教育投資も多く、また個を伸ばす教育施策と成果は目を見張るものがあり、しかも児童の積極的、意欲的な様子を見ていると理解できるようであった。

小・中学校、高等学校、及び教育庁を視察して、共通して感じたことは、校長に大きな裁量権（予算や人事等）があり、特色ある学校づくり、学校経営を大胆に行っていることだ。韓国は国土もせまく資源もない。韓国が生きる道は人材であり、しかもグローバル化した世界をリードする（国際競争に太刀打ちできる）人材の育成であると聞いた。それは日本も同様であろう。日本も欧米に追い付け追い越せと邁進した結果、アメリカに次いで第2位の経済大国、教育でも世界のトップを維持してきたが、今やマスコミでよく言われるように、明確な目標を失い、過去の栄光にあぐらをかき、手をこまねいているうちにいつの間にか先を越されているのでは…と改めて危機感を強く抱かざるを得なかった。

＜参加にあたり設定した課題に対しての効果＞

参加に当たって設定した主な具体的課題として、家庭・地域と連携した教育の在り方、環境教育をはじめとする持続可能な発展、社会形成に向けての教育の在り方を学ぶことを設定した。これらの点については、多くの事を学んだが、ESD 日韓教員フォーラムでの講義や報告、また学校での授業や活動を視察する中で、私が今まで学校で取り組んできたことに自信と確信を与えてくれるものとなった。特に今回のフォーラムの目標、主題にも明確に位置付けている、地域社会とのネットワーク形成や協調（相互協力関係の増進）は、ESD を取り組む上での必須条件として挙げられている。日本では、「総合的な学習の時間」を中心に、国際理解教育、環境教育、福祉ボランティア活動、伝統文化、人権・平和教育、食育・健康教育など多様な課題について、地域素材や人材を活かし地域と連携しながら活動を展開している。これらの教育展開は、韓国に勝るとも劣らないものだと思った。退職校では、コミュニティ・スクールの指定を受け、地域総がかりの教育システムの構築「学校づくりは地域づくりの視点から双方向の活動支援や学び合い、地域の方々の思いや願いを受け止めつつ自分の生き方や地域の在り様を考え、地域貢献や地域作りまで見通した総合的な学習の時間等のカリキュラムづくり」を目指してきたが、この

方向は ESD が目指すものとほぼ同様であり、今後は ESD の視点から見直しを図りながら、「故郷に愛着と誇りを持ち、共に生きていく学校、故郷づくり」の活動を展開し発信をしていければと思う。

私の心残りは、韓国の教育の一端に圧倒され、訪問中に日本の教育のよさ日本の優れた教育実践活動や日本の先生方の奮闘ぶりを胸張って紹介できなかつことだ。韓国の教育から学んだことを、日本の教育のよさを伸ばしつつ、どう活かし改善していくかが今後の課題である。

子どもたちの将来像と教師の熱意

土田 恵久

今思う一番のことは行ってよかったということです。韓国の教育について知ることができたことはもちろんのですが、日本の先生方、また韓国の先生方と交流できたことは今の自分の活力になっています。なぜなら、皆さん熱い！教育に携わる者としてとても勉強になりましたし、子どもに向かう熱意を実感として受けとることができました。今後、今回知り合うことができた先生方から頂いたやる気を自分の教育実践として子どもたちに渡していけたらと思います。

今回のプログラムで最も有意義だったことは何より学校訪問です。教育の様子について自分で調べることはできますが、実際に教育の現場である学校に入る経験はこういったプログラムでないとなかなか実現できないことでした。ですので、教育の環境、子どもたちの様子を自分の目で見て、聞いて、そして感じられたことはたいへん勉強になりました。また、韓国の教育については全く何も知らない状態でしたので、プログラム初日に韓国の教育についての概要を聞いてから学校訪問に行けたことはありがたかったです。また、ホームビジットも各家庭に負担は大きかったとは思いますが、訪問させていただけた私にとってはとても貴重な時間でした。訪問した学校で知り合った方たちとは違った家族のような繋がりを築くことができたと感じました。

行く前の自分の課題として、ESD や国際交流をどう進めていったらしいのか自分自身迷っていました。特に本校の取り組みの「いま昔プロジェクト」について考えると地域のつながりという点において、今の環境がいかに恵まれているかということに気づき、逆にこういった繋がりの薄い地域の職場に行った時

どう行動すればいいのか見当もついていませんでした。しかし、私が ESD の中で大切に考えている「子どもたちに自分の町を好きになってもらいたい。これから多くの多様な社会の中であっても、大人になったとき地域に貢献できる大人でありたいと思う人になってもらいたい。そのために学校・保護者・地域が力を出し合って活動する。」という面は大切に守り続けたいという思いがありました。そんな時、このプログラムを通して課題をクリアするために大切な 2 つのことを学ぶことができました。

1 つ目は子どもたちに育って欲しい姿を実際にイメージして教育に取り組むことです。これはまずは、地域との交流などがなくても、生徒指導でも学級経営でもどんなところでも担任として行える ESD だと思います。

しかし、これだけでは上記のようなゴールにたどり着けないので、地域の方との交流、地域のことを知るということは避けては通れません。こういう時に大切なのは、教師の熱意であると今回のプログラムで確信しました。これが学んだ 2 つ目です。そして、これはまだ地域との繋がりがない学校へ行った時にも大切になってくると思います。このプログラムでも韓国の先生方とつながることができました。国が違うし、言葉が違う中でもコミュニケーションが取れ、繋がりを作ることができました。私たちは同じ国で同じ言葉を使うので「学校と地域」という繋がりを作ることはできると思います。そんな中、一番はじめの行動として、顔を合わせて話をすることは必ず行っていきたいことです。実際プログラム中はそうやって話をする中でだんだん繋がりが構築されていきました。教師として熱意と真摯さを持って地域に顔を覚えてもらうことから全ては始まるのだと思いました。ESD を進めるにあたって抱えていた課題について、「普段から子どもの将来の姿をしっかりとイメージし教育にあたること」、「熱意を持って、地域の方に顔を覚えてもらって繋がりを作ること」この 2 つが本プログラムに参加して得られた答えでした。

平和教育について、外国語活動について、国際理解について、ICT 教育についてなど、視野を広げることができます。また、教育の仕組みについて韓国、日本の違いと同じところを知ることを通してより良い教育環境、教師の身の振り方、学年を通した教育意識の確立などについて考える機会にもなりました。

B グループ

訪問で感じた日韓の共通性と差異 伊藤 公一

成果として第一にあげられることは、東日本大震災の折、韓国から頂いた支援物資や義援金、励ましの手紙などのお礼が、各訪問先でできたことがあげられる。私ども、宮城県に居住するものは、韓国の方々から多くのご支援を頂いたことは忘れることができない。

第二にあげられることは、小学校・中学校・高等学校と参加した先生方が所属している学校の様式と要素を備えてある学校が訪問でき、それぞれの特徴ある学習活動が実際に体験し見ることができたことである。それぞれの学校が抱えている問題も少しであつたが浮き彫りになり、日本と共に課題や問題が出てきて、各学校へ帰っての取り組みにとても参考になった。

第三にあげられることは、韓国の子ども達の学習時間が長く、とてもよく頑張っていることが分かった。特に英語の学習は、小学校 1 年生から始めていることや、ソウル徳義小学校の場合は、能力別クラスで学習していくとても参考になった。能力が同程度なら、教え方も均一にでき進度も同じように進むことができる所以良いと考えた。

第四にあげられることは、教育環境の整備の仕方が学べたことである。セキュリティや補助指導員、ボランティアや指導補助員の使い方、IT を教師間で共通使用できる等のハード及びソフト面の整備等は学ぶところが大であった。

第五にあげられることは、忠清南道教育委員会の教育方針である。「忠南学力ニュープロジェクト」という独自の教育方針に則り、良書と社説を読むことから始まり、個人に合わせた学力増進プログラムの推進や英語教科書の暗記で英語力の自信を養わせたり、探求・実験を中心の科学教育で、一人一人の学力を支援しているなどきめ細かな指導が見てとても参考になった。

「夢を叶えるために勉強をする」

枝本 亜希

今回、この韓国招へいプログラムに参加し、最も有意義だったのは韓國の小中学校や高等学校の訪問とホームビジットだと思います。実際に授業を行っている日に訪問し、生徒とのコミュニケーションや先生方と話し合いをすることができたことは、テレビやインターネットを通して知り得る情報をはるかに超えたものでした。

ソウル徳義小学校では、門に指紋認証のシステムを設置するなどの徹底した安全管理のもと、多くの地域の方々の協力を得て、教員の負担を軽減していくことには大変驚きました。給食の準備片づけにも多くの人材を置いたり、高学年は食堂での食事になつたりと、システム化されていました。担任を中心に食育も兼ねた給食指導を行う日本とは違い、担任の負担が軽減されながらも、流れに沿った衛生指導から食堂での自由な食事にも印象づけられました。また、算数の授業が一人一台のコンピュータで成績管理をしながら行われていたり、ネイティブスピーカーによる英語の授業、一人ひとりの要望に沿った放課後学校の充実など、驚くことが多く、大変参考になりました。

ソウルから離れた地方都市の論山では、男子高校と女子中学を訪問しましたが、ソウルの喧騒からは離れたのどかな場所であっても、韓国の教育理念のもと教育活動が行われていました。いずれの学校もやはり学校評価をかなり意識した内容ではありました。特に印象的だったのは、論山女子中学校の生徒の、「私たちは夢を叶えるために勉強している。韓国の発展は教育によってのもので、私たちも優秀な人材育成のためにも勉強するのだ」という発言に、驚きながらも自国への思いや親への思いを実感しました。豊富なサークル活動を通して趣味の楽しさから能力を開発したり、専門家や地域の方の協力、先生一人ひとりの力量の UP など、求めるものの高さを感じました。

今回このプログラムに参加するにあたり、一番興味があったのは、自分の専門教科である英語教育の実態を知ること、韓国の ESD について知ること、そして人とのつながりを大切にし、小さくてもいいので国際協力や国際平和のひとつの力になりたいということでした。このプログラムに参加した成果は 2

つあります。まずは、韓国の教育に対する手厚い投資を知ることができたこと。それぞれの学校で見た充実した ICT 機器、一人ひとりに合ったプログラム、子供たちに関わる多くの人材、教科教室制など、国のシステムは違いますが、こうした恵まれた環境の中で指導できる教員や、教育を受けることができる生徒たちは素晴らしいと感じました。

ソウル徳義小学校で見た、放課後学校の英語教育は、小さいころからネイティブスピーカーのはつらつとした授業で、楽しみながら学習できる環境でした。小学校の授業の様子も、ICT 機器を使用したわかりやすいものとなっており、それまでに学習した内容をさらにステップアップさせたものになっていました。抵抗なく英語を話し、自分の気持ちを伝えようとする姿勢が早くから見られていたのも、幼少期からの楽しみながら学習した成果ではないかと感じました。状況は違うものの、参考にできることは多くありました。ESD の実践は残念ながら見ることができませんでしたが、フォーラムで汝山女子高校の先生の発表にもあったように、韓国ならではの地域性を活かした持続発展型の内容、プログラム化された学習形態、地域の協力など、これから日本も参考にできるものもあると思います。お互いの国の良い点を合わせて、さらに教育が発展していくべき、今回のプログラムの意義はあるのではないかでしょうか。

2 つ目は、人とのつながりを得たことです。ACCU や KNCU の方々、ホームビジットで知り合うことができたホストファミリー、学校訪問で出会った先生方、通訳をしてくれた学生など現地で知り合ったたくさんの方々とのつながりをぜひ大切にしていきたいと思っています。これからも連絡を取り合って、ぜひ交流していきたいと思います。また、韓国の方だけでなく、日本各地から集まつた先生方や、校種職種を超えた方々との交流もでき、大変勉強になりました。日本国内でもこれからも交流が続いていくと思います。こうした「人とのつながり」を、大きな力に変えていきたいと感じました。

ステップアップできたプログラム

藤山 里香

本プログラムに参加するに当たり、私が設定した課題は主に 3 つありました。1 つは文献やニュースのみでしか知らない韓国を自分自身で確認し、韓国

の教育について知ること。2つ目は韓国の環境教育について知ること。3つ目は韓国の先生とのつながりを持ち、韓日の生徒が共同で何かイベントをできるよう支援する準備をすることでした。1つの課題設定理由は、海外の渡航経験が、アメリカとオーストラリアの2カ国であり、同じアジアの国を訪問したことがない、という事情です。2つの課題設定理由は、環境と密接に関わる理科という教科を教える教員として、地球上で近い国の環境教育を知ることも重要であると考えたからです。3つの課題設定理由は、日本へ帰ってからの教育活動への還元のためです。佐倉南高校では昨年度、教員1名がアメリカを訪問し、アメリカの高校2校と日本の高校2校によるモザイクアート作成を通じて交流を行いました。作成過程や完成品を見て、韓国と日本の生徒にもこのような交流をしてほしいと感じました。

1つの課題に対しては、韓国の小・中・高等学校を直接訪問し、児童・生徒、教職員、保護者の方々と直接交流できた点がとても有意義であったと思います。韓国の学生の勉強熱心な点や、それを支援する学習環境やプログラムの整備状況は見習う所がありました。しかし、社会の構造や考え方方が違う国であるため、それらをただ取り入れるのではなく、その根本にある教育への姿勢や伝統を日本に応用すべきであり、そのためにはどうしたらよいかを考えいかなければなりません。また、明洞や釜山を直接歩き、華やかな街並みや情報の影に埋もれてしまうようなこと、日本でも問題となっているようなことを知ることができたことは、帰国してからもずっと心に残っています。

2つの課題に対しては、1つの課題に比べて学ぶことができず、達成度は低かったと思います。ESD日韓教員フォーラムでは地域連携のなかで環境教育が登場し、論山高等学校では英語の授業内で環境問題について英語で講義されていました。持続発展教育の中に環境教育はもちろん含まれているのですが、生徒の人間性や才能を伸ばすための教育について報告が多く、他の日本教職員から質問が出ましたが、現地でははつきりしませんでした。今後、各学校のサークルや放課後活動にそのような活動がなかったか、もう一度調べていきたいです。

3つの課題に対しては、現地での進展はありませんでした。しかし、名刺を交換したり、自由時間に一緒に行動したり、食事の際に情報交換をすることはできました。具体的な活動は帰国後、これから

課題ですが、日本国内の教職員間の交流も充実したため、国内、国外へと拡げていく足がかりはできてきているのではないかと感じています。

以上をふまえ、本プログラムで有意義であったのは、本プログラムそのものである、といえます。生徒に学んでもらうには、体験などで実感や感動を伴ったときだと思います。体験できないことがあったとしても、それに近くなるよう、感情を振り動かすことのできる授業・指導が必要です。それには教員も実感し、感動しなくてはなりません。今回のプログラムは全てにおいて新鮮で、目の前のことに対する感動し、考えさせられ、実感できました。もっと知りたいことができ、今後につながる活動でした。こうして学べたことにも感動し、教職員としてステップアップできたのではないかと思っています。

子どもへの変わらない想い 飯島 政範

私は、本プログラムに参加するにあたり、①英語教育の実際、②放課後学校の実態、③特別支援教育について課題を設定いたしました。

①英語教育の実際

さいたま市は、平成17年度から小・中一貫「潤いの時間」として、人間関係プログラムと英会話を実施しています。本市で行われている英会話と韓国の英語教育の違いに大変驚かされました。本市では小学5年生から英会話を学習しますが、英語に親しむことを目標としているのに対して韓国では小学1年生から本格的な英語教育を取り組んでいました。ソウル徳義小学校での学校概要の説明では、英語教育について、コミュニケーション中心の英語や英語チャレンジを活用した学習などが行われていました。ALTを中心とした授業で担任は補助的な役割で本市と同じでしたが、教員の英語教育を行うまでの研修時間の多さに違いがみられました。授業内容についてもテキストに記入しながら必要な語句は教師が教えていました。一番の驚きは、子どもたちが英語の必要性を強く感じ楽しく学習している姿は日本にはないものを感じました。

②放課後学校の実態

さいたま市では、学校、家庭、地域、行政が連携協力して「知」「徳」「体」「コミュニケーション」のバランスのとれた子どもを育むことを基本理念とした「さいたま市教育総合ビジョン」を策定しています。

す。このビジョンを具体化する施策として「チャレンジスクール推進事業（土曜チャレンジスクール、放課後チャレンジスクール）」に取り組んでいます。これは、学校、家庭、地域、行政の4者が一体となって地域ぐるみで子どもを育てることを目的として行われています。運営等は教員のOB、教職を目指す学生、保護者など地域のボランティアの方々による実行委員会が学校ごとに設置されています。参加した子どもたちからは「みんなと勉強できて楽しかった」「たくさん質問ができた」などの成果があります。韓国の場合、外部委託の講師を雇い、160からのプログラムを子どもたちが選択して行っている点などに違いがみられました。

③特別支援教育について

現在私は特別支援学校（おもに肢体不自由の学校）に勤務しています。韓国の特別支援教育にすごく興味があり、障害の重い子どもの指導について学ぶことが楽しみでした。しかし、論山女子中学校での見学は特別支援学級の見学でした。通常の学級からプログラムによって、教室に移動し学習していました。見学者など大勢がいるなか、一生懸命ビーズ通しを行っている姿には感動しました。担任のホン先生の丁寧な指導の成果だと感じました。しかし、日本でもいじめ問題など子どもがいじめによって命を落とす事件が相次いでいます。いじめられている子どもの様子から発達の障害を持つ子どもがいじめのターゲットとなるケースがみられます。韓国でもいじめなどの生徒指導上の課題がたくさんあるようだが、教職員の発達障害児の理解が必要となります。その意味では、特別支援教育の現状について詳しく知ることができなかったのが残念ではあります。

最後に今回の研修を通して、韓国も日本も子どもの想いや子どものことを考える大人の想いは変わりないことを感じました。未来を担う子どもの育成に全力をかけるのは、韓国も日本も同じであること。だからこそ持続発展教育が大切であることを学びました。

受け身の自分から行動力のある自分へ 亀井 規生

自分自身が本プログラムに参加するまではESDについて受け身であり意識も低かったが、教育現場でESDを実感できる実践例が多くあり、今後、教育行政に携わる者としてリーダーシップをとり、現場

への理解を進めていきたい。

また各校種への学校訪問は、大きな刺激を得るものとなった。その意味においても、学校訪問を実施するにあたり、事前のオリエンテーション等により韓国の教育事情を得させていただいていたことは非常に有効であった。

韓国の学校現場の教育方針・カリキュラム、教職員や保護者、そして何よりも日々学習に取り組む子どもたちの様子や意識について学ぶことができ、日本の教育システムとの共通点や相違点について知り得たことは、今後の日本の教育の参考になった。特に英語教育や情報教育の充実など、韓国教育の優れた取組の一部を観察できた。実際に小学校低学年の児童が英語で会話ができたり、デジタル教科書を操作したりと、これらの分野での能力の高さがかいしま見られ、学ぶべき点が多かった。

また子どもたちは学校のビジョンに向かい、明確な目標を持って勉学に励んでいることを知りえることもできた。

しかし、猛烈な受験競争の中にいる韓国の子どもたちをはじめ、学歴偏重社会の中にいる日本の子どもたちにとって、ESDの重要性を改めて再認識した。広い視野から物事を考え行動する力を養うことができるESDを理解し学ぶことは、学習の意義目的を見直せるものであると確信している。

さらに、学校給食の無償化や学校施設の充実、ESD活動の推進など、地域連携やそれを推進している教育庁の方針など、学校現場への具体的な働きかけについても感心させられた。このような現実を知るにつれ、私たち教育に携わる者が日本の子どもたちに対し、有意義な学校生活をいかに提供することができるのかを考えるきっかけとなった。

ただ訪問の際、教職員や子どもたちともっと語り合い、本音を出し合える時間が限られていたこともあり、状況の把握はできたが国際理解に至るには時間が不足であったことは否めない。

今後は国際理解を進めていくために、ユネスコのスタッフの方や同行できた先生方との実践交流や意見交換、また韓国の方々との交流を深めていくことが大切であると考える。

人を育てる職業の自覚と誇り 窪田 崇之

このようなプログラムは私にとって初めての体験だったので、見るものすべてが驚きと感動であった。その中で最も有意義だったものは、プライベートでの韓国訪問では決して行うことのできない、小中高等学校の訪問だ。ICT機器の活用、英語教育の強化、放課後学校の充実など、その教育設備やシステムから韓国との「教育」にかける強い思いを感じることができた。それとともに、教師・保護者・児童生徒自身の学力向上への思いも高いことがわかった。論山高等学校の夜10時過ぎまで学校で勉強をする夜間自主学習の実態や、論山女子中学校の生徒の「韓国が発展してきたのは教育に情熱をかけ、人材を育ってきたから。夢を叶えるために勉強をする。」という言葉からもその思いが感じられた。しかし、その反面児童生徒の規範意識の低下やストレスによる校内暴力やいじめなど日本と同じようなことが大きな社会問題になっていることもわかった。

今回のプログラムでは、韓国と日本の教育を比較しながら見学をした。先にも述べたように、韓国の教育設備やシステムなど教育にかける費用が日本とは大きく違い、世界で通用する「人材」を育てるという教育がなされていることに感銘を受けた。

しかし、「学力」を求め過ぎるがあまり、児童生徒の「心」にゆとりが足りないのではないかという思いもうまれた。ホームビジットの際に通訳として参加していただいた論山女子中学校の保護者である日本人の方も、中学生の我が子が毎日遅くまで塾に通い、勉強漬けの毎日を送っていることがかわいそうだと話されていた。また、勉強をやらなければ受験競争についていけないのでやめることもできないと複雑な思いを抱えていた。

本プログラムでは、韓国の教育文化の良さや課題、日本との共通点や相違点などを知ることで、日本の教育の良さも再確認することができた。そして、本プログラムを通じて私が最も強く感じたことは、教育とは人を育てるものであり、学力はもちろん、それ以上に心を育てていかなければいけないということだ。人を育てる職業であることに自覚と誇りを持ち、これからの教員生活を送っていきたいと思った。

また、本プログラムでは全国各地の様々な校種の先生方と交流することができたことも大きな成果で

ある。ホテルの部屋に集まり、報告会に向けて夜な夜な韓国の教育について話し合ったり、マッコリや焼酎を飲みながら、自分たちの地元の教育について語り合ったりした時間は、大変有意義なものであった。

本プログラムで出会った日本・韓国すべての人々に感謝したい。

韓国教育に対する情熱 熊谷 美穂子

今回、このプログラムに参加し、どの内容も自分にとってとても有意義な活動になりました。反省点は、少しでも、韓国のことと事前に調べ、言葉を勉強していくべきよかったと思っています。「ソウル・公州の文化や歴史に触れたときの感動がより深く…。」「子どもたちと接するとき、片言でも会話することができればもっと…。」と思うと自分の勉強不足をとても後悔しています。

学校訪問では、ソウル徳義小学校、論山高等学校、論山女子中学校を参観しました。児童・生徒たちがどのように学習しているのか、英語教育にどのくらい力を入れているのか、とても興味がありました。

「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように、韓国の子どもたちの学習時間の多いことに驚きました。「11時頃まで学校で学習している」「塾に行くのが当たり前」という言葉を聞くと、日本の子どもたちの学習時間の少ないことが歴然とします。また、小学校から英語を取り入れ、サークルなどでも活発に学習している様子をさまざまと見せつけられました。英語で話しかけてくる児童・生徒たちから、英語教育がいかに徹底されているかをうかがうことができました。女子中学校の生徒の一人が、「やりたいことをやるために・夢を叶えるために学習する。」また、「韓国が発展したのは、教育に対する情熱があったから」と話していました。そこから、自分の将来に対しての希望、国を愛する気持ちが伝わり、自分・自國を更に高めようとする気持ちが強いことも理解できました。反面、中学校・高等学校では、日本と違い、部活動（運動面）がない分、体を動かす時間が少ないうまでも感じました。保健体育等で時数を増やしているとのことでしたが、学習時間が多く、自由な時間が少ない現状の中、子どもたちの負担はないのかという疑問も残りました。

生徒指導上での考え方の相違も感じました。小学

校からピアス、中学校では休み時間にアイスクリーミーを食べるなど、日本の学校では考えられない光景がありました。良い・悪いではなく、考え方は多様であり、一つではないことなど、一つの考え方によらわれすぎないよう、柔軟性をもつ必要があり、そのとき、その子どもにとってよりよい方法を選択して接しなければならないと感じました。

10 日間を過ごして、B グループの皆さんのが存在がとても大きく、全国のたくさんの話が聞けたこと、活動で交流を通して、和が生まれていったことなど、私自身の大きな宝となりました。報告会等役割を決める際に率先して行う姿は、見習わなくてはならない点です。最終日には、初めて会った緊張感はあるでなく、皆さんと自然と会話できる自分がとても不思議であり、今回のプログラムで、最も感謝すべき点ではないかと思っています。

対話を通した学び 松岡 和俊

すべてのプログラムが大変有意義だったが、特に有意義だったのは、ホームビジットや忠清南道教育府訪問を通して、韓国の教師、保護者、指導主事とじっくりと話ができたことである。

ホームビジット先の韓国教師の夫婦からは、韓国の教育事情から一般的な家庭の状況まで次のような興味深い話を聞くことができた。

「韓国では校内暴力やいじめが社会問題となっており、自分の勤務先の学校も、5 年ほど前から先生に対する尊敬の念が急速に失われ、授業がやりにくくなっていること」

「男性の人気職業は医師・弁護士、女性の人気職業が教師であることから小学校教師のほとんどを女性が占めていること」

「昔から家事は女性がするものという考えがあり、5 品以上用意するといわれている夕食の準備が大変だったが、最近は共働きが広がり、男性も家事を手伝うようになってきており、男女平等が少しづつ浸透していること」

また、通訳として随行してくださった日本人の保護者の方からは、韓国では受験競争が激しく、学力を高めることが最優先されすぎて、子どもたちがかわいそうだ、という声を聞いた。

さらに、忠清南道教育府に勤める元日本語教師の指導主事からは、将来自分が校長になったときに「心

を育てることを大切にしたい」という、熱い思いを聞くことができた。

これらの話が韓国すべてを表しているとは言えないが、韓国の方といろいろなプログラムの中で、一緒に食事をしながら、ゆったりと時間を共有する中で、韓国の本当の姿を垣間見ることができ、これまでより一層韓国が身近になった気がした。

次に、学校訪問を通じて子どもたちのいきいきとした姿が見えたことや英語教育や ICT 教育が進んでいること、教科教室制や放課後教室などの特徴のある取り組みを進めていること、防犯システムの整備が進んでいること等が実感できた。

特に放課後教室のパイロット校に指定されているソウル徳義小学校では、165 種類の講座が外部への委託を中心開校されており、小学校 1 年生からネイティブスピーカーのまねをしながら発音練習をしている姿を見ることができた。授業でも 6 年生ではすでに手紙を書いていたことなどからも、改めて韓国の英語教育の徹底ぶりが伺えた。

また、天井据え付け型の大きなプロジェクターや音響施設の整った 300 人規模のステージが設置されており、韓国の教育講義でも話があったが、韓国は教育に予算をつぎ込んでいる、ということが実感を伴って理解できた。

学んだことはほかにも多くあるが、このプログラムを通して、韓国の教育のすばらしい面や課題について理解が深まる同時に、日本の教育の優れている面を振り返ることができた。日本の教育が「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」のバランスを大切にしながら「生きる力」を育成しているということについては、韓国の方にもご理解をいただくことができ、共感を得ることもできた。改めて、その理念のすばらしさを実感でき、今まで以上にこれからも大切にしていきたい。

国際社会に生きる人材の育成 宮城 明子

本プログラムに参加するにあたり、以下の課題を設定した。(1)韓国の教育現況を知る。特に日本より先進しているといわれる英語教育や情報教育を視察し、授業へ活かす(2)ESD の取り組み、ユネスコスクールの活動を知り、実践的指導方法を学ぶ(3)北緯 38 度で分断され未だに停戦中の韓国における人権教育、平和学習を学び、沖縄の平和学習へつなげる。

(3)のテーマは残念ながら今回のプログラムでは視察することができなかつたが、この10日間で、より多くのことを学ぶことができた。

まず韓国の教育現況を知ることにより、改めて日本の教育の良い点や課題を知ることができた。

良い点として感じたのは、心の教育である。若者のマナーの悪さや道徳心の欠如が問題視されてはいるが、日本の学校全体で行う教育はやはり、良いものがあり改めて見直していく必要があると感じた。例えば挨拶の徹底や遅刻指導、きまりやルールを遵守させる指導、また部活動を通した心の鍛錬などである。東北の大震災で、外国の方々が日本人の礼儀正しさや我慢強さに驚いたという報道があったが、こうした教育の賜物であるように思う。

課題として感じたのは、日本の国際社会に対応する人材の育成、国際社会に対応したシステムの不足である。

韓国の高等学校を訪れた際、想像をはるかに上回った学習時間が設定されていたことに驚いた。正規授業が50分×7コマ、放課後学習が16:30～18:10という点は日本と大差はないが、その後夕食を食べて19:10～22:00まで夜間自主学習が設定されていた。都市部の高校では、夜中の12:00まで学校が開いている場合もあるという。高校では、日本でいう部活動のようなものではなく、まさに勉強漬けの毎日を過ごすことになる。行き過ぎた学歴社会が韓国では問題となっているが、「資源がない分、人材で国を発展させる」という教育のパワーと生徒たちの学習への熱心な取り組みを目の当たりにし、日本の子どもたちが国際社会で、どれだけ活躍できる力をもつか心配になった。事実、国際社会に対応する実力をもつ学生の減少、外国留学や海外勤務を希望する者の減少、海外旅行する若者の減少などが指摘されている。今後ますます国際社会へ加速化していく中、日本では逆行し鎖国化しているようすら思える。

Bグループが訪れた女子中学校はレベルの高い学校であった。日本人の教師が英語で音楽の授業を行った際、生徒全員がその英語を理解し、冗談も通じてみんなで大笑いしていた。韓国の伝統的な楽器の弾き方を教えてくれた生徒は、大変流暢な英語で話していた。恐らく、日本では高校生でも同じことができる生徒は少ない。日本における英語教育の抜本的な改善の必要性を感じた。

日本全国から校種の異なった先生方と交流をもつたことも非常に有意義であった。地域は違っていて

も、同じような問題や悩みを抱えてながら奮闘していること、または違った問題、環境の中での前向きな指導方法、授業実践を拝聴することができ、私も頑張らねばと励みになった。

最後に持続発展可能な社会の実現に向けてESDの必要性を感じた。国際社会の一員として必要な資質・能力を育てる教育が大切であると感じた。そして、広い視野をもって問題を解決し、大きな心をあわせもった人材を育成できるように私自身もさらに成長していきたい。

今回の交流事業に参加させていただいたことに感謝するとともに、生徒や現場の職員へ発信し、今後の研究課題として継続して学習していきたいと思う。

将来を見据えた指導を 宮成 達啓

本プログラムに参加するにあたり、私は大きく2つの課題を自ら設定しました。

1つ目は、韓国の英語教育です。私の市ではこれまで5・6年生に実施していた外国語活動が、来年から1年生から実施されます。韓国では、外国語活動がどのように行われ、先生やALTの関わりはどうなっているのか気になっていました。訪問先のソウル徳義小学校での学校概要の説明では、英語教育についての説明も多くありました。それだけ韓国では英語教育に力を入れているだと感じました。概要の中では、コミュニケーション中心の英語や英語チャンネルを活用した学習などの説明を受けて、クラスを回りました。授業を見ていくと日本と同じところ多くありました。ALTを中心とした授業で担任はグループ活動の際に助言を行っていました。しかし、教員の英語教育を行うまでの60時間の研修や放課後学校での内容は多くの違いがありました。小学校1年生ながら内容は中学校1年生のレベルでした。コミュニケーションもありましたが、テキストに記入しながら必要な語句は教師も教えていました。そして、何よりも子どもたちの意識の中に英語を話すことの重要さが根強くありました。最後の意見交換の時間では、学校としても英語教育をこれからどのように進め、強化していくかが課題だと答えてくれました。授業内容もそうですが、一番は子どもに英語を話すことの楽しさや必要性を感じさせることが重要ではないかそう感じさせてくれました。

2つ目は、韓国についてです。具体的ではなく漠然

とした課題ですが、日本に近い国にも関わらず私は韓国についてほとんど知りませんでした。テレビで見る韓国のグループ、報道される受験戦争、騒がれる領土問題。全てメディアを通しての知り得たことでした。だからこそ、実際に目で見て聞いて感じたいと思いました。

まず、教育では韓国の子どもたちの勉強熱心な姿には驚きました。朝から夜遅くまで勉強しています。そのためか夜遅い時間でも街には制服姿の子どもたちが多くいるのを目りました。学校でも学力に偏っているところがあり、体育の授業を見ましたが子どもたちは「体育は自由な時間」と答えていた事に驚きました。韓国では、今学校暴力が問題となっています。その解決策として挙げられているのが、学校体育を充実させることで、子どものストレスを軽減させようとしています。

次に、ホームビジットで感じたことです。正直日本を出る前にちょうど領土問題で騒がれている時期だけに不安もありました。どのような気持ちで受け入れてくれるのか、嫌な気持ちではないかなど考えていましたが、話していく内に不安もなくなりました。訪問先では家庭の様子や家族のことたくさんのこと話をし、観光地にも連れて行ってもらいました。多くの時間を過ごす中で、韓国の方々は家族を何よりも大切にしていました。家族の写真は一番見える場所に家系図は大事な場所に保管していました。また、近所に挨拶をして息子を紹介する姿は地域とのつながりを大切にしているなと思いました。日本では少し失われつつある光景が韓国には今も大切に残されています。

最後に、資源の少ない日本や韓国にとって人材こそが、豊かな社会を形成していくと私は考えています。だからこそ持続可能な発展教育が大切であり、今日の前にいる子どもたちが10年後、20年後の社会をつくるのです。将来を見据えた指導を心がけこれから教育に尽力していきたいです。

教育の基本は人との出会いと絆 宮崎 圭司

ESDやユネスコスクールについての知識がほとんどなかったため、今回のプログラム参加ではESDの実践を理解することと、韓国の教育現状を知ることを課題に設定した。

ESD日韓教員フォーラムのなかで実践事例が紹介

されたが、韓日両方に共通していることは、ともに地域とのつながりを重視し、人材や環境を活用して将来にわたって持続的に教育を行うことである。地域を知るという「いま昔プロジェクト」も地域と共に生きるという「共に生きる地域作り」もその理念の基に行われていることが分かった。

韓国の教育事情については2日目の金載春教授の講義「韓国における初等中等教育の現状」が理解に大変有効だった。3日目以降の学校訪問や韓国の教職員との交流に大いに役立った。私は高校に勤務しているが、高校では普通に行われている教科教室制や習熟度別授業展開が小学校から行われていることを知り、韓国の教育にかける熱意が理解できた。特に小学校・中学校・高等学校の現場を実際に見学すればするほど、生徒が生き生きと学校生活を送っている背景に韓国政府が教育を国の重点政策にしていることが分かった。高校生は大学受験に向けて過酷な受験勉強を行っていたが、自分の夢を叶え、お世話になった人たちに恩返しをするために勉強していると語る姿には大きな自信と充実感が見てとれた。また、実際に論山高等学校で授業をしたことは有意義であった。日本でも深刻な問題となっているいじめの問題を、韓国の教職員や生徒と共に考える時間が持てたことでユネスコ憲章の「人の心の中に平和の砦を築かねばならない」という精神を共有できたと思う。

全てのプログラムが有効で充実していたが、全ての教育の基本は人との出会いと絆であることを実感した。特に今回のプログラムに参加したスタッフや教職員との交流は言うまでもなく、訪問先の先生方や通訳やガイドの方、ACCUの皆さんとの出会いの中で自らを振り返り、学ぶことができた。初対面で考え方の違いはあれども、皆で話していくうちに共感できる部分が日に日に増えていった。まるでいぶん以前から共に仕事をしている気分になれたのは大きな収穫である。日本全国と韓国の先生方と教育について語り合い、視野が広がった。特に小中学校の先生方と語り合ったことは大きな刺激となった。国や地域、職場は違うがみな熱意を持っているのは同じである。この人的ネットワークは私の人生を大きく変えてくれた。

韓国で気づいた、地域と連携した ESD 二宮 浩司

この 10 日間を振り返ってみると、毎日が新しいことの発見、驚きの連続で、何もかもが有意義な体験であったように思います。その中で最も有意義なことを敢えて一つあげるならば、それは、やはり「人との出会い」であったように思います。ただの観光旅行であれば、きっとこのような感想は出てこなかつたと思います。訪問先の児童・生徒たちの届託のない笑顔、先生方の温かい歓迎、その他、様々な韓国人の人々に出会いました。中でも印象に残っているのは、やはりホームビジットでの家族との出会いでしょう。ほんの数時間、食事をご馳走になったり、談笑するなどして過ごしただけで、打ち融け合える嬉しさを味わうことができました。たとえ言葉がうまく通じなくても、双方の感情や気持ちというものは通じ合うもので、ホストファミリーの方々が私たちを気遣い、思いやる温かい気持ちがひしひしと伝わってきました。国籍や民族が違っていても人は理解し合える。それは本当に嬉しく素敵なことなのだということを再認識させられました。そして、このような体験を生徒たちにもさせてあげたいと思いました。若いうちに、異文化を体験し、違いとともに共通点にも気付き、相手を理解できるようになる。その体験から、きっと心の中の垣根がなくなっていくのだろうと思います。そのプロセスをまさに今回体験させてもらったのだと感じました。

このプログラムに参加するにあたって設定した最大の課題は、韓国の進んだユネスコスクールの活動や ESD を学ぶということでした。実際にいくつかの実践発表を聞き、学校訪問でも優れた実践を学ぶことができました。勿論、わが国にもすばらしいユネスコスクールや ESD の実践があります。優れた実践校には共通点があります。それは、まず、ESD の理念を理解した熱心な先生の存在です。しかし、その先生一人だけでは実践は難しく、その先生を中心に ESD が校内に広がり、共通理解が得られていることです。さらに管理職や教育委員会がしっかりと後押しをすると、他の学校にも ESD は広がっていきます。今回韓国で学んだことは、これに「地域」という視点がしっかり組み込まれている点です。地域の課題を地域の人とともに学校が中心となって取り組んでいることに大変感銘を受けました。私が今まで勤務

校で取り組んできた ESD とは何だったのか。まさに、この視点が欠けていたように思います。地域をフィールドに活動は行っていますが、地域の人々を巻き込んでいない、かなり独りよがりな活動であったということに、今回気付かされました。そういう意味でも、今回のプログラムはたいへん有意義であったと思います。今後は、その課題をどのように我が校の教育活動に具現化していくかを考えて行きたいと思います。

忘れられない子どもたちの笑顔 則武 千裕

【最も有意義であった内容】

私は今回初めて韓国を訪れたので、全てが新鮮で心に残っている。特に、有意義だったと思う内容は、学校訪問である。児童・生徒の笑顔はとても温かく感じた。また、言葉の通じない私たちにも何とか伝えようとする姿が印象的であった。児童・生徒と接していると、言葉の壁などないように感じた。授業参観・見学などを通して児童や生徒に関わり、懇談会では現場の先生方に質問をすることができたことが印象に残っている。その中で、韓国と日本の教育の共通点や相違点など、実際に見たり関わったりしないと学ぶことができない体験ができたので、一番有意義であったと感じる。

【成果】

本プログラム参加にあたり設定した課題は大きく 2 つあった。1 つめは、韓国と日本の教育の現状を比較すること、2 つめは環境教育がどのように進められているかを学ぶことであった。

1 つめの課題については、たくさんのこと学ぶことができた。韓国の教育と日本の教育との相違点を中心に述べていきたいと思う。一番驚いたのは、高校生が学校で夜の 10 時・11 時まで勉強しているということである。とても勉強熱心な国だと感じた。次に、サークル活動や放課後学校がさかんだったことである。本校でも部活動の取組はあるが、数の多さや専門性に驚いた。児童・生徒が自分の適性に合わせて選択できるということが素晴らしいと感じた。サークル活動や放課後学校には、外部講師がたくさん雇われていることもあり、専門性が高く、質の高い教育活動が可能になるように感じた。そして、それが将来につながるように組まれているところにも感銘を受けた。他にも給食ボランティアの方がおら

れること・全教科移動教室制がすすめられていること・ICT や電子黒板を使った授業がなされていること・自由な教室配置・生徒の思いを尊重していること・作品掲示の仕方などを学ぶことができた。

2つめの課題については、高等学校の英語の授業でみることができた。各教科で時数が決められている中で、教科の授業に環境教育の視点を入れて行う取り組みはとても効果的であると感じた。教育庁で「環境教育が具体的にどのようにすすめられているか」について質問をした。学校によっては、環境の教科が設けられているということを知った。また、体験的な学習を重視し、学校によっては環境発表会が行われ、それが大学進学にもプラスになることが分かった。具体的な体験活動の内容については、これから交流を進めて知っていけたらと思う。

2つの課題と共に今回大きく学んだことは、人とのつながりである。たくさんの方々の温かい歓迎を受けた。歓迎する子どもたちの表情はとても温かく決して忘れることができない。言葉が通じない中でも、何とか思いを伝えようとする子どもたちの姿に感動した。ホームビジットや歴史地訪問などでも、たくさんの方々にお世話になった。また、日本の先生方との交流もとても大きかった。自分の知らない日本の教育現状も聞くことがたくさんあった。校種・都道府県によてもこんなにも違いがあるのかと驚きが大きかった。様々なことを知り、視野を広げることができたように感じる。

学習に意欲的な子どもたち

及川 敦

今回、本研修に参加させていただいたいて、最も有意義であったと感じたことは、KNCU の方々を始め、韓国の先生方やお世話になった多くの方々の温かい歓迎の心を実感できましたことです。そして、全国各地の先生方と接する機会をいたしましたことであると思っています。韓国に到着し、プログラムが進むにつれて、韓国の方々の温かな気持ちに触れ、緊張と不安がなくなり、自分自身の研修に対する意欲がより高まっていくのを感じました。それだけに、私事で、すべてのプログラムを経験することなく途中で帰国せざるを得なくなったことは、とても残念でした。

具体的なプログラムの中で、特に有意義であったと感じた内容は、ソウル徳義小学校への訪問でした。日本の公立学校とは比べものにならない充実した施

設・設備やその中で生き生きと学習に取り組んでいる児童の姿が印象に残りました。六年生の英語の授業がすべて英語で進められていること、ノートにごく当たり前のように英語で文章を書いていることに、韓国の英語教育の質の高さを感じました。また、放課後に行われる児童各自が主体的に選択して学習する各講座の充実した取り組みに驚かされました。子どもたちの意欲的に学習する姿に、主体性と目標をもって学習していることを理解しました。

全体的には、韓国の学校教育に対する国リーダーシップと支援の厚さを実感しました。また、世界に目を向け、世界に通じる人間を育てるという意識をもって教育行政に取り組んでいることを学びました。その成果の一つとして、韓国その他への留学生の数が日本の4倍にも上るということもあげられるのではないかと思いました。

高レベルな韓国の教育環境

岡崎 利夫

参加にあたり設定した課題は、①韓国の学校教育の状況（教育実践・教育内容・地域家庭との関わり・生徒の状況）。②教職員の状況（社会的地位・定数・勤務実態・賃金・教員以外の教職員）。③学校の教育環境（施設・設備・予算）等を学んでいくことでした。

訪問した学校のご厚意により、全体の学校案内とは別に、管理棟（校長室・事務室・教務室・保健室等）を案内いただいたことや、教員以外のスタッフと交流できたことは有意義でした。

韓国の学校は、①情報機器や映像機器がソフト・ハードともに最先端。②普通教室・特別教室・体育館等の設備と備品が充実。また、二重窓で全室エアコン設置。③防犯カメラ、警備員などの安全対策。ICチップによる登下校確認の学校も。④補助職員、管理職員、ボランティア職員など手厚く人材を配置。⑤デジタル教科書用の生徒タブレットを順次無償で配布。⑥給食無償による保護者負担の軽減、小中高校のほとんどが給食実施、など優れていると感じました。

無償給食は多くの財源が必要となり容易ではない事業ですが、ソウル市と市教育庁は昨年8月24日の住民投票の結果を受け、2学期より実施しています。憲法31条の教育の機会均等と義務教育無償の原則を、学校給食無償に発展させようとする動きは全国に広

がっているそうです。

どの学校でも感じたのは、輝く子ども達の目でした。そして、一人一人が将来の夢をしっかりと持ち授業に向かっている姿と、精一杯支援していこうとする教職員の姿勢でした。小学1年生英会話クラブの子ども達の熱気や、ロボット制作クラブの真剣な眼差しに圧倒されました。

歓迎式で披露された吹奏楽・新体操・伝統芸能など、子ども達の本格的な演技はもちろん、裏方の仕事も子どもだけで受け持っていることに驚きました。体育館という複雑な空間を、イコライザー操作で音響を調整する小中学生と、それを任せきる教師の様子を見ていろいろと考えさせられました。体育館は、壁も天井も吸音性の高い材料が用いられ、遠隔操作のスポットライト、ステージライト、高品質な音響設備、そしてエアコン空調設備と高クオリティですが、その設備を子ども達が使いこなしていることです。また、伝統楽器や舞踊衣装をはじめ本格的な各種教材備品を充実させることにより、教育活動のさらなる広がりをもたらしていると感じました。

「子どもの願いを実現する学校」。今回のプログラムの貴重な経験により、私自身の目標がはっきりと見えてきたことが、一番の成果です。

斬新で豊かな発想からなる韓国の教育 佐々木 裕作

本プログラムへの参加にあたり、自分は「韓国の教育現状を知ること」を目的の一つとしていた。そういうこともあり、本プログラムで最も有意義であったのは、ソウル徳義小学校・論山女子中学校・論山高等学校(男子校)と様々な校種の学校を訪問し、韓国の教育現状を肌で知ることができたことである。中でも、自分が小学校に籍をおいているので、ソウル徳義小学校の訪問が特に印象深かった。

ソウル徳義小学校では、すべての教室にICT機器が整備されており、どの教室でも積極的に活用を図っていたことに驚いた。財政支援が十分に行われているパイロット校ということもあり、一般的な学校とは現状が異なっているのかもしれないが、日本もう少し力を入れてもよい面かと思った。ただ、実際の活用については、「学習意欲や問題意識の喚起」「問題の解決」「互いの考えの共有」などのように、日本の先生方が、より目的意識をもって活用し、学習内容の理解を深めるため、思考力・表現力を高

めるために効果的に活用しているとも思った。

英語学習の充実には目を見張るものがあった(後述の放課後学校も含むが)。日本の外国語活動は、「コミュニケーション能力の育成」を前面に打ち出しているが、韓国の英語学習は、「話す力・聞く力・書く力」を確実に身に付けさせることを目的としているように感じた。コミュニケーションを図るために必要なツールとして身に付けさせようとしているのだと思う。語学として確実に身に付けさせるためには、日本ももう少し早い段階で外国語学習を行ってもよいかと思った。

また、「放課後学校」という考え方には、とても斬新だった。学習塾への依存を減少させるとともに、教育の機会均等を図るために始まったそうだが、以下の点ですばらしいと感じた。

- ①家庭の要望に応じて160にも及ぶ講座を準備し、選択制で学ぶことができる
- ②外部講師を招へいし、専門性の高い教育を実践している
- ③教師の教材研究の時間が確保できること

全国的なものではないそうだが、韓国の教育現状の課題に対して、学校側としてどのように対応していくのかということを具体的に実践している好事例の一つだと思った。論山女子中学校でも、児童の興味・関心に合わせ、65のサークル活動を実践していた。

どの学校を訪問させていただいても、学力向上に対する意識が日本よりもかなり高いと感じた。その反面、「放課後学校」「サークル活動」のように、児童・生徒一人一人のニーズや保護者のニーズになるべく対応しようとする環境づくりにも力を入れていることは、すばらしいことだと思った。教育者として、常に意識しておきたいことである。

ここでは「ICT機器の活用」「英語学習」「放課後学校」の3点について述べたが、進めるべき施策を重点的に力を入れて行うのも韓国の教育の特徴だと思った。

最後になったが、今回の訪問を通して、日本各地の優秀な先生方と意見交換ができたことは、私にとってとても有意義な時間であった。都道府県によって事情が異なるところもあったが、教育に対する情熱をもった先生方の思いや考えに触れることができたおかげで、これまでの自分の教員生活を振り返るとともに、これから教員生活に生かしていきたいと思う点がたくさんあった。すばらしい教師は、や

はり人柄がすばらしい。

教育活動の基軸の発見

関口 芳平

ここ数年、学校教育の目的について自分なりに考えてきました。これまでに赴任した学校では、それぞれの学校教育目標の具現化のために教職員、保護者、地域の方々と共に努力してきました。これまでに積み重ねてきた実践を振り返り、多種多様な変容を見せる子どもたちや保護者や地域の姿を実感しながら、これから何を軸に教育活動を展開しようかと考えていました。そんな時に、本プログラムの案内が学校に届いたのです。

本プログラムに参加して得られた成果はたくさんありますが、次の3点にまとめたいと思います。

(1) 「持続可能な開発のための教育」ESDについての理解が深まった。

本プログラムの各セッションにおいて韓国での実践をとおして、ESDの経緯、目標、課題を理解することができた。ESDは、様々な課題を地球的規模でとらえること、自らの課題として身近なところから取り組むこと、持続可能な社会づくりの担い手を育成することを目的とする教育であることがわかり、その重要性に気づくことができた。

(2) ESDの基本的視座「教育の四つの柱」を知ることで、今後展開すべき教育活動の軸が見えてきた。

「知ることを学ぶ」・「為すことを学ぶ」・「他者とともに生きることを学ぶ」・「人間として生きることを学ぶ」という教育の四つの柱について理解を深めることができ、特に、他者とともに生きる、人間として生きることについて、人権教育や異文化理解教育を推進していきたいと思った。

(3) 「放課後教育活動」の実践を知ることができた。

訪問したソウル徳義小学校、論山女子中学校で放課後教育活動の実践を一部見学することができた。学校施設の活用方法、プログラムの設置方法、指導者の確保の仕方など、運営についての詳細を知ることができた。日本での部活動との違いも理解できた。学校の施設を活用した新たな教育の場づくりのヒントとなつた。

一般公募で参加した私にとって、とにかく学ぶべきことがたくさんありすぎてまとめきれないのが正直なところです。本プログラムに参加する機会を得て、日本全国から参加されたみなさん、韓国の教育

関係者のみなさん、ACCU、韓国ユネスコ国内委員会のみなさんとの交流をとおして普段にはない多くの刺激を受けました。そして、共に学ぶ中で、これまでの自分の教育活動を振り返り、これからやるべきことを考えることができました。当初考えた本プログラム参加の課題はほぼ達成できたように思います。本プログラムから学び取ったものを具体的に実践していきたいと思います。

日韓両国の教育事情を知る

清水 佐登美

期待していた以上の充実した10日間であった。本プログラムで最も有意義だったのは、多くの人々との交流から得られた、相手を思いやる温かい心に触れることだった。韓国ユネスコ国内委員会のスタッフのみなさん、訪問先の小、中、高等学校の職員のみなさんや児童、生徒たち、通訳の方々、ホームビギット先のご家族、そしてACCUのみなさん等、たくさんの方々から温かい思いやりの気持ちを受け止めて過ごすことができた。

韓国を訪問して、韓国の教育事情についてよく理解できた。韓国の子供達はよく勉強すると言われている。そのことが、児童の学習に対する意欲、教育者の専門性、環境面の整備、経済的な支援、保護者の意識の高さ、などによって支えられていることが分かった。

児童一人の言葉を借りると、「私がやりたいことをやるために、夢を叶えるために勉強をする。韓国が発展したのは、教育に対する情熱があったからで、人材を育していくためには勉強が大切。」というように、一人一人の児童、生徒が何故学ぶかを真剣に考え、意欲的に学んでいることが分かる。教師の専門性については、教師の専門性を伸ばす評価を行い、学校システム全体評価と支援金に反映している。教育の資質向上を目指し、生徒の教育にのみ携わる専門性を備えている。理科の補助員や図書館司書等の人的な支援が豊かなため、授業に専念できる環境が備わっていることや教師の専門性の資質を高める要因である。放課後学習では、内容や方法、科目（ネイティブ教師の英語、国語、科学、そろばん、パソコン等）が充実していて、それらの講座をオンラインで、児童、生徒や保護者が利用できるシステムになっている。このように、韓国の教育事情を知ることが出来たのは大きな成果である。

また、日本の多校種の教員や教育機関の関係者と交流し、日本国内の教育の情報を多く得られた事が大きな成果であった。今後も交流を重ね、他道府県の教育事情を知り、情報の共有、児童間の交流、授業公開等に生かしていきたい。日本の教育の現状を全体的に理解することで、韓日の教育の相違点や良い面、足りない面、改善して行かなくてはならない面、もっと積極的に取り組むべき課題等よく理解でき、大きな成果となった。

楽器を通じたコミュニケーション 高田 貴

韓国には、本当に友好的な人間がたくさんいる、ということを知ることができたことが、最初に挙げられる。出発前は、日韓関係において、テレビでの報道から、かなり不安なこともあり、何か言われるようなことがあれば、こういう時だからこそ、お互いの個人的な友好関係を深めることが最初に必要だと答えようと思っていたが、私自身が答える前に、韓国の先生からそのような内容の言葉を伺うことができた。

訪問した小学校、中学校、高校でも、大変歓迎していただき、自由に学校内を見せていただくことができた。どの先生も生徒も笑顔で挨拶してくれて、そのことも大変うれしかった。

論山女子中学校では、私自身、音楽の授業を20分ほどする機会を与えられて、日本の打楽器について紹介した。授業は、通訳を介さずに、前半は韓国語、途中から英語で行ったが、参加した中学1、2年生は内容もしっかりと理解してくれて、拍子木や一本締め、三本締めなどの実演に、とても気持ちよく参加してくれた。また、その後で、韓国の伝統的な打楽器に触らせていただき、中学生がたたき方を教えてくれた。ノンバーバルなコミュニケーションであったが、体験を共有し、お互いに感謝を覚える機会となつた。

打楽器文化が非常にレベル高いものであり、深く浸透していることが感じられた。最初にNANTAを見たが、後に中学、高校での打楽器の歓迎の演奏を見て、NANTAは、面白いパフォーマンス以上に、これは、打楽器奏者としてのひとつの頂点であるのではないか、との思いを深くした。

韓国の勉強に対する姿勢も、ぜひ、視察したい内容であった。小学校の高いレベルの英語の授業を目

の当たりにして、日本で英語を学ぶ際にも、いろいろ工夫する必要があることを改めて感じさせられた。また、教育の設備が充実していること、特に全教室にプロジェクターや電子黒板等があること、放課後学級においては、内部の先生だけではなく、多くが外部の先生によってなされていること、教科別教室で授業が行われていること、給食等も外部から十分に手伝いの人が多いことなど、先生方が教科教育に専念できる環境が整えられていることも感じられた。

生徒に関しては、本当に夜遅くまで勉強していること、そのことによって、遊ぶ時間がほとんどない様子を聞いたり、また、教室の美化に関しても「賞金付の競争を行ってうまくいっている」というような話を伺い、これらの事は、豊かな人間性を培う上で本当に良い方法なのか、疑問を禁じ得なかった。

プログラム2日目のワークショップで行われた system thinking の考え方方は、さっそく日本での授業で取り入れてみたい内容であった。人で地図を作る実習や、小さな現象が全体に波及してしまう、ということを実感する実習は、ESDを考えるうえで、示唆に富んでいると感じた。

文化遺産の見学では、百濟の文化が、日本に入ってきた歴史も実感することができた。日本国内で、特に古い寺院やいろいろな装飾品を目にしてきたが、そのルーツとして韓国の文化があることがよくわかり、韓国の三国時代と日本の奈良時代の関係をより深く探求したくなった。本物を見ることによってのみ得られる貴重な体験であった。

今回の研修プログラム全体を通して、日本には多くの問題はあるものの、その中で多くの先生方が頑張っているし、また、日本の教育の良いところも再評価できるように感じることができた。また、韓国の多くの先生方、ユネスコ関係者の人々、ガイドや通訳の方々、そして一緒に参加した日本の多くの先生方と大変深い交わりの機会を持つことができたことは、何よりの成果だと感じている。

国の重点目標である「教育」 田中 誠治

本プログラムに参加するにあたり、個人としては次のような課題を設定し臨んだ。

①韓国の教育の方向性と成果

②ICT教育の成果

日本にいて入ってくる①、②の情報は受験戦争が

激しい、英語教育に力を注いでいる、デジタル読解力が世界でナンバー1である、全教室にICT機器が整備されている、などである。ただ、それらの情報はテレビなどのマスメディアを通しての情報であったり、本校が姉妹校提携している学校の情報などで限られたものであり偏ったものであると感じていた。本プログラムは約10日間という長い日程であり、都市部から地方部にかけて訪問交流することができる所以自分の目で上記の2点について確認したいと考え課題を設定した。

①についてであるが、韓国は資源のない国なので人材育成のために教育に力を注いでいる。その具体的な方策として、教師の力量を高める、教育施設・環境を整える、より専門性が必要な教科については外部講師を積極的に招くなどをしている。その他、優秀だったクラス、個人については賞賛を与え、競争させるという仕組みもあった。

教師の力量を高めるために「一教師一授業ブランド運動」を展開し、教育の専門家を目指している。教育施設・環境を整える点についてはハード面だけではなく、学校給食、放課後学校などがあげられる。放課後学校とは日本でいう塾であるが、学校施設を民間に貸し出すことで、これまでよりも安く塾を受けられるようにする。これによりどの子にも幅広い教育を受けさせることが可能となる。科学技術や情報教育などについては専門的な知識、技術が必要となってくる。これから韓国が力を注ぐ点であるが、これも専門の教師が担当する、あるいは外部講師に委託する形をとっていた。

②についてであるが、韓国は日本に先駆けてICT機器を使った授業に取り組んできた。その全教室にパソコン、プロジェクターなどの機器が設置されていることは驚くべきことである。ただ、それをどのように使っているのかを見てきた。

見学に行った小学校ではほぼ全ての教室でパソコンを使った授業が行われていた。算数、理科、音楽などで、パワーポイントなどでつくるオリジナルの教材ではなく、専用のソフトあるいはデジタル教科書を使ったものであった。液晶テレビの配置については、小学校では黒板とはかぶらない横に設置され、中学、高校ではスライド式の黒板を使い、黒板に字を書く量を確保していた。

デジタル教科書、タブレット端末についても見学をしたかったが、どの学校にもまだ導入されていなかった。国の政策に関与されている方の説明では

2014年に一斉導入するということであった。全児童、生徒という一律的なものではなく、小学校高学年から中学生にかけて導入する方向で進めているということであった。また、タブレット端末についても貸し出しという方向ではなく支給するという形になるだろうということであった。それは地方単位ではなく、国が主導して行うという話であった。本市でもタブレット端末についての議論が成されているが、導入という方向では話し合われていない。どのような効果があり、どの学年、教科が適切なのかということを国レベルで話し合われている韓国と比べると大きな差を感じた。

最後に韓国はまず教育に力を注ぐという目標が一致していることに驚かされた。政権が変わろうとも教育に力を注ぐことは昔から行われてきており、それは今も変わらない。その結果、より良い結果を出すためにどうすればよいかという方法をいろいろ試して取り組んでいくように感じた。この研修を通して、これから日本の教育もこの韓国の精神を見習わなければいけないと強く感じた。

教育について共に学び合う 谷 慎介

今回の韓国訪問ではどのプログラムも有意義なもので、学校訪問やホームビジットは、あと1時間でも長く滞在できればという思いであった。プログラムを通して感じたことは交流の素晴らしさ。韓國の方々の温かいもてなしに感激し、渡航前に世間で騒がれていた外交問題など微塵も感じることなく、プログラムを進めることができた。歴史地訪問においても日本と縁の深い百濟時代の都を訪れ、歴史博物館では当時の日本との関係を友好的なものとして紹介されていた。

韓国の教育事情や制度など知ろうと思えば調べる方法はいくらもあるが、実際に現地に赴き、交流しなければ感じることはできない。韓国の教師や生徒、保護者まで多くの方と接することができ、それぞれの立場から話を聞くこともできた。韓国の教育から学ぶこともあり、共感できることも数多くあった。これらはすべて交流の賜物である。このような交流プログラムに初めて参加した私にとってとても有意義で貴重な経験となった。

さて、今回この招へいプログラムに参加するにあたって私自身が課題としたのは、①「ESDについて

理解を深める」、②「韓国の教育事情について知る」であった。「ESD」については私自身が勉強不足で具体的にどのような取り組みを行えばよいのか分かっていなかった。しかし、ESD 日韓教員フォーラムにおいて講義を聴き、未来を託すことのできる人材の育成を目標とすることがよくわかった。その方策には経済、社会、環境、文化、国際理解など様々な側面からアプローチすることが可能であるし、国や地域によって取り組むべき課題も異なる。日韓両国の実践発表では、それぞれの地域性が大きく反映された取り組みがなされていた。

「韓国の教育事情」については日韓の違いがよく分かった。韓国の大学受験が国民的行事になっていることは日本でもよく報道されるところであり、夜遅くまで学校で勉強している高校生のことも知っていたが、実際に小・中・高の学校に訪問することで韓国の教育の姿を一部分ではあるが見ることができた。今回訪問した学校はすべて各教室にプロジェクターや大型モニターが設置しており、視聴覚教材やパソコンなどを用いた授業が可能となっている。最終日の報告会ではスカイプを利用した授業も紹介され、ICT 機器の進歩と共にこれから教育の可能性が広がることが感じられた。

また、韓国では英語教育も充実しており、小学校の放課後学校にあった外国人講師による英語の授業が印象的で、地域の人材を活用した教育活動が行われていた。中学校の英語の授業では外国人講師が授業を行い、英語教師は理解の遅い生徒に対するサポートを行っていた。これらの積み重ねの結果、大半の生徒が英語でのコミュニケーションがとれるほどになっていた。

学校訪問によって韓国の教育の成果を見ることができた。教員だけでなく地域の人材を有効に活用し、設備を充実させるなど教育にかかる予算も必要なことではあるが、日本と同様に資源が乏しい国が人を育てることで国を発展させていくという韓国の方針が理解できた。日本と同様に様々な問題点や課題も存在することは、韓国の先生方との意見交換を通してそれらを知ることもできた。教育について共に学んでいくことも私たちにとって有益な事であると感じた。

最高水準の韓国の英語教育

辻脇 昌義

最も有意義であった内容は、何といっても学校訪問及び教育庁訪問である。韓国の教育事情についての説明をいただいた後で、実際に学校を訪問することができたので、国としての教育政策やそれぞれの学校の教育内容や特色についてより理解をすることができた。また教育庁訪問では教育行政の立場での政策を聞くことができ有意義であった。日韓で似ている点、異なる点等々であったが、韓国の子どもの置かれている状況は、受験競争等で勉強が中心で、親も含めて社会全体の教育熱が高く、かなりの時間を勉強に割いている状況であった。また一方でいじめや暴力が深刻な問題となってきており、国レベルでの対策が講じられているそうである。小・中・高と異校種の学校を訪問させていただき、それぞれの学校の施設や授業の見学だけでなく、実際に授業を行うことができたこと、直接生徒や先生方とコミュニケーションできたことが有意義な体験となった。子どもの笑顔は、どこの国の子どもでも素敵である。子どもの笑顔を大切にした教育、子どもの心を育てる教育をこれからも推進していく、未来の社会に繋げていきたいものである。

また、本プログラム参加にあたり設定した課題は、2 点である。1 つは、ESD についての理解を深めること、もう 1 つは、韓国の英語教育、ICT 教育の教育実践を理解することであった。

1 点目の課題である ESD 理解については、ESD 日韓教員フォーラムで講義や両国の教員のアンケート結果、実践発表、グループワーク等により、かなり理解を深めることができた。今回のテーマは学校と地域社会協力についてであり、橋本市立高野口小学校の実践発表も大変素晴らしい内容であると高い評価をいただいた。「時間軸を中心とした過去と現在をつなぐ今の取組から、未来へどのように進化させ、地域社会の発展につなげていけばいいのかが今後の課題である。」と李教授からアドバイスをいただいた。学校と地域社会協力による ESD には、様々な活動方法や活動内容があり、今後、地域、学校の双方がお互いを尊重しあい、それぞれの強みを生かしながら、インタラクティブな活動を積極的に進めていく必要性を感じた。また未来につなげていく持続可能な教育を展開していくためには、学校と地域社会のネッ

トワーク・パートナーシップ構築が重要であると感じた。

もう 1 つの英語教育・ICT 教育実践については、特に小学校における英語教育の取組のすごさに驚かされた。教育課程による正規の授業は小学 3・4 年生で週 2 回、小学 5・6 年生で週 3 回、小 5 は英語専科教員が単独で、それ以外の学年は、担任とすべての授業ではないが ALT が入った形で、教科書を使って教えていた。それ以外に放課後学校で、小学 1 年生から 10 人程度の少人数クラスを編制し、外部の外国人講師が中心となって会話やライティングを行っていた。どの児童も外国人講師の話されている英語を理解しながら、積極的に取り組んでいた。ソウル徳義初等学校はパイロット指定校なので、スペシャルな学校であるかもしれないが、英語教育がかなり強化されており、日本の英語教育についても、今後検討する際の参考事例として考えていきたい。また、ICT 教育については、ICT の授業そのものを見る機会はあまりなかったが、教室環境が素晴らしい、すべての教室に PC、大型テレビが国の政策により設置されており、ほとんどすべての授業において活用されていた。普段の大人や子どもの生活の中にも、PC やスマートフォンが普通に活用されており、日本以上に生活の一部になっていると感じた。日本も、国の政策として教育に一層の力を入れ、各教室への ICT の設備投資を考えていってもらいたいと思った。

その他、ホームビジット、文化公演「ナンタ」鑑賞、ソウル・公州の文化・歴史訪問等、普段の生活や文化、韓国の歴史に触れる機会をいただき、韓国の異文化について理解を深めることができた。

また、本プログラム訪問団のメンバーと昼夜を問わずに一緒にさせていただき、報告書の作成を行ったり、韓国の食の文化を堪能したりしながら、様々な情報交換ができることが大変有意義であった。これからも持続可能な継続的な交流をとおして、お互いの親睦を深めるとともに、今後の教育に活かしていくたい。

積極性の重要さ

山崎 聰司

私は本プログラムに臨むにあたり、2 つの課題を設定しました。

1 つ目は昨年度まで自分が取り組んでいた「小学校における環境教育」に関することを、ESD 教育の視

点から学びたいということでした。

2 つ目は、韓国の進んだ教育（特に英語教育）を多く学びたいという課題でした。

韓国の環境教育については、訪問した 3 つの学校で紹介されました。特に論山女子中学校では「グリーンアースのための Eco Green 環境活動」を行っていることが紹介され、「持続発展教育」という視点で進んでいることがよくわかりました。ESD 日韓教職員フォーラムの中でも「ESD 教育の取り組みには、決まりきった形はない。ESD の根本概念を大切にしながら、インタラクティブな活動を行うことが大切である。」と講義を受けたように、地域の実態に合わせながら、未来に向けての積極的な活動が大切であることを再確認できました。

韓国の進んだ教育については、教育現場を多く見せていただけたことはとても貴重な体験でした。教育設備の充実、児童・生徒の教育を受ける態度がとてもすばらしいことを知ることができました。

また英語に関しては、最初に訪問したソウル徳義小学校では授業では 3 年生以上で英語の授業を行っていることはもちろんのこと、それ以外でも「放課後学校」において、低学年から英語を楽しく、そして徹底的にネイティブスピーカーから学んでいるのを見学できました。英語をはじめとして、多くの外国語を学んでいるからこそ、休み時間に廊下ですれ違った児童は私に積極的に「こんにちは」「おはようございます」と話しかけてくれました。外国語教育で大切なことは「積極的に挨拶ができること」が第一歩であり、とても大切なことを実感しました。

また、本プログラムの中で、特に印象に残っていることはホームビジットでした。訪問先の中学生三年生イ・ユジョンさんは積極的に英語で話しかけてくれました。お母さんからもとても温かい歓迎を受けました。韓国の家庭や文化についてとても理解が深まりました。あっという間の 4 時間でした。私も韓国の先生方が日本を訪れた際には、ぜひ受け入れをしてみたいと感じました。このような個人単位の活動は小さいですが、確実な「国際教育交流」「日韓友好」になっていくと思います。今回のプログラム参加を機会に私も微力ながら「国際教育交流」に貢献していきたいと感じました。

ESDへの目覚めと今後の取り組み

渡邊 明香

日本でのオリエンテーションで、参加する先生方とあまり交流できずに韓国へと旅立ってしまいました。現地で行動を共にするうちに次第に打ち解けることができました。日本全国から参加しているので、各都道府県の様子や校種による違いなど、移動のバスや食事の時に話し会えてよかったです。日韓の比較も大切ですが、まずは日本の中での違いを理解することが大切だと思います。日本国内の比較から学ぶことも多く、自分が実践できそうなことも多く聞くことができたのが収穫です。またこのプログラムに参加し、同じ目標に向かう同士が全国に居るという安心感も得られ、お互いに切磋琢磨により向上していくことができるのではないかでしょうか。

ESDについて不勉強であまり理解せずに本プログラムに参加しておりました。初日のESD日韓教員フォーラムにて講義を受けたり、ワークショップを体験したり、実践報告を聴くことによりESDに対する理解が深まりました。

特にフォーラム内のシステム・シンキングのワークショップが理解を深めるのに大いに役立ち、頭だけでなく体で理解することができました。私にとっては、あのワークショップは衝撃であり、発見でもあります。「たった一人に働きかけるだけで、あつという間に参加者全員に作用してしまうということ。」また「一人に対し多くの人が関わっているということ。」これらを体感できたことで、ESDがより身近に感じられました。

講義や実践報告の中でのキーワードは「未来」だと思いました。現在だけでなく未来を見据えることにより、ESDの方向性が定まり充実した内容になっていくのだと理解しました。

これらの講義を受け、私が現在勤務校で行っている「親子交流会」は、ESDであると確信を得ました。また私が担当している家庭科という教科はESDを実践するのにふさわしい教科であるとも思いました。そこでこれから私は、教科指導を通じて、ESDを取り組み、校内だけでなく地域との連携を深めていきたいと思います。

公募で本プログラムに参加できたことは私にとってとても良い体験となりました。この繋がりを大切にしていきたいと思います。

特色のある教育の取り組み

渡邊 重則

本研修に参加するにあたり、大きく2点の課題を設定した。

1つ目は、韓国の教職員との交流を図ることや教育現場での様子（指導や施設等）を知ることにより、韓国における教育や文化・歴史についての見聞を広め、これから国際理解教育に活かしていくこと。2つ目は、ESD（持続発展教育）について、自身の認識の深化を図ることである。この課題に対し、本研修は効果的かつ有意義であったと振り返る。以下、研修の所感をまとめると。

まず、韓国の教育や文化・歴史についてである。初日に嶺南大学校金教授による「韓国の教育についての講義」を受けた。韓国における教育の根幹についての講義は大変興味深い物であった。各学校に決定権や裁量が与えられていることで、校長主導の特色のある教育が実践できることや放課後学習の時間の設定による充実した学力補充の時間が確保できていると感じた。校長を中心とした学校経営の在り方は、日本での特色ある学校づくりを目指すに当たり大変参考となった。また、訪問先の学校では、教師一人一人が教師としてのプライドを持ち、自信に満ちた指導実践をされているように思った。論山高等学校では教員採用試験の倍率に触れ、教師になることが困難であることやそのプライドの高さも見受けられた。教員の資質の向上については大きなテーマもある。一人一人が充実感や自信を持って職務に当たることできるよう管理職として考えさせられた場面であった。

さらに、訪問先の学校では手厚い歓迎を受けた。その中で、生徒達の民族芸能で出迎えを受けたことが印象に残る。小・中学校における民族楽器を使った音楽の授業は大変印象的で日本ではありませんい授業であった。このことからも韓国の民族性に触れるよい機会となった。特に、論山女子中学校での「アイスクリーム」に関わる論議は、韓国と日本の生徒指導の在り方を問う興味深いものとなった。これらのことにより、講義や学校訪問は韓国の教育事情や文化・歴史に知ることができた。

次に、ESDに関する認識の深化については、フォーラムを通して有意義な時間となった。

清州教育大学李教授の「学校と地域社会の協力」

について講義を受けた。この講義が私自身にとって大変新鮮なものであった。私自身のこれまでの指導において、地域との連携を行ってきたが、地域との協働作業という視点や持続という点で振り返ると足りない面が多かった。自分が取り組んできた活動において、地域は大変協力的であり学校からの指導に関わる提起に対しクレームもつかないことが多い。しかし、持続発展という視点から考え直すと、互いのメリットを共有することで持続が可能となる。その場合、持続できるシステムを構築すること、様々な状況を踏まえた上での地域とのパートナーシップを創りあげることが重要となってくる。このことを踏まえて、今後の地域連携の在り方について考えると共に、各学年の指導に活かしていきたい。

最後に研修を終え思うことは、韓国の先進的な英語教育・ICT 教育等について、研修以前から耳にしていた。研修ではその点だけでなく、多くの先進的な取組に触れることができたことは私自身の教師生活にとって意義深いものであった。と同時に、日本での教育の在り方の良さや地域性など再認識をすることも多かった。今後は、先進的な取組も取り入れながら、子ども達のために目的意識をしっかりと指導にあたっていきたいと思う。



グループプログラムレビュー会議



報告会



A グループの参加者・スタッフ



B グループ参加者・スタッフ

6. 今後の 活動予定

伝える

◆職場・職員に伝える

- ・研修の報告会が予定されているので、教職員に対しては、その場での報告を行う。
- ・本プログラムのような直接交流機会の重要性を発信していきたいと考えている。
- ・次回、参加する同僚がいたら、経験や情報を伝える。
- ・教育委員会に韓国の教育情勢について伝える。特に韓国の英語教育について伝えていきたいと考えている。
- ・職場に復帰した9月10日の校内研修日に、すぐに伝講会を実施した。そこで使用したのが、Bグループの先生方みんなで力を合わせて作成したパワーポイントであった。日本の教育との相違点を中心に先生方に伝講したが、本校の先生方は、とても興味深く話を聞いてくれた。
- ・本校はユネスコスクールに加盟し、ESDの研究に取り組んでいるので、韓国で訪問した先進校の取り組みや地域との連携について学校で職員にくわしく報告することで、情報の共有化を図りたいと思う。

◆児童・生徒に伝える

- ・韓国の教育環境（普通教室、コンピュータ室、図書室、廊下、運動場、給食、授業の様子等）についてパネルなどを使って伝える。
- ・訪問時の写真を見せながら、韓国の小学校と日本の小学校との共通点や相違点について知らせたり、掲示物を使って韓国の文化の紹介をしたりするなどし、異文化についての関心と理解を深めていきたい。
- ・韓国の子どもたちの勉強熱心な姿。
- ・高学年の児童に平和についての授業をする。具体的には、DMZを題材に、平和について考える授業を行う。これまで平和学習は、日本の戦争を題材にすることが多かったが、DMZで見てきたことや、そこに暮らす人々の想いを考えさせたりすることで、いろいろな国やそこに暮らす人たちの想いを知ろうとする気持ちになるきっかけにしたい。また、6年生は総合的な学習の時間に「幸せって何？」をテーマについて学習しているので、平和という観点から問題解決していく場を設定したい。
- ・「DMZ訪問」のことを紹介し平和教育の材料としている。小学6年の国語教材に「平和について考える」がある。教科書では、広島の原爆ドームの歴史を紹介する中での意見文としてまとめられているが、現在、非武装地帯である地の紹介から「昔のことではなく現在や未来のためのこととして考えなくてはいけない」良い教材になると考える。
- ・次年度実施の韓国修学旅行での現地校との交流の事前学習に今回体験した内容を紹介し、より深い理解の元で生徒が交流できるように指導していきたい。また、修学旅行のプログラム内容の検討にも今回知った事柄を活かした活動を取り入れていきたい。隔年で実施している学校行事に国際理解発表会というものがあるので、そこで今回のプログラムの内容およびその体験談を紹介し、生徒の国際理解（韓国理解）を深めるように指導していきたい。
- ・異文化との直接交流の意義を発信していきたい。出会ってきた学校、人、町の様子などの様子を伝えることを通して、自分の目で見る大きさを伝えていきたい。先入観ではなく、きちんと一人ひとりが向き合うことが大切であることを、授業を通して伝えたい。そうした活動を継続することが、勤務校の異文化・多様性を肯定的にとらえる素地を生みだし、交流機会に対する積極的な姿勢を醸成することと思う。

- ・韓国の児童生徒の学習の様子や学校の様子の写真を掲示して広報活動を行った。
- ・朝会で、校長講話として韓国的小学校の実情を話して聞かせた。また、中学生と一緒に制作したうちわやお土産の香炉等も実際に見せて、韓国から遠い昔に受けた恩恵で今の日本があることを児童に説明する。
- ・韓国の子供も日本の子供もみな同じであることを伝えていきたい。
- ・第6学年の社会科の授業を中心に伝えていきたいと考えている。韓国の子どもたちの学校の様子や生活の様子について、写真資料を用い、自分が感じたことも付け加えながら学習を進めたい。それにより、異文化理解、国際理解教育の推進の一助としたいと考えている。
- ・自由学園では、毎朝礼拝があり、また、昼食も全員で食堂に集まって食べ、その時に様々な報告ができるので、今回の研修で見たこと、感じたことを生徒、教員に発表して報告したい。特にテレビでは放映されないことなどを報告したい。

◆保護者・PTAに伝える

- ・学級通信のコラムとして発信し、異文化理解に努めていきたい。
- ・PTA 役員（本部役員）に対し韓国の家庭の状況など（生活の仕方、PTA 役員、歓迎の様子等）を知らせ、理解を深める。

◆その他の公共の場で伝える

- ・商業教育研究発表大会にて、本プログラムでの成果を発表し、愛知県の商業高校の国際理解教育の推進に努めたい。
- ・冊子「愛知の商業教育」に、本プログラムでの成果を報告する。
- ・「異文化理解プロジェクト」でのワークショップで伝える。隣町の「苅田つながる国際交流の会」より、ワークショップのファシリテーターの依頼を受けている。この会は国際交流に熱心に取り組んでいる活動的なお母さんたちで構成されており、また、ワークショップには国際交流に関心のある市民や小学校・中学校の先生方が参加する。国際理解教育の話もする予定であるので、時間が取れれば本プログラムに参加した感想等を話したい。
- ・福岡県公民科研究会での研究発表をする。高等学校では次年度より公民科の学習指導要領が実施される。新指導要領ではESDについての取り組みも求められるので、私が公民科の先生にESDについて説明し、本プログラムに参加した成果も報告できればと考えている。メーリングリストを通して他校の実践例について知る機会があれば、ぜひそのことも紹介したいと思う。
- ・北九州 ESD 協議会の調査・研究プロジェクトチームで報告することになるかもしれない。
- ・12月には研究発表会を予定している。韓国訪問の報告のほか、現地の本屋で購入した教科書にも環境について書かれていたことがあったのでそれも紹介したいと考えている。
- ・本校は、ユネスコスクールとして2年目を迎える。昨年度はモザイクアートという大きなプロジェクトを達成したが、日々の「できることから始めよう」という活動も大事にしている。そこで、今回の成果を、まずは授業や職員研修で発表し、知ってもらうことから始めたいと考えている。
- ・韓国の ESD の取組について校長会や教頭会で説明をする。

改善・新しい取組みに活かす

◆ESD活動に活かす

- ・韓国での取り組みを参考に「つけたい力の系統表」や「ESD カレンダー」の見直しをしたり、地域との連携のあり方について研究を進めたりする。
- ・本校が現在取り組んでいる「郷土の伝統や文化を継承・発展させ、国際社会で活躍する人材の育成」にしっかりと生かしていきたい。韓国の学校におけるESDやEIUについての取組について、本校で実践できるものは取り入れていきたいと考えている。
- ・地域に対して、地域の祭事や地域の伝統文化の継承を実施する。
- ・現在実施しているESDの観点から見直し、より充実したものにしていきたい。これを足がかりにして、ユネスコスクールに申請する。
- ・本校のユネスコ委員会を活性化し、生徒がより主体的に活動できるようにしていきたいと考えている。そして、ユネスコスクールの活動を学校全体、さらに地域へも広げて行く予定である。その一環として、本校で「ユネスコ講演会」を実施する予定である。この活動によって、本校生徒や地域の子どもたちがユネスコ憲章やユネスコスクールなどについて少しでも興味や関心をもつようになってほしいと考えている。
- ・本校の取り組みである「いま昔プロジェクト」を実施する前に、特にESDについての伝達講習を学校内で行いたいと思う。ESDの観点で地域の方と接したり、子どもたちと接したりすることができれば、よりふるさとを意識した活動

になると思うからである。韓国の訪問校や日本各地の先生方の実践事例を紹介しながら、「ESD とは何か」に迫っていただきたいと思う。

- ・世界遺産登録を目指している日本三景の一つ「天橋立」や大江山等豊かな自然環境保護活動への取組や福祉・人権を大切にした共に生きる地域づくりに尽力していきたい。
- ・本年度は地域の方々の協力を得て、本校で大凧を作り、福島県にプレゼントする取り組みを考えている。その活動でも ESD の視点をより生かせるように考えていきたい。

◆教科授業に取り入れる

- ・System Thinking のワークショップで紹介された、人間で地図を作るアクティビティは、中学1年で座標平面を考える時に、原点、方向、長さの単位が必要であることを体験する数学の授業に展開できそうなので、実際にやってみたい。
- ・NANTA のように身边にある様々なものを生徒と一緒にリズムを合わせて叩いて、経験を共感するような機会を探ってみたい。
- ・水準別授業の効果、ネイティブ教師との授業の進め方の改善、古典的、伝統的な活動の継承、学校の成績だけでなく信頼関係を築き多面的な活動を認めるなど、積極的に取り入れ、学校全体で進めていきたい。
- ・本校は、さいたま市の英会話モデル校であるため、韓国の実用的な英語教育を可能な限り取り入れていきたい。従来は、コミュニケーションに偏る活動で子どもの知識に残りにくく、授業で生かされにくい内容であったが、コミュニケーションに固執せず、語呂や文法、会話やジェスチャーが相互に入り混じった授業を構成させていきたい。

◆教材・指導計画に活かす

- ・「異文化理解教育」に関する教材づくりに取り入れる。
- ・総合的な学習の時間の扱いが非常にあいまいになっており、年間を通した目標やプログラムもはつきりしていないため、ESD の視点を取り入れたプログラムを考えたい。特に地域とのつながりが不足しているため、地域の人材や環境を活用して将来にわたって何ができるかを研究したい。
- ・ESD の視点から地域の持つ教育力・人材・施設を見直し、教材を精選することを早急に行いたい。
- ・子どもたちにどんな力をつけていきたいのか、共通理解を深めていく必要がある。

◆その他の取組みに活かす

- ・現在、アートマイルでの国際交流を実施しており、今後は韓国ともアートマイルでの交流が可能か検討している。
- ・私は以前、倫理の授業において、マレーシアで勤務している日本の教員を通して、本校の生徒たちがマレーシアの学生にイスラムの生活の様子について尋ねてみるという授業を行った。言葉の壁はあるが、私自身も韓国の先生方とのメールのやりとりを心がけ、将来的には似たような取り組みができればよいと思っている。
- ・近隣学校との共同学習の計画立案をする。
- ・他都道府県の教育事情を知り、自校で取り入れられる活動につなげていきたい。また、情報共有、授業公開、学校訪問や児童間の交流などに取り組んでいきたい。
- ・韓国で得た情報を生かし、給食費の無償など、保護者負担軽減の働きかけをしていく。
- ・既にある ICT 機器の積極的活用を図る。教室の大型テレビ・電子黒板等をもっと活用できるよう、PC のネットワーク接続・簡単操作できる改良や工夫、さらにソフトの導入など韓国の ICT 水準まで高めていく。

今後の活動を継続する

- ・まずは、自校の教育活動の中へ ESD の取組みをしっかりと位置づけ、よりしっかりと継続・発展できるような体制作りを行う。新しいことを行うのではなく、今までやってきたことを ESD に結びつけ、本校教員や生徒へ理解の徹底を図る。
- ・各ボランティア活動などを継続する。
- ・総合学習の授業によるユネスコの理解教育、世界遺産を含む地域学習、生徒会や部活動が中心として取り組んでいるボランティア活動（ゴミ0運動は環境教育、敬老会への参加は福祉活動、地域での世界遺産の説明会等）を継続させていくことが世界の平和につながっていくと考え、今後、取り組んでいきたい。その成果が現われるようになった時に積極的な交流を進めていきたいと考える。
- ・教科指導に重点を置く。自分の教材研究を甘くせず、しっかりとやる。学習内容をしっかりと身に付けさせる。
- ・生徒指導の面で、生徒の少しの変化も見逃さず、声を掛けていく。生徒から信頼され、話しやすい雰囲気を忘れない。

韓国との交流を実施する

- ・メールを使い、教員との交流を行い、児童生徒同士の交流につなげていきたい。そして、お互いの伝統文化を知り、学ぶ機会を持ちたい。
- ・国際理解教育促進のため、単発的な交流のみならず日常的にテレビ会議等の情報機器を活用した継続的な交流を図る。
- ・生徒会を中心に、スカイプ等によるネット会議や ESD および EIU 活動の情報交換の実現に向けた取り組みを行う。
- ・蒲谷中学校の日本語担当の先生から、本校のハングル担当の教員とのメール交換の依頼を受けた。定期的なメールの交流ができれば、蒲谷中学校の日本語クラスと本校のハングル講座受講生との何らかの交流が実現できるかも知れない。
- ・現在、「ライスプロジェクト」なる活動を通して韓国のユネスコスクール加盟の小学校と交流をしている。秋になると餅つきを行う 5 年生中心の収穫祭もあるので、もう一回「スカイプ」による児童の交流会を実施してみたい。
- ・ホームビジット受入れ家庭の蒲谷中学校の先生とはメールのやり取りが始まっている。このラインを生かして教育交流を進めていきたい。さらに、一緒に参加した日本国内の先生方や韓国の先生方とのネットワークを生かして、互いの実践について交流し合い、ESD や EIU の取組を深めていきたいと考える。
- ・初めは個人的なつながりからスタートする。手紙やメール交換、Facebook などのソーシャルメディアを活用する。
- ・論山高等学校の校長先生から「姉妹校提携」の話があったので、姉妹校提携に向けて校内、教育委員会などに働きかけをしていきたい。そのため姉妹校提携には何が必要なのか今年のうちに調べておきたいと思う。
- ・勤務校に韓国籍の生徒も在籍しているので、生徒を通じての交流を模索したいと思う。
- ・本校を含め本市ではテレビ会議システムを導入し、年間 70 回以上の交流授業を行っている。本校では韓国の韓信初等学校との姉妹校を提携し、元校長先生が遠隔授業を行ってくれた。今後はこの学校以外とも交流を進めていければと考えている。本市では各教室に ICT 機器が設置され、教室発のテレビ会議を行う環境は整っている。普段の授業を通しての交流も行っていきたい。日本と韓国で他に共通するものはないかを探す活動をし、交流できればと考える。

受け入れに生かす

◆次回（2013 年 1 月）の韓国教職員招へいプログラムにむけて

- ・今回の成果や感謝を伝え、日本の現状を知ってもらえるように協力する。
- ・今回の訪韓での各種歓迎会や学校訪問で温かく迎え入れていただいた経験や参加者側として感じたことを参考にして、訪問受け入れ学校の調整や訪問時の内容、体制づくりを考えていきたい。具体的には、韓国教職員がより日本の学校教育の特色に触れることができるよう、日本の教職員や児童生徒との意見交流の時間の確保や学校給食での交流や掃除等の見学、少人数授業や外国語活動、総合的な学習の時間の参観などの計画を考えている。また、韓国教職員による韓国文化の授業もぜひ実施したい。さらに、1 月の交流を機会に、学校間の交流や教職員、児童生徒同士の交流につながるようにしていきたい。
- ・生徒との交流を多く設定して学校訪問を実りあるものにしたい。特に韓国の先生方に授業を行ってもらえば本校職員や生徒には大きな刺激になると思う。
- ・教育委員会として、受け入れ校任せにならないように、連絡を密にして連携していきたい。また、今回韓国を訪問させていただいた他の先生方にも受け入れに協力していただけるように調整していく。
- ・受け入れに向けて、おもてなしの心で気持ちのよい歓迎の準備を進めていく。
- ・全校で温かく「おもてなし」ができるようにしていきたい。そのためには、韓国語のあいさつ、簡単な会話を少しでも全校児童に広めていきたいと考えている。そのためには、外国語活動や昼の放送の時間を工夫して取り組んでいきたいと考えている。

◆その他の取組み

- ・韓国教職員の方々の日本視察などを積極的に受け入れていきたい。
- ・本校のインドの高校生を受け入れに今回の経験を生かしたい。今までいろいろな国の生徒や先生を受け入れてきたが、受け入れられる側を経験した教員はほとんどいない。本プログラムで、受け入れられる側の経験をしたので、その経験を国際交流担当の先生に伝えて、インドの高校生の受け入れがより良いものになればと思う。
- ・まずは自分自身が、ホームビザの受け入れやホームステイの受け入れをしてみたい。のために、ダイレクトコミュニケーションのための韓国語学習をはじめる。

資料

◆資料1.

韓国政府日本教職員招へいプログラム

(2012年8月29日—9月7日:韓国 ソウル、京畿道、忠清南道、釜山)

実施要項

1. 背景

2000年3月、戦後の文部大臣として初めて、中曾根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003年からは「ACCU国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで約1,400名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年10名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005年からは、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして参加人数を20名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され54人となり、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 学校および地域社会における国際理解教育(EIU)と持続発展教育(ESD)の好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

3. 活動内容

- (1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、国際理解教育(EIU)や持続発展教育(ESD)を含む韓国の最新の教育政策・現状の観察
- (2) 訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化やESDの紹介
- (3) 日韓の教職員がESDをテーマに意見交換を行う、約半日の「第5回ESD日韓教職員フォーラム」への参加、および発表
- (4) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

4. 日程概要

2012年8月29日(水)～9月7日(金) (10日間)

7月30日(月)に都内にて事前オリエンテーションを実施

7月30日(月)	東京	事前オリエンテーション
各自参加にむけて準備		
8月29日(水)	東京→ソウル	韓国ユネスコ国内委員会によるオリエンテーション
8月30日(木)	ソウル	開会式 韓国ユネスコ活動及び ASPnet についての紹介 韓国の教育事情についての講義 ESD 日韓教員フォーラム 歓迎交流会
		学校訪問
		ソウルの文化・歴史施設訪問 韓国教職員との交流
		<2 グループに分かれて地方へ移動> 学校訪問 教育長表敬訪問 教育、文化関連施設訪問 情報共有会
8月31日(金)	京畿道 または 忠清南道	
9月1日(土)		
9月2日(日)		
9月3日(月)	慶州 釜山	世界遺産見学 <釜山へ移動>
9月4日(火)	釜山	報告会 歓送昼食会
9月5日(水)	釜山	
9月6日(木)	釜山	
9月7日(金)	釜山→日本各地	福岡、関西、成田空港へ帰国

5. 参加者

下記の教職員、随行員併せて 54 名を参加者とする。

- (1) 2011-2012 年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
- (2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
- (3) 2012-2013 年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (4) 公募により選抜された教職員
- (5) 国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属する学校等から推薦を受けた初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (3) ユネスコスクール、国際理解教育(EIU)または持続発展教育(ESD)の活動に携わっている者、または高い関心を持っている者。
- (4) プログラム参加前の準備、プログラム中ならびに参加後も継続して、ESD に関連した韓国との具体的な交流の推進に寄与できること。
- (5) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (6) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
- (7) 過去の本プログラムに参加がないこと。

7. 評価と報告

- (1) 派遣期間中

- 評価票記入(日本語または英語で記入し、韓国ユネスコ国内委員会へ提出。)
- プログラムレビュー会合(日本側参加者のみによる)への出席。
- 韓国教員を交えての報告会への出席・発表。

(2) 帰国後

- 所定の期日までに、各自、プログラム参加の報告を ACCU に日本語で提出する。
(ACCU による編集の後、実施報告書へ掲載予定)
- 所定の期日までに、各グループの報告を ACCU に英語で提出する。
(ACCU から韓国ユネスコ国内委員会に送付後、韓国ユネスコ国内委員会による実施報告書へ掲載予定)

8. 旅費等諸経費

- (1) 韓国ユネスコ国内委員会が下記について負担する。
 - 往復航空運賃: 日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
 - 韓国内の移動に係る経費、宿泊、食事: 但し、公式行事のない日の夕食については参加者が日当から支出することとする。
 - 日当: 8月 29 日から 9月 6 日の 9 日間分。
- (2) ACCU が下記について負担する。
 - 日本国内交通費: 事前オリエンテーション日の会場(東京)往復の交通費、出発日の空港までの交通費、および帰国日の到着空港からの国内交通費の定額(ACCU の規程に準ずる)。
 - 日本滞在費: オリエンテーション前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。出発前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。帰国日 9月 7 日の日当。
- (3) 各参加者は、下記について負担する。
 - 海外旅行損害保険: 各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
 - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について
 - 旅券(パスポート): 入国時に 3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
 - 査証(ビザ): 一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の逐次通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流課 (担当: 米島)
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
E-MAIL: yoneshima@accu.or.jp

◆資料 2.

韓国政府日本教職員招へいプログラム
(2012年8月29日—9月7日:韓国 ソウル、京畿道、忠清南道、釜山)
日程

日付	宿泊先	時間	活動
8月29日(水)	ソウル	10:00 12:20 14:35 16:30 17:30-18:30	羽田空港国際線出発ターミナル集合 羽田空港発(KE2708) 金浦空港(ソウル)着 ホテル到着 韓国ユネスコ国内委員会によるオリエンテーション 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
8月30日(木)	ソウル	9:00 9:30-10:10 10:20-11:50 11:50-12:50 13:00-17:00 18:30-20:30	開会式 韓国ユネスコ活動及び ASPnet についての紹介 講義:韓国の教育事情について 歓迎昼食会(韓国教職員とともに) ESD 日韓教員フォーラム 歓迎交流会 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
8月31日(金)	ソウル	9:00-15:00 9:00-14:30 17:00-18:40	<2グループに分かれ学校訪問> A: ソウル新龍山小学校訪問(ユネスコスクール) B: ソウル徳義小学校訪問(ユネスコスクール) 文化公演鑑賞「ナンタ」 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
9月1日(土)	ソウル	9:00-14:00	ソウルの文化・歴史の地訪問/日韓教職員交流 北村韓屋村 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
9月2日(日)	A:京畿道 水原市	8:30 10:00-12:00 13:30 14:45-15:45 16:00-20:30	<2グループに分かれ地方へ移動> ソウル出発 → 水原華城へ移動(水原市) 水原華城(世界遺産)訪問 ホテル到着、チェックイン グループプログラムレビュー会議 I ホームビジット 〈ラマダプラザ水原ホテル泊〉
	B:忠清南道 大田市 論山市	8:30 11:30-12:30 13:00 13:30 14:30-15:30 16:00-20:30	ソウル出発 → 大田市へ移動 昼食 ホテル到着、チェックイン 論山市へ移動 グループプログラムレビュー会議 I ホームビジット 〈ホテルインターナシティ泊〉

9月3日(月)	A:京畿道 水原市	09:15-13:00 13:00-16:00	汝山女子高等学校訪問（ユネスコスクール） (学校給食) 汝山女子高等学校の生徒とともに ESD 現場訪問 都羅山展望台・都羅山駅、ヘマル統一村 〈ラマダプラザ水原ホテル泊〉
	B:忠清南道 論山市	08:50-12:30 13:00-16:30	論山高等学校訪問（ユネスコスクール）(学校給食) 論山女子中学校訪問 〈ホテルインターナシティ泊〉
9月4日(火)	A:京畿道 水原市	09:30-14:00 15:00-16:30 18:30	蒲谷中学校訪問（ユネスコスクール）(学校給食) 京畿道教育庁訪問 歓送夕食会 〈ラマダプラザ水原ホテル泊〉
	B:忠清南道 公州市 大田市	09:00-14:00 16:00-17:30 18:00	公州の文化・歴史の地訪問 公山城、宋山里山古墳群(武寧王陵)、国立公州 博物館 忠清南道教育庁訪問 歓送夕食会 〈ホテルインターナシティ泊〉
9月5日(水)	A:京畿道 水原市	09:30-10:30 10:30 12:30-13:30 13:30 17:30	グループプログラムレビュー会議Ⅱ チェックアウト、移動 昼食 釜山市へ移動 釜山市到着、チェックイン 〈コモドホテル泊〉
	B:忠清南道	09:30-11:00 11:00 12:00-13:00 13:00 17:00	グループプログラムレビュー会議Ⅱ チェックアウト、移動 昼食 釜山市へ移動 釜山市到着、チェックイン 〈コモドホテル泊〉
9月6日(木)	釜山	9:00-12:00 12:00-13:30	報告会/閉会式 歓送昼食会 〈コモドホテル泊〉
9月7日(金)		08:40 09:15 10:50	釜山空港発、関西空港へ（KE731、10:05 関西着） 釜山空港発、福岡空港へ（KE783、10:05 福岡着） 釜山空港発、成田空港へ（KE715、12:55 成田着）

◆資料3.

**2011-2012年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト**

<Aグループ>

1. 参加教職員(24名)

団長	A-1	岩本 渉	IWAMOTO Wataru	文部科学省	日本ユネスコ国内委員会 国際交渉分析官
グループ長	A-2	大江 信	OE Shinobu	与謝野町立与謝小学校（京都府）	校長
	A-3	安部 有美子	ABE Yumiko	寝屋川市立第十中学校（大阪府）	教諭
	A-4	藤本 健一	FUJIMOTO Ken'ichi	岡山市立岡山後楽館高等学校（岡山県）	教諭
	A-5	板倉 真由美	ITAKURA Mayumi	岡山市立第三藤田小学校（岡山県）	教諭
	A-6	川上 有正	KAWAKAMI Arimasa	筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県）	教諭
	A-7	川上 麻耶	KAWAKAMI Maya	横浜市立永田台小学校（神奈川県）	教諭
	A-8	北野 勝久	KITANO Katsuhisa	小松市教育委員会（石川県）	指導主事
	A-9	小泉 卓史	KOIZUMI Takashi	学校法人 市川学園 市川中学校 高等学校 (千葉県)	教諭
	A-10	峯岸 愛	MINEGISHI Ai	さいたま市立桜木小学校（埼玉県）	教諭
	A-12	中村 友弥	NAKAMURA Yuya	奈良市立飛鳥小学校（奈良県）	教諭
	A-13	中野 敏昭	NAKANO Toshiaki	福岡県教育庁教育振興部高校教育課 (福岡県)	指導主事
	A-14	中山 明美	NAKAYAMA Akemi	愛知県立中川商業高等学校（愛知県）	国際ビジネス科主任
	A-15	大川 直樹	OKAWA Naoki	荒川区立原中学校（東京都）	主幹教諭
	A-16	小野寺 信弘	ONODERA Nobuhiro	気仙沼市立松岩中学校（宮城県）	教諭
	A-17	佐伯 貴昭	SAEKI Takaaki	熊野町立熊野東中学校（広島県）	教諭(教務主任)
	A-18	関根 寿典	SEKINE Hisanori	成田市立玉造中学校（千葉県）	教頭
	A-19	杉本 伸樹	SUGIMOTO Nobuki	八千代市立大和田西小学校（千葉県）	教諭
	A-20	田中 文子	TANAKA Ayako	福岡県立ひびき高等学校（福岡県）	教諭
	A-21	田中 秀周	TANAKA Hidechika	多摩市立東愛宕中学校（東京都）	主幹教諭
	A-22	田中 誠一	TANAKA Seiichi	大阪教育大学附属高等学校池田校舎 (大阪府)	主幹教諭
	A-23	東垣 茂男	TOGAKI Shigeo	与謝野町教育委員会（京都府）	社会教育指導員
	A-24	土田 恵久	TSUCHIDA Yoshihisa	橋本市立高野口小学校（和歌山県）	教諭

2. 国際連合大学同行(1名)

A-26	秋葉 正嗣	AKIBA Masashi	国際連合大学	大学院事務局長
------	-------	---------------	--------	---------

3. 文部科学省同行(1名)

A-26	佐藤 圭一	SATO Keiichi	文部科学省	初等中等教育局参事官付 専門職
------	-------	--------------	-------	--------------------

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

A-27	米島 百合子	YONESHIMA Yuriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課 係員
------	--------	------------------	----------------------	----------

2011-2012年 韓国政府日本教職員招へいプログラム 参加者リスト

<Bグループ>

1. 参加教職員(25名)

グループ長	B-1	伊藤 公一	ITO Koichi	大和町立鶴巣小学校（宮城県）	校長
	B-2	枝本 亜希	EDAMOTO Aki	岡山市立福南中学校（岡山県）	教諭
	B-3	藤山 里香	FUJIYAMA Rika	千葉県立佐倉南高等学校（千葉県）	教諭
	B-4	飯島 政範	IIJIMA Masanori	さいたま市立ひまわり特別支援学校（埼玉県）	主幹教諭
	B-5	亀井 規生	KAMEI Norio	奈良市教育委員会事務局 学校教育課（奈良県）	課長補佐
	B-6	窪田 崇之	KUBOTA Takayuki	市川市立稻越小学校（千葉県）	教諭
	B-7	熊谷 美穂子	KUMAGAI Mihoko	気仙沼市立小原木中学校（宮城県）	教諭
	B-8	松岡 和俊	MATSUOKA Kazutoshi	岡山市教育委員会事務局指導課（岡山県）	指導係長
	B-9	宮城 明子	MIYAGI Akiko	沖縄県立那覇国際高等学校（沖縄県）	教諭
	B-10	宮成 達啓	MIYANARI Tatsuhiro	八千代市立八千代台西小学校（千葉県）	教諭
	B-11	宮崎 圭司	MIYAZAKI Keiji	福岡県立玄界高等学校（福岡県）	教諭
	B-12	二宮 浩司	NINOMIYA Koji	福岡県立城南高等学校（福岡県）	教諭
	B-13	則武 千裕	NORITAKE Chihiro	京都市立梅津北小学校（京都府）	教諭
	B-14	及川 敦	OIKAWA Atsushi	南三陸町立志津川中学校（宮城県）	教諭
	B-15	岡崎 利夫	OKAZAKI Toshio	与謝野町立市場小学校（京都府）	事務職員
	B-16	佐々木 裕作	SASAKI Yusaku	気仙沼市立浦島小学校（宮城県）	教諭
	B-17	関口 芳平	SEKIGUCHI Yoshihira	小千谷市立小千谷中学校（新潟県）	教諭
	B-18	清水 佐登美	SHIMIZU Satomi	江東区立八名川小学校（東京都）	主任教諭
	B-19	高田 貴	TAKADA Takashi	自由学園男子部中等科（東京都）	教諭
	B-20	田中 誠治	TANAKA Seiji	河内長野市立美加の台小学校（大阪府）	首席教諭
	B-21	谷 慎介	TANI Shinsuke	福岡県立福岡魁誠高等学校（福岡県）	教諭
	B-22	辻脇 昌義	TSUJIWAKI Masayoshi	橋本市教育委員会学校教育課（和歌山県）	指導主事
	B-23	山崎 聰司	YAMAZAKI Satoshi	小松市立今江小学校（石川県）	教諭
	B-24	渡邊 明香	WATANABE Sayaka	千葉県立鎌ヶ谷西高等学校（千葉県）	教諭
	B-25	渡邊 重則	WATANABE Shigenori	与謝野町立三河内小学校（京都府）	教頭

2. 文部科学省同行(1名)

B-26	藤澤 秀俊	FUJISAWA Hidetoshi	文部科学省	国際統括官付 係員
------	-------	--------------------	-------	-----------

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

B-27	霜中 路世	SHIMONAKA Michiyo	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課 係員
------	-------	-------------------	----------------------	----------

◆資料4.

2011-2012 年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム 関係機関連絡先

1. 全体プログラム

◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

協力事業本部協力事業チーム/Partnership & Network Team, Division of Partnership Projects

住所:ソウル特別市中区明洞通り(ユネスコ通り)26 〒100-810

Address: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea

URL: <http://www.unesco.or.kr>

Tel: 82 (0)2 6958 4136 / Fax: 82 (0)2 6958 4254

田宅秀(チョン・テクス) CHUN Taeck-Soo
事務総長
Secretary-General

金承潤(キム・スンヨン) KIM Seung-Yoon
協力事業本部長
Director of Division of Partnership Projects

Group A
徐賢淑(ソ・ヒョンスク) SEO Hyunsook
協力事業チーム長
Head of Partnership & Network Team
E-mail: hsseo@unesco.or.kr

Group B
鄭素如(ジョン・ソヨ) JUNG Soyeo
協力事業チーム
Assistant Programme Specialist
E-mail: syjung@unesco.or.kr

◆教育科学技術部/Ministry of Education, Science and Technology

国際協力官グローバル協力担当官/Global Cooperation Division, International Cooperation Bureau

住所:ソウル特別市鍾路区世宗大路 209 政府中央庁舎 教育科学技術部 〒110-760

Address: Central Government Complex, 209 Sejeongdae-ro, Jongno-gu, Seoul 110-760 Korea

URL: <http://www.mest.go.kr>

Tel: 82(0)2 6222 6060/ Fax: 82(0)2 2100 6133

2. グループプログラム受入れ教育庁

◆Group A 京畿道教育庁/Gyeonggi-do Office of Education

住所:京畿道水原市長安区援助路 18 〒440-702

Address: 18, Jowon-ro, Jangan-gu, Suwon-si, Gyeonggi-do, 440-702, Korea

URL: <http://www.goe.go.kr>

Tel: 82(0)31 249 0114/ Fax: 82(0)31 252 6043

教育長/Superintendent : 金相坤(キム・サンゴン) Kim Sang Kon

プログラム担当/Programme Coordinator : 申承均(シン・スンギュン) SHIN Seung Gyun

◆Group B 忠清南道教育庁/Chungcheongnam-do Office of Education

住所:大田広域市中区文化路 279-2 〒301-705

Address: 279-2, Munhwa-ro, Jung-gu, Daejeon, 301-705, Korea

URL: <http://www.cne.go.kr>

Tel: 82(0)42 580 7232/ Fax: 82(0)42 585 8892

教育長/Superintendent : 金鍾聲 (キム・ジョンソン) KIM Jong Seong

プログラム担当/Programme Coordinator : ノ・チュンドク RHO Choong-deok

3. 受入れ校

Group A

◆ソウル新龍山小学校/ Seoul Shinyongsan Elementary School

住所:ソウル特別市龍山区二村 1 洞 301-75 〒140-855
 Address: 301-75, Ichon 1-dong, Yongsan-gu, Seoul, 140-855, Korea
 Tel: 82(0)70 7841 4706/Fax: 82(0)2 790 3382

校長/Principal : 金鍾徳(キム・ジョンドク) KIM Jong Duk
 プログラム担当/Programme Coordinator : 申英玉(シン・ヨンオク) SHIN Young Ok

◆汝山女子高等学校/ Munsan Girls' High School

住所:京畿道坡州市坡州邑鳳巢里山 2 〒413-862
 Address: San 2, Bongseori, Paju, Gyeonggi, 413-862, Korea
 Tel: 82(0)31 952 2402/Fax: 82(0)31 952 2403

校長/Principal : 金正洙(キム・ジョンス) KIM Jeong Su
 プログラム担当/Programme Coordinator : 金弘洙(キム・ホンス) KIM Hong Su
 崔敬允(チエ・ギョンユン) CHOI Kyung Yoon

◆蒲谷中学校/ Pogok Middle School

住所:京畿道龍仁市蒲谷邑石星路 1176 〒449-815
 Address: 1176, Seokseong-ro, Pogok-eup, Youngin-si, Gyeonggi-do, 449-815, Korea
 Tel: 82(0)31 334 6222/Fax: 82(0)31 334 6224

校長/Principal : 尹用在(ユン・ヨンジエ) YUN Young Jae
 プログラム担当/Programme Coordinator : 鄭善珠(ジョン・ソンジュ) JEONG Seon Ju
 崔英淑(チエ・ヨンスク) CHOI Young Sook

Group B

◆ソウル徳義小学校/ Seoul Dukeui Elementary School

住所:ソウル特別市九老区高尺路 213 〒152-832
 Address: 213, Gocheock-ro, Guro-gu, Seoul, 152-832, Korea
 Tel: 82(0)2 2685 0928 /Fax: 82 (0)2 2685 0938

校長/Principal : 金香南(キム・ヒヤンナム) KIM Hyang Nam
 プログラム担当/Programme Coordinator : 田姓恩(ジョン・スンウン) JUN Sung Eun

◆論山高等学校/ Nonsan High School

住所:忠清南道論山市奈洞 494-4 〒320-030
 Address: 494-4, Nae-dong, Nonsan-si, Chungchongnam-do, 320-030, Korea
 Tel: 82 (0)41 734 3496/Fax: 82(0)41 735 1729

校長/Principal : 尹錫銀(ユン・ソクウン) YOON Suk Eun
 プログラム担当/Programme Coordinator : 金甫旼(キム・ボソン) KIM Bo Seon

◆論山女子中学校/ Nonsan Girls' Middle School

住所:忠清南道論山市中央路 325 〒302-804
 Address: 325-gil, Jungang-ro, Nonsan-si, Chungcheongnam-do, 302-804, Korea
 Tel: 82(0)41 735 2752/Fax: 82(0)41 732 3895

校長/Principal : 文日圭(ムン・イルギュ) MOON Il Gyu
 プログラム担当/Programme Coordinator : 金明煥(キム・ミョンファン) KIM Myung Hwan

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2012 年 9 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email exchange@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by Hokuetsu Printing Inc. [200]

©2012 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)